業務資料No. 603

KAPUTI MENNONITA

ーチャコ戦争における鋤と銃ー

1981年3月

国際協力事業団

RY

KAPUTI MENNONITA

ーチャコ戦争における鋤と銃ー

JICA LIBRARY
1028829[8]

編集と序：PETER.P.KLASSEN
スペイン語訳と注釈：KORNELIUS UEUFELD

国際協力事業団
受入月日 84. 3.22
登録No. 01391
708
23.4
EP

はじめに

本書は、パラグァイ国チャコ地方に入植したメノー派の人達の一つの記録である。

メノー派は、オランダ、北部ドイツに生れたキリスト教の一派で、厳しい戒律を守り、独自の文化と伝統を大切にすることで知られる。

彼等は、〝働くことゝ、祈りを捧げることができ、そして子供達がドイツ語と彼等の精神的リーダー、メノー・シオンズの教えを学ぶことのできる平和な祖国〟を求めて、放浪の旅を続けた人々である。

メノー派の人達がパラグァイに移住を始めたのは 1927年頃からで、多くはロシアとカナダからの移住者であった。

最初のメノー派移住者達が定着したのは彼等自身の希望もあり、人里を遠く離れた、しかも苛酷な自然環境の北部チャコ地方であった。この奥地に平和を求めて理想社会を建設しようとしたメノー派の人々は、皮肉にも入植後間もなく、南米最大の戦争 ― チャコ戦争(1932～35) ― に巻き込まれた。

パラグァイ人とメノー派の人達の最初の出会いはこの時にあった。このパラグァイ人とメノー派教徒との謙虚で素朴な出会いを、それを実際に体験し生きた人々の手で綴ったものである。

荒地での開拓に汗を流し始めたばかりのメノー派移住者が、異った文化、異った言葉との出会いの中で何を感じたのか、そしてその戦争による苦しみをいかに乗り越えたのかを知ることは、私共移住業務に携わる者にとって大いに興味のあるところである。業務の参考になれば幸いと考えこゝに印刷に付することゝした。

昭和55年8月

移住計画調査部長

目　　次

はじめに……………………………………………………………………………… 1
緒　言………………………………………………………………………………… 3
序……………………………………………………………………………………… 4
"KAPUTI MENNONITA"の理由 ………………………………………………… 6
メノ派教団のパラグァイ領チャコ入植の歴史的背景………………………… 7
北チャコ－紛争の土地…………………………………………………………… 10
北チャコにおける歴史的出来事………………………………………………… 11
カナダからの土地探索者到着…………………………………………………… 15
勇敢なパイキング………………………………………………………………… 15
"有望な土地"の発見……………………………………………………………… 17
チャコへの踏査…………………………………………………………………… 20
闘いの犠牲者……………………………………………………………………… 26
チャコの土地の所有者…………………………………………………………… 27
ソ連からの難民…………………………………………………………………… 31
パラグァイへの到着：1930 ……………………………………………………… 31
緑の地獄に向って………………………………………………………………… 32
ひと切れのパンケーキ…………………………………………………………… 35
井戸の中の死……………………………………………………………………… 41
らば対牛…………………………………………………………………………… 42
ジャガーとの対決………………………………………………………………… 44
空からの攻撃……………………………………………………………………… 46
無人の土地で……………………………………………………………………… 53
原野の中の線、それは国境だった……………………………………………… 53
チャコへ行くための二つのビザ………………………………………………… 54
政治地平線に出現した嵐を呼ぶ雲……………………………………………… 58
トレボル、軍の要塞となる……………………………………………………… 61
一通の歴史的書状………………………………………………………………… 64

グアホの私の牝馬…… 66
村の泉での親睦…… 70
後陣では…… 75
"ウルタウよ泣け"…… 75
トレド砦…… 76
"夜明けよ、夜明けよ、私の短い命を照らせ…… 81
フレッドエンヘンの爆撃…… 83
フィラデルフィアでの機銃掃射…… 84
私のボリヴィアの捕虜…… 85
フィラデルフィアの病院で…… 88
兵　隊…… 89
見知らぬ兵士…… 91
ロシア刑務所の中でのチャコ戦争…… 93
チャコ戦争中の出来事…… 99
黒パンとの交換…… 99
アルセの池…… 102
バクテリヤ戦争の失敗…… 105
レングア族、戦争の犠牲者…… 106
モリーノ酋長…… 109
遠い平和…… 110
犯罪者部隊にかこまれて…… 111
メノ教徒のスパイ…… 113
カサニージョの十字架…… 115
今日まで私は"EL BOLI"と呼ばれている…… 117
イスラポイの祭日…… 122
イスラポイ病院で元気になった"病人"…… 123
行方不明…… 125
西瓜のもうひとつの売り方…… 128
メノ教徒の荷車…… 131

砲火の中で……………………………………………………………………………135
ポケロンの戦い……………………………………………………………………135
"ポケロン戦闘の終結"……………………………………………………………137
ポケロンのサマリヤ人……………………………………………………………139
一人の敵……………………………………………………………………………140
マヌエルピジャルバ、NANAWAのヒロイン………………………………………141
奇　跡………………………………………………………………………………142
無言の三日熱………………………………………………………………………146
平和、平和…………………………………………………………………………149
チャコへ贈られたもの……………………………………………………………151
エピローグ…………………………………………………………………………155
40年後……………………………………………………………………………155

緒　　言

緒　　　言

ピータは柳の椅子に座り、いたずらっぽい目で私を見て、爆弾を投げるように言った。

"テーブルの上のファイルは私がドイツ語で出版しようと思っている本なんだ。君に読んでもらって、スペイン語への翻訳を頼みたいと思ってやってきた。ドイツ語とスペイン語で出版したいもんでね"

"題名は"とたずねて、ファイルの方へ私は手を伸した。

ピータは私の手を制止して、ファイルの表紙に書れたタイトルを右手で隠して、思込んだ様子で私を見つめて言った。"KAPUTI MENNONITA にしようと思っている"これこそ爆弾そのものだ!

"読む必要なんか無いよ。全面的に協力しよう。タイトルが気に入った。翻訳する価値があるに違いない。話してくれたまえ"

ピータは話した。題材はたくみに選択されている。あの幸せな日々と、窮乏と、そして混乱の中に再び我々が生きているような錯覚をもって、忘れ去られた年月が鮮烈に蘇ってくる。

再び我々はパラグァイ領チャコの砂地での戦闘に参加する兵士となる。

"カランダ(Caranda')"の棒切れは我々の銃である。我々ははると草の影に塹壕を造り、アンデスの終端の境界まで敵を追払うべく訓練を行う。

作業は完了した。私はあの時代とそこに生きた人々のエピソードをできるかぎり読者に再現しようと努力した。も早や、その大方が新しい世代に属している読者のために……。

大部分はごく普通の人々によって書かれたこの本が、壕掘りと開拓のために英雄的に過したあの人達の記念碑となってくれることが私の願いである。彼等はその理想と偉大な祖国のために、自らの青春と、力と、血と命を捧げたのであり、そして我々や、我々の子供の記憶の中でいつまでも生き続けて欲しいからである。

KORNELIUS NEUFELD

序

この本は北チャコにおける特異な出会いを物語るために出版された。

北チャコは"チャコ戦争"、"メノニータ(メノ派教徒)"、"インディオ"といった言葉だけでパラグァイ全体は勿論その国境を越えて数千、数百万の人々の記憶を呼び起す土地である。

パラグァイの北チャコに触れるとき、この三つの想念が必ず浮んでくる。

40年も昔、約 160,000 名のパラグァイの兵士が3年の戦時下に北チャコの道と原野を行進していった。

彼等のほとんどにとって、北チャコは未知の土地であり、約36,000名の兵士達が祖国防御のために命を落した。

大部分の兵士達は北チャコの中心部に建設されたばかりのメノ派教徒の部落を通過した。良くてもインディオの小屋掛け部落か野生の動物しかみかけない荒涼とした僻地にヨーロッパ人の入植者を見て驚いた兵士は少くなかったにちがいない。

Candito A. Vasconsellos 博士は次のように書いている。

"美しい狭谷を渡る今回の行進は心よかった。そこはまるで英国の自然公園のようで、繁栄するメノ教徒のコロニーを囲むように、あるいは横切って、巨大なケブラチョの老木やウルンデエイーラやパラ・トードが一杯に花を咲かせていた。

こうして、我々はトレボルに到着した。

トレボルはチャコにおけるヨーロッパ人の居住地で、豊富な商品を取揃えた店や雑貨店があり、衣類や燃料、上等な飲物はアスンシオンに比べて安く、まるで不思議の国のようであった。

数キロ離れてフイラデルフィアがある。

ここはもう一つの文明化された核である。住民はドイツ語、英語、あるいはロシア語のみを話し、スペイン語を解する者は珍らしく、グアラニ語ができる者は誰れもいない。共通語は身ぶりで、結構問題解決に役立っていた。

子供っぽい連中、つまり将校達は商売を荒しまわり、煙草、懐中電灯用の電池自動ライター等は在庫がなくなるまで目につく物は全部買込んだ"(1)。

戦時下の平和的出会い。

パラグァイ領チャコへ1927年から1932年まで入植したメノ派教徒は、その頃になってはじめてパラグァイ住民を知るに至った。その時代、チャコには住民が住んで居なかったからである。

お互いが最初に抱いた印象はかなり一方的であり、客観的ではなかったとしても、ことさら驚くにあたらない。

メノ派の人達にとって、"兵士"と"パラグァイ人"という二つの概念は一つでしかなかった。

一方、パラグァイ人にとってもメノ教徒ははじめてであった。そして彼等にとってメノ教徒は謎のまゝになってしまったことは確実であると Vasconsellos 博士は書いている。

メノ派の女達は飼っている牛よりも気むづかしかった。

遠くにオリーブ緑の衣服姿を見かけるだけで、すべてを放棄し、家や山中に一目散に隠れてしまった。

誰かが彼女達を利用するときでも、"神がそれを望まれた"と哲学的な答えが返ってきた(父や夫もまたこの調子であった)。

世界中どこでも、子供といえば新しい物好きで、夢中になるものだが、こゝの子供達はあたかも悪魔が彼等を地獄に連れ去るかのように、兵士を見るだけで逃げていった。

戦争初期であればいざ知らず、貧しい人々のこうした行動はチャコ戦争の3年間にも変ることはなかった。

10万人以上の男達が絶えず通過していったにもかゝわらず、メノ教徒は慣れることがなかったのである。(2)

この本の出版の目的はチャコ戦争中のパラグァイ人とメノ教徒との謙虚で素朴な出会いを実際に体験し生きてきた人々に語ってもらうためであり、文学作品の出版を目的としたものではない。

この中には、当時のメノ派の新聞"Mennoblatt"に掲載された40年前の生存者の直接、生の印象をつゞった体験談や、ずっと後になってからの関係者の思い出話等が集録されている。

こうした逸話の収集と選別にはそれほど手はかゝらなかった。理由は"メノブ

ラット"にそれまで載せられた記事が大半を占めたからである。問題は抜粋と整理作業であった。

"KAPUTI MENNONITA"の理由

スローガン、あだ名、手の意味を持つ言葉、つまり冗談、おどし、非難、評価区別や名誉の言葉であった。

パラグァイの兵士達は意味や根拠などにはおかまいなく"カプチメンノニータ"と言った。

カサード港ではパラグァイ人の子供達がパラグァイ河の河岸に沿って"カプチメンノニータ"とどなり、河船の上でも"カプチメンノニータ"と叫びかえしていた。

この金髪の風変りな、見紛うことのない教徒がいくところどこでも必ず"カプチメンノニータ"とあだ名で呼ばれたものである。

"カプチ"とはドイツ語の"Kaputi"が変化したもので、二つの言語が出会った緊急事態の一つの解決方法でもあった。

質問が正しく理解をされようとなされまいと、質問に対する否定的あるいは回避的答えのために使われた。

Vasconsellos 博士は彼の雑記録の中で次のように言っている。

"Kaputi"という言葉そのものは"もうこれ以上無い"とか"終り"といった意味を持っており、煙草カプチ、電池カプチ、カプチカプチなどと使われた。

また、第二部隊の言葉の一部となり、誰某カプチ（死亡）、カプチ水などと使われた。つまり、与えたくない者に対して品切れというのがカプチであり、議論の余地がなくなってしまった場合カプチは最高決定でもあった。(3)

全く異る民衆、全く異なる言葉の出会いには、いくつかの逸話や笑話が生まれるものだ。それは人によって悲劇であったり、喜劇であったりする。

こゝに、その当時の一つのエピソードがある。

ある教徒がスペイン語の単語を初めて覚えた。彼が覚えやすい言葉、気に入った言葉は、不完全ではあるが"ムーチョーリンド"であった。

そして、自分の二頭立の牛車の一頭を"ムーチョ（沢山の）、もう一頭をリン

ド（きれい）と命名した。

プンタ　リエレス、145キロメートル地点へのある旅の途中（古参兵達にとっては忘れ難い窮乏の旅の場所）、この同郷人は牛もほとんど進めない泥んこの道を横切ることになった。

なんたる事ノ路の片側に偶然にも兵舎があった。やがて次のような異様な情景が現れた。

我々の同郷人である教徒は牛馬の上に止まったまゝ絶望的に牛をせっかんしながら、大声で叫んだ………ムーチョ//　ー　リンド//ムーチョ//　ー　リンド//

兵士達はテントの前でそのような絶望的な事態の中で"ムーチョ〜リンド、ムーチョ〜リンドノ"と叫ぶ珍しいユーモア感覚を持った変なメノ教徒を見ていた。

絶望した彼は、馬車の上からあたかもすべてが冗談であるかのように自分を見て笑っている兵士達の堕落したユーモア感覚を内心非難していたのだろう。

つまり、これが現実であった。

本書Kaputi Mennonita はスペイン語とドイツ語で同時出版される。

関係者全員を代表して　　Peter P.Klassen

（※）　Candito A.Vasconsellos 博士：

"第七騎兵連隊　サンマルチン将軍"、アスンシオン、1958。

メノ派教団のパラグアイ領チャコ入植の歴史的背景

メノ派とは一つの宗教団体であり、今日では世界中に広がっている。

その起源は16世紀の宗教改革の時代にさかのぼる。

1525年、スイスのチューリッヒにある宗教団体が幼児洗礼の解釈上の相違、兵役問題及び教会と国家間の協定についての意見から改革者 Zwingli より分離した。

このグループは以後、彼等の信仰と信念を信奉する信者のみに洗礼を与えた。

彼等は"バウチスタ"と呼ばれた。

同じ新教の教会とローマカトリック教会からの迫害が"バウチスタ"運動を北ドイツ全域に広げ、やがてオランダにまで達する力に変えた。

オランダでは1536年、カトリックの司祭 MENNO SIMONS がバウチタス運動の統一を始め、オランダとドイツ北部宗派のリーダとなった。

彼の弟子と信者を今日まで"メノ派"と呼んでいる。

16及び17世紀には、迫害に値して東方、プロシヤ、ブランデンブルグへと退去し始め、ビストラの低地へ到達した。

耕作民族である彼等にとって、打ち続く土地不足がロシアへの移住を余儀なくさせ、カタリーナ ラ・グラスデ女帝(プロシヤのフエデリコ王と親交のあったAnhalt-Zerbst のドイツの姫君)の招聘を受入れた。そして Dnieper の岸辺のウクライナに豊かなコロニーを築いた。

1874年兵役の義務化が実施されたとき、彼等には"無期限"の特典が許される代りに補助兵役(衛生と植林)が課せられた。

しかし、メノ教徒正統派のグループはそのやり方を不満とし、再移住することを選んだ。それがカナダであった。

第一次世界大戦が終ったとき、カナダ政府には法律によって学校の授業に使う言語を英語とすることを義務づけた。

この法律は再びメノ派の人々に問題を投げかけた。彼等の学校ではドイツ語を教えていたからである。

こうして保守派の人達の間にはこの問題を移住地を再び他に求めることによって解決しようとする動きが現れた。

1921年グループの代表が入植に適した土地を見つけ、政府が彼等の特権要求を受入れた後、1927年にパラグァイへの移住が開始された。そして翌年にはメノ教徒のコロニーが建設された。

一方、ロシヤに残ったメノ教徒の集団は急速に発展し、またたくまにヨーロッパ、ロシヤ全域とシベリアのアジア地区境界に至るまでコロニーを作りあげていった。

1917年の共産主義革命後、ロシヤではメノ派コロニーに対する弾圧が益々酷しくなった。

新政府は教会や信仰のみならず、集団主義による私有財産に対しても迫害を行った。

１９２９年、１4,０００人以上のメノ教徒が出国許可を求める集会を首都で開いた。

１９２９年は世界中のすべての国にとって危機の年であった。したがって、自由世界におけるメノ派の指導者達、ドイツ政府、国際赤十字、はては国連にとって、メノ派集団の身受けを確実にするため尽力することは困難な仕事であったがようやく、約5,０００人がドイツ領へ入国することができた。

残りの教徒は明らかな反抗者としてソビエト官憲により連れ戻されたり、あるいは強制労働へと送られた。

ドイツの難民キャンプの人々は新しい祖国を求めた。その当時、カナダは多くのほかの国々と同じように移民への門戸を閉鎖しており、ドイツ自身も政治的、経済的紛争の中で騒然たるさ中にあった。従って、ロシヤからの引揚者を引受ける状態になかったのである。

こうした危機の時代に、メノ派の指導者の視野にパラグァイが入ってきた。そこには、すでに同志のコロニーがあった。また、ブラジル政府はメノ派の制限付き入国を許可し、入植地の選択は各家族の自由に任せた。

こうして、ブラジルとパラグァイへの移住が行なわれ、パラグァイでは１９３０年に FERNHEIM コロニーが建設された。

１９３７年、チャコにおける二度目の収穫失敗と契期に FERNHEIM入植者（意味：はるかな家）の一団がチャコを去って、ロサリオのイタクルビ港の近くに FRIESLAND コロニー（意味：友情の土地）を作った。

第二次世界大戦後、ロシヤからドイツへの難民が再び出現した。その中から多数の者達が１９４７年にパラグァイへ移住し、NEULAND コロニー（新しい土地）をチャコに、また VOLENDAM コロニーをパラグァイの東部、ムボピクア（Mbopicua'）河港のそばにそれぞれ建設した。

カアグアス（Caaguazu'）における二つのコロニー SOMMERFELD（夏の牧場）と BERGTAL（山合いの谷）は１９５０年カナダのメノ派の人達によって建設されたものである。

北チャコ一紛争の土地

１９２０年代メノ派の集団が北チャコへの移住を開始したとき、その土地が争いの土地であることを誰れも知らなかった。

パラグァイとボリヴィアはつね日頃から南はピルコマジョ河（Pilcomajo）、東はパラグァイ河、そして北はパラピチ河（Parapiti）に囲まれた無人に近い、３０万キロ平方メートルに及ぶ広大な土地の歴史上の権利を主張してきた。

しかし本格的な論争は大戦後に始まったといってよい。

ボリヴィアは同盟大国がパラグァイ河に至る北チャコ全土を彼等に認めるだろうと、多いに期待を寄せていたが、それは期待はずれに終った。列強勝国はパラグァイを極度に弱体化させる意志は持っていなかった。つまり、パラグァイは大国の意図のバンパーとして存在しなければならなかったのである。

一方、ルスフォード B・ヘイズ（Rutheford B.Hayes）大統領下のワシントン政府はピラユマジョ河の北に広がるチャコ全体をパラグァイのものであるという裁定を下していた。

しかしながら、この裁定がボリヴィアとの境界問題を解決することにはならなかった。そして、当事国相手方の主張を満足させぬまゝに一連の国境条約が相次いで作られたが、その大半は批准すらもされなかった。

１９０７年ブエノスアイレスで調印された協定により、両国は次のような状態を認識し合った。それは、南緯２０度と２１度及び西経６１度の地域を領土問題の最終決着まで不可侵地帯とするものであった。

しかし、まもなく不可侵ラインの越境と違反が続出し、その結果お互いを非難し合う事態になった。

ボリヴィアは序々に大胆になり、不可侵ラインのはるか内側に軍事拠点を持つに至った。

両国が近代戦の準備を整えると、１９３２年の中頃、戦端が開かれ１９３５年にはパラグァイ軍の勝利で終結するのである。

平和条約は長く困難な交渉の後に１９３８年ブエノスアイレスにおいて調印された。この紛争解決は、今日まで我々が生きてた事を見れば、平和回復に結びついた満足のゆく結着だったと断言することができる。

北チャコにおける歴史的出来事

メノ派教徒の入植

１９１９：メノ派により委託された土地探索人 FRED ENGEN の第一次踏査

１９２１：メノ派調査隊チャコ奥地２５５キロ地点へ入る。パラグアイは法律第５１４号によって特権を与える。

１９２４：カナダのメノ派委員会がパラグアイ移住を決定。

１９２７：パラグアイ領チャコへの最初のメノ派集団入植

１９２８：Menno コロニーの建設。

１９２９：ソ連からドイツへメノ派の脱出

１９３０：ロシアからのメノ派コロニー FERNHEIM を建設

１９３２：ロシヤから逃亡し中国で保護された他のメノ派集団がパラグアイに到着

１９３７：メノ派集団チャコを放棄して、ロサリオのイタクルビに FRIESLAND コロニーを建設（東部）。

政治紛争

１９０７：ブエノスアイレスにおいて北チャコの境界線を決める議定書に調印

１９２１：パラグアイとボリヴィア、北チャコの前進地区に兵力基地を設営。

１９２４：ボリヴィア、サアベドラ（Saavedra）砦の着工決定

１９２８：バングアルディア（Vanguardia）砦の論争。

１９３０：カラジャ（Caraga'）砦のパラグアイ－ボリヴィアの衝突

１９３１：ボリヴィア大統領サラマンカ（Salamanca）のパラグアイ人未占拠のチャコ地区占拠と"チャコにおける要塞奪取"命令

１９３２：チャコ戦争勃発

１９３５：北チャコ紛争の休戦

１９３８：平和条約と境界決定

＋　　：ボリヴィア軍占拠砦

・　　：パラグアイ軍占拠砦

　　　：１９３８年のブエノスアイレス平和条約と境界線

カナダからの土地探索者到着

カナダからの土地探索者到着

勇敢なバイキング

新しい祖国を探し求めていたメノ教徒達は当時ニューヨークに住んでいた資産家の弁護士で退役将軍の Samuel Mcroberts を知った。彼の妻は牧師の息女で貧しいメノ教徒の精神的苦労を良く理解していたため彼等救済を夫に働きかけた。

幸いに Mcroberts氏はワシントン駐在のパラグアイ国全権公使マヌエル・ゴンドラ氏(Manuel Gondora)と彼の後継者エウセビオ・アジヤラ(Eusebio Ajala)氏と親交があった。

この奇遇がメノ教徒の入植地としてパラグアイ領チャコに着目する結果となった。

マックロバーツの部下にフレッド・エンヘン(Fred Engen)(注) というノルウェー人の不動産仲介業者が居た。

彼はすでに1919年北チャコの奥地に危険ともいえる調査を行っていた。

その模様は次のようなものであった。

ボリヴィアからのチャコ侵入計画に失敗したフレッド・エンヘンはアスンシオンに到着し、そこでチャコ奥地への踏査隊の編成に奔走した。

彼の計画は専門家や要員の反対に会ってあえなく挫折する。

しかし名前の通り"勇敢なバイキング"は自分の意志を曲げなかった。

彼の金銭を預かるアスンシオンの銀行が探険の中止か、さもなければ、少くとも"緑の地獄"から帰還しないとそのために彼の財産の送付先を指定するようにとの勧告にもかかわらず、フレッド・エンヘンは北に向い、そこで文明化されたインディオと交渉をもって、幾人かの者達に荒涼とした未開のチャコの内部へ同行することを承諾させたのである。

ピナスコ港(Pinasco)から馬に乗った小人数の一団が荷を背負ったロバをつれて出発した。激しい雨でやし畑や湿地帯は出水がひどく、馬やロバは疲労しきっていた。

しかし、このノルウェー人はすべての障害と戦い、言語に絶する困窮の中で、

"緑の地獄"と呼ばれる奥地に向って西へ西へと前進した。

探険家としての彼の精進とたくみな磁石の操作があったればこそ、あの未開の土地で遭難を回避することができたのである。

長く苦しかった2週間後に、あたりの地形に変化が生じ始めた。最も高い地点に到着したのである。

ある冬の午前6時頃、"レングア"族の小屋を見つけた。彼等はわら小屋の前でたき火を囲み暖をとっていた。探険隊が近づくと、男達が数人立上り、よそ者を出迎えた。

フレッド・エンヘンは彼の訪問の善意を彼等に理解させ、彼等もまたそうであるか、とたずねた。

レングア族は彼等も善意であると答え、寒さに震えているよそ者と火の方へ来て暖まるようにすすめた。

エンヘンはインディオの小屋の近くにキャンプを張った。彼等に対する感謝の気持を表すために、ビスケットを与えたが、ひと目見て何かに似たビスケットを決して食べてみようとはしなかった。

彼等はこの固いかたまりをどうしてよいのか知らなかったので、割り方を教えてやらなければならなかった。

土人達はすぐにこの方法を覚えた。その代り、缶詰は食べず、キャラメルはなめてみた後で口に入れた。

土人達はお返しに蜂の巣の密を分けてくれて、よそ者にその食べ方を伝授した。

フレッド・エンヘンは彼の新しい友達にこのような土地をほかにも持っているかとたずねた。これに対して、原住民達は胸を張って彼をそこに案内する準備に取りかかった。

現在、Menno コロニーの土地の一部となっているその高原を見たとき、探険家は気に入ってしまった。彼が求めていた土地がそこにあったのである。

高台で、平坦で、豊かな森が至る所にある土地、それは正しく彼がメノ派の農民達のために脳裡に描いていた土地そのものであった。

彼のパトロン、マックロバーツ氏に採算がとれるように、これらの土地について充分な情報を収集した後で、この探険家は原住民である友達に別れを告げ、彼

等に豊富な食物と仕事を分けてくれる働き者で、彼のような白人が沢山やってくることを約束した。

エンヘンが最初に土人の集落を発見した場所が、後になって〃希望の土地〃と命名されたのは決して偶然ではない。

こうして、その名前は今日まで使われている。そこは、あのノルウエー人だけでなく、後日流浪のメノ教徒集団やさらに後にはパラグアイ領チヤコの戦闘におけるパラグアイ兵士達に希望を約束した土地であり、場所であった。

もと来た道をたどって、フレッド・エンヘンと彼の勇敢な一団はピナスコ港に着き、こゝからアスンシオンに帰還した。

彼の友人達は元気で無事な帰還を大変喜こんでくれた。勿論、彼の財産を預った銀行も同様だった。

計画通りに事が運んでいれば、マックロバーツ将軍はその時ブエノスアイレスに滞在しているはずであった。

フレッド・エンヘンは踏査の結果を報告するため、直ちにアスンシオンに来るよう依頼の電報を打った。

Martin W.Friesen

（注）カルロス・カサード（Carlos Casado）にある146Km地点の駅は1929年北チヤコにおいて他界した勇敢なバイキングを記念して〃フレッド・エンヘン駅〃と名付けられた。

〃有望な土地〃発見

マックロバーツ氏は予定通りブエノスアイレスに滞在していた。

大西洋横断旅行中、マックロバーツは二人のパラグアイ高官と出会った。一人はすでにニューヨークで面識のあったマヌエル・ゴンドラ大臣で、次期大統領に選出され、パラグアイへの帰国途次であった。

もう一人は次期大統領と同行していた現職外務大臣のエウセビオ・アジャラ博士であった。

ゴンドラ氏は1920年8月15日共和国大統領に就任することになっていた。

マックロバーツは前にメノ教徒の問題を彼に話しており、今回再びこれについ

て会談した。

二人の公職者はその農業集団に興味を示し、マックロバーツをパラグアイへ招待した。

マックロバーツは約束はしなかった。事実、その時までパラグアイのような貧しく、大して重要でもない国へメノ教徒達を送り込む可能性を真剣に考えたことがなかったのである。

彼の今回のアルゼンティンへの旅は別の商売によるものであったが、彼の主な考えは、アルゼンティン政府へこの移民集団を引受けさせることであった。

マックロバーツはアルゼンティンに政府高官にまで影響力のある友人達を持っていた。新しい定住の場を探すメノ教徒のため、土地を彼等と交渉するのが彼の意図であった。しかし彼は間違っていた。

たとえアルゼンティン政府が喜こんでそのドイツ出身の労働者集団を受入れたとしても、精神的そして社会的特権を認めはしなかったであろう。

似たような用件で、苦い経験を味わされたばかりであったから………。

こうした期待はずれの状況の中で、アスンシオンからのフレッド・エンヘンの電報が飛込んできた。

電文は次のように書いてあった ——" I found the promissed land "（有望な土地発見）。

マックロバーツはすでにパラグアイ政府の招待も受けており、急ぎパラグアイへ向ったのである。

フレッド・エンヘンは話すべきことが山ほどあった。

考えるべき要点は少なくなかった ——土地、インデイオ、メンノニータの受入れがその主な課題であった。

この探検家によって、インデイオの問題はすでに解決されていた。

彼等は友好的で、敵意を抱くことはないだろう。

未解決なのはカルロス・カサード社がその土地を売ってくれるかということと、パラグアイ政府がメノ教徒が希望する特権要求を承諾するかという二点であった。

コンドラ大統領はメノ教徒の移民問題を討議するため政府要人、取引の代表者、その他関係者を招集した。

マックロバーツ将軍はこのプロテスタントの集団について彼等の歴史やいくつかの大陸における入植地開拓のパイオニアとしての長所を美事に説明した。

出席者は全員一致で移民受入れに賛成した。

しかし、教会承認の問題が残っていた。勿論、パラグアイの公式の宗教はローマカトリックである。

他教に対する政府と教会の寛容さは良く知られていた。と同時に、政府は完全な独立機関として行動できるにもかゝわらず、正教会の意見を尊重することも事実であった。

したがって、大統領はあまり格式ばらない別の会合を召集した。会議の場は二日間遊覧船(クルーザ)に姿を変えた戦艦であった。この大型快速遊覧船は国、教会、軍部の代表者を乗せてパラグアイ河を航行していった。

再び、マックロバーツは謙虚なメノ教徒の集団について語った。

働くことと祈りを捧げることができて、子供達がドイツ語と彼等の精神的リーダー、メンノシモンズの教えを学ぶことのできる平和な祖国を求めて世界をさまよう流浪の民、自分の妻が熱心に救いの手を差し伸べることを願っている人々について………。

マックロバーツの熱意のある説得はすべての出席者の感銘せずにはおかなかった。二日間の討議の船旅を終えて、有名人達がアスンシオンで下船するときには、全体の意見は"メノ教徒シンパ"になっていた。

当時のアスンシオンの新聞はこの歴史的会議の話題を大きくとりあげた。

勿論、メノ教徒と彼等の歴史に関する記事の全部が事実に正確だったわけではない。しかし、メノ教徒とその創設者メンノシモンズの歴史と発展と足跡について初めての記事が書かれたことを考えれば、記事の正確さは大した問題ではなかった。

当事の新聞記事にはこの集団の精神の父に特別な焦点を当て、彼の徳と迫害によって受けた困窮を報道したものがあった。

次に、ある時事解説者がメンノ・シモンズと彼の真実に対する愛についての興味深い一文を紹介しよう。

"メンノ・シモンズは数多くの迫害を受けた。あるとき、この改革者は乗合馬

車で旅をしていた。馬車には数人の旅行者がいた。その時、武装した集団が馬車を止めて、偶然にもメンノ・シモンズに近寄り、旅行者の中にメンノ・シモンズという者が居ないかとたずねた。

その当人は真面目くさった顔で乗客の一人一人に"あなたはメンノ・シモンズさんですか"とたずねた。答えはノーであった。

追跡団の首領は一人一人に対する尋問を聞いて納得し、立去った。

"どんなときでも"と解説者は続けた——"司祭は真実に背くことはなかった。

その時も、彼は自分がメンノ・シモンズであることを否定はしていないのであった。以上がアスンシオンの新聞記事である。

8月27日の夜、外務大臣エウセビオ・アジャラ博士はマックロバーツ将軍に敬意を表して、招宴を催した。ここには、国内の名士のほかにアメリカ合衆国の大使が招待された。

マックロバーツ将軍は米国に戻った。"メノ教徒開拓団"と宣伝発表につとめていたアスンシオン新聞の見出しはしばらくの間だけ紙面から姿を消した。

そして、1921年の6月にはより大々的な見出しとなって再登場するのである。

この一大ニュースは再び沈黙することはなかった。メノ教徒のパラグアイへの移住が現実となったのである。

Martin W.Friesen

チヤコへの踏査

1921年5月、カナダ、メノ教徒の調査団が開拓地を求めて、北チヤコへ入った。

彼等はカナダ、マニトバ(Manitoba)州に住むメノ教徒の代表団であった。

彼等はアメリカ人の弁護士マックロバーツ将軍との間にはあらかじめの連絡がとられており、また、北チヤコに"平和主義者"の国づくりを夢見ているノルウエー人の将軍代理人フレッド・エンヘンとも既知の間柄であった。

1920年9月、マニトバのメノ教徒は代表団として Bernard Tows , Isaak Funk , Jakob Derksen , Johann W.Neufeld , Johann J.Pri-

esen を指名した。

カナダ、メノ派移民の経歴については、Walter Quring 博士が彼の著書の中で次のように述べている。

"ロシアのドイツ人は祖国を探し求めている"(Heinrich Schneider 出版社、Karlsruhe, 1938)。以下は入植者達を記念する意味で、その本の一部を抜粋したものである。

"アルゼンティンの首都から近郊へ数回遠出をしたあとで、1921年の復活祭の日曜日、調査団の一行五名と通訳一名はホセ・カサード氏の引率で、新しい祖国を求めてパラグアイ、アスンシオンに向かった。

パラグアイの首都には3月31日に到着し、数日後の4月4日、後に共和国大統領となったエウセビオ・アラジヤ博士との会談に入った。

同じ日、マヌエル・ゴンドラ大統領に会い、精神的特権の嘆願書を提出した。

50分の接見の間に、カナダ、メノ教徒の移住に関する覚書の中に定める項目といくつかの問題点を解決することができた。

パラグアイ政府は当初から、称賛にあたいするメノ派農民の移住に対し好意を示し、彼等が実行中の作業をできるかぎり支援した。

問題はルーマニアほど広大な未開と未知の土地を開拓する意志のみであった。

500万ヘクタールに及ぶ同地域の一部は1885年に政府がカルロス・カサード社にDM 0.353で売却していた(現在の約G9に相当する)。このチヤコの土地と森林は価値がないと判断したためである。

4月9日、一行はアスンシオンを出発し、目的地カサード港に向かった。

ホセ・カサード氏はアスンシオンで一行のために携帯用ベッド、マット、蚊帳などを調達し、調査団に同行した。

目的地へは同月の13日に到着した。

一行は此処でカサード氏の客として扱われ、一軒の家と一行の世話をする土人の下男が一人あてがわれた。

七週間の旅を経て一行はパラグアイ領チヤコに到着し、調査と研究を開始することができた。彼等は全く新しい世界に居た。彼等の新鮮な感動には際限がなかった。

パラグアイ河の岸辺には、はてしない原生林が続き、とげのある乾いたねじれた木が数100キロに亘って平地をおゝっていた。

直ちにチヤコの深部に入り込むことは不可能だった。強い雨によって、広い流域は水びたしになっていたからである。

約三週間、彼等は港に足止めされ、カルロス・カサード会社の近くの農場や工場へ短かい旅をするだけだった。

カサード氏の庭にある熱帯植物と果実には、マテ茶、オレンジ、レモン、バナナ、マンゴ、パパイヤなどがあり、一行の注意と興味を引いた。

これらの植物、果実及び樹木は彼等の環境や献立表、将来の生活の一部となるものであった。また、パラグアイ産の重要な根菜であるマンジョカやさつまいもはすぐに知られるようになった。

また比較的短い期間に何千人という入植者の主食の一つとなった黒いへそを持つ小さなまるっこいいんげん豆"ポロト　セニョリータ"(POROTO SEÑORI-TA)には気がつかなかった——とはたして誰が断言できるだろう?

しかし、ここでは彼等の最も無慈悲な敵、悪名高い害虫"イサウ蟻(ysau')"や"アケケ蟻(akeke)"と蚊を知った。

カサード港の蚊は伝説的な名前でチヤコ開拓の歴史の中に顔を出す。この蚊のことをメノ教徒は"カサードの猛牛(ノビーリョ)"と呼んだ。

一行は彼等に課せられた使命と真剣に取組み、できる限り完全な情報の集収に努力した。また、蟻、穀象虫、蚊といった害虫を注目したように、ばったやひょうなどについても調査をした。

カサード氏は一行に言った——"このカサード港の地域では34年間にばったの被害はたったの一回きり、ひょうが降ったのは二回だけですよ"

(スペイン語翻訳者注:ばったに関するカサード氏の予測は非常に楽観的であった。31年から41年にかけてほぼ毎年、ばったによる大きな被害が続出したからである)。

一行の一人、J.Neufeld 氏はカサード氏の庭にカナダ産の少量の麦を播いた。やがてチヤコ奥地の踏査から戻ったとき、立派に成長した麦を見て大満足であった。

踏査は綿密に準備された。
長い苦しい旅に備えて牛馬や車、食糧が選定された。旅の成否は主としてこの選定作業にかゝっていたからである。
もしもメノ派調査隊の報告が肯定的なものであれば、カサード社所有の広大な土地は驚くほど再評価されるだろう。
また、この土地での生活条件が好ましいものであれば、何千というメンノニータが新しい家庭と新しい祖国をそこに見つけることになるだろう。
ドイツ人一名、パラグアイ人10名、さらにそれと同じくらいの数のインディオ達が調査隊の馬車を通す道を切開くために一行の前方を進んだ。
1921年4月30日、6名のメンノニータのメンバー、FRED ENGEN氏、HELLMUT GAERTNER氏、カサード社のドイツ人社員一名、ほかに17名の同行者の一行は5台の荷車、32頭の牛、12頭の乗馬、一頭のろばと共に出発した。
一行は当時はカサード社の狭軌鉄道の終点であった60Km地点から森にはいり、同日"パラグアイの玄関"と呼ばれる湖水5Km地点に到着した。
(メノ教徒移住が具体化した後に、会社は鉄道を145Kmまで延長し、チヤコ戦争中にはこれを160Kmまで再度延長した。そしてこの終点はパラグアイ軍の基地となった。)
一日目から旅のきびしい苦労がしのばれた。全行程を通して、水浸しとなった道や平原を渡り、沼泥地(PIRIZAL)を横切る羽目になった。
道を見失う危険から、乾期につけられたルートからはずれることができなかった。荷車の直径は2.7m以上あったが、水と泥は時には荷台を越えて、荷物や食糧品をぬらした。
牛がやっと泳いで向う岸へ渡ることもあった。"ピリサル"から40Km地点の"モスキート(蚊)"と呼ばれる小川では特に時間を費した。
この最初の旅で"アメリカの人達"は"PACIENCIA(忍耐)"という言葉を学ばねばならなかった。
一日の目標をたてることなど無駄に等しかった。時々、牛達は臨時のキャンプを離れ、取り戻すのに半日を要したことがあった。
メノ教徒にとって食物も慣れないものだった。種類は乾肉、米、麺、いんげん

にビスケットだった。ビスケットはこれまでに見たこともないような代物であった。まれにインデイオとの物々交換でじゃがいもと西瓜を手に入れることがあった。

１００Km地点で最初のインデイオ TOBAS 族に出会った。彼等の小屋の周りに落花生、じゃがいも、いんげん、マンジョカ、綿やほると草を栽培しているのを見て一行は驚いた。

中背の銅色をした未来の隣人"レングア"族に出会うのは、これよりさらに後のことである。

１９２１年５月１７日、"サン・マルチン・カランダイ"キャンプに到着した。

１７日間にやっと１００キロを走破しただけであった。

ここで、フレッド・エンヘン氏は乾期に輸送された一台のトラックを引取った。

この車でエンヘンは一行に先行して、キャンプ用地や水あるいはインデイオの井戸を探しに出かけた。

河岸を離れるにつれて、一行の期待度のバロメーターは下がっていった。今まで調査したパラグアイ河の岸から"青い井戸"までの約１１５Kmの地帯は農業に向いていなかった。

西に向って北チヤコの心臓部へ１８０キロ進むと、これまで圧倒的だった粘度質の土壌が、ある時は暗い、またあるときは明るい灰色味を帯びた砂質土に変ってきたことに気づいた。勿論、植物も変ってきた。

赤いケブラチョの密生した森林、牧草や椰子のある広い土地は後方に去り、別の草、低くねじれた樹林、とげの多い灌木におおわれた狭隘な土地と入れ変った。

できるだけ広い地域を調査するため、一行は予定のルートをはずれずに馬を横隊に進めることにした。

蚊はこの地域で減り始め、最も高い砂質の平原ではほとんど居なくなった。

１４５Km地点から井戸を掘り始めたが、２〜５ｍの深さでまみずや時には塩水が湧いてきた。

１６５Kmの地点で比較的広い平地を発見した。そこはメノ教徒が考えている入植地には向いた性質を備えており、"希望の平野"と名づけられた。

新しい希望を永遠に表示するため、高さ1.5ｍのケブラチョを切り、その硬い

木に"ME"(Mennonite Expedition)の文字を刻んだ。

ずっとあとになって入植者の一人が車輪(cachape')用に文字を刻んだケブラチョの幹を切ったことがあった。これは"委員会"の命令により、切断した幹をもとの場所に強い鉄帯で取付けなければならなかった。

1921年5月19日、河から約240キロの地点でエンヘン氏は一行が終点に到着し、これより先には進まない。これまで踏査した面積は187,500ヘクタールに相当し、ここから先のチャコは外見的にもまた質においても変らないと言った。

メノ教徒の意見は前進を主張する者と彼に賛成する者とに分れたが、エンヘン氏はきっぱりと旅の続行を拒絶した。

案内人の言葉に負けて、メノ教徒は馬で一日だけの旅を行い、後の"TREBOL"砦近くの地まで足をのばした。ここは1930年、FERNHEIMコロニーの二番目の部落が建設された場所である。

パラグアイ河から約255キロの場所で、エンヘン氏は"URUNDAY"の木に港で準備して持ってきた十字架をくぎで打ちつけた。
十字架には次のような文字が刻られていた。

——McR——CASADO——F.E. C.H. M.E.

XX.V.XXI

文字の意味は、McR=Mcroberts , Casado , F.E.=Fred Engen , C.H.=Carl Hittmann , M.E=Mennonite Expedition——1921年5月20日。

これらの文字の下に、他のメノ派の隊員達がインクペンで署名した。(注)

一行の復路は比較的容易で、大きな問題はなかった。

キャンプ地として指定しておいた場所には、カサード社より送られた食糧品が牛皮の下に、たとえインディオ達が盗もうとしてもひとかけらのビスケットさえもみつからないように保管されていた。

化膿した傷や引掻傷は別として、一行は同年同月の30日に事故や病気もなく無事元気に帰還した。

帰着に当って、160Kmの地点からパラグアイ政府あてに調査の成功を報告し

議会が彼等が申請した開拓の特権を認めてくれることを要望する旨の早便を送った（議会はその頃開催されていた）。

カサード社との土地売買に関する条件を固めて、代表団の一行はカナダへ向けて出発した。ニューヨークでパラグアイ政府からの電報を受取った。電文は上院、下院及び大統領が"メノ派ドイツ人移民のための特別法を公布し、申請通りの特権を認めた"というものであった。———1921年7月26日の法律No514。

〔注〕この十字架は現在フイラデルフィア歴史博物館で陳列されている。

闘いの犠牲者

1921年の我々の移民がパラグアイ領チャコへの入植を開始する前のことであった。

パラグアイの調査から帰った隊員の一人 Bernald Tows 氏は重大そうに私に言った———"ジョン、カサード社が160Km地点まで鉄道を延長するまでは決して契約書にサインしてはいけないよ。交通手段と牛や荷車だけに頼っていては、あんな奥地で生抜くことは容易なことではない。君等が通常往復しなければならない場所には、毎年定期的に1メートルの高さまで出水が起こる"

その時私は彼の言葉に大した注意を払わず、やがてすっかり忘れてしまった。

ずっと後になって一人の老開拓者からぞっとするような話を聞いた。

"とほうもない困窮の中にあって、我々は家族を牛車に乗せて北チャコへの中心へと進んだ。ある朝、すっかり水につかったやしの木の岸辺にたどり着いた。

夜間、強い凍結が生じた。パラグアイの牛達は、誰かが先行しなければ一歩も前進しようとしなかった。誰も氷の上を渡りたがらなかった。私は当時まだ若くて、志願して先達をつとめることにした。キャラバンはやしの木の中を私に従って進んだ。けど、凍った水によって傷めた私の足と健康はその時から再び元に戻ることはなかった"

この老人の話を聞いて、私は Bernald Tows 隊員の忠告を想出した——"～するまでは、決して契約書にサインしてはいけないよ"という言葉を………。

年老いた隊員の言葉を想出すたびに、私の脳裏には多くの反問がよみ返ってくる。

Johann A.Schroeder

チヤコの土地の所有者

カナダのメノニータ移民の土地の売却と移転が完了した後に、パラグアイ共和国大統領は彼等に次のようなメッセージを送った。

" パラグアイ領チヤコ、イースト・リザーブ部落のメノ教徒各位 "

" あなた方が定住される土地の所有権を既に取得され、家屋の建築、畑の耕作、部落の設計、教会と学校の設置、つまりチヤコにおける生活と労働の組織化に着手されたという報告を受けました。

この情報を前に私の心は大きな満足感にあふれており、このさいさきのよい機会を利用して、あなた方の事業の成功と新しい家庭の幸せを願います。

パラグアイ政府及びパラグアイ国民は深い親愛感を持ってメノ派の人達の奮闘を見守っています。

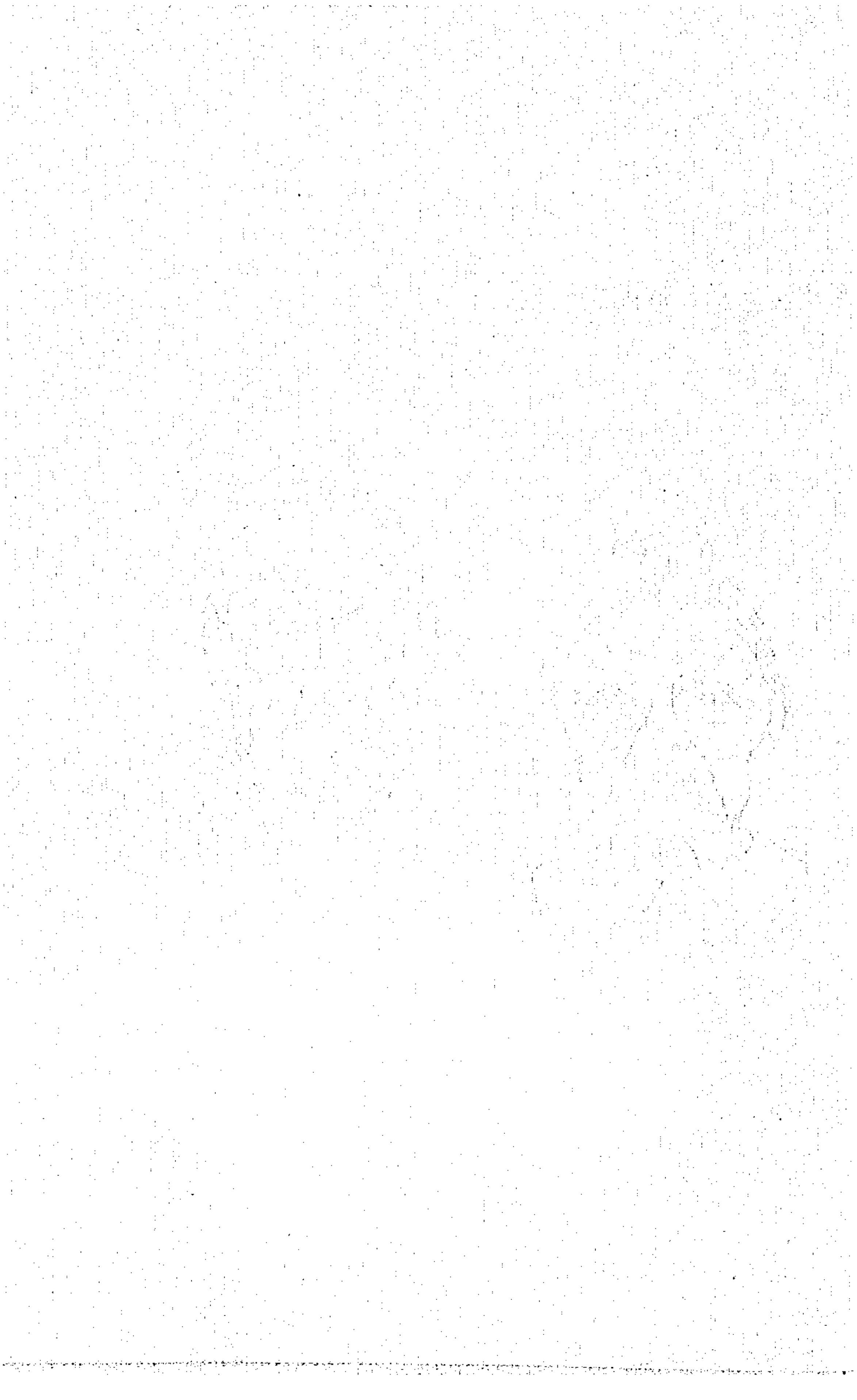
取得された所有権は我々の法律によって充分保証されており、さらにコロニーとそこに住む人々のすべての正当な利益は国内官憲の必要な保護をいつでも受けることができ、人、財産及び労働の保証は充分配慮されております。

私は神の御加護により、開拓者の皆様が新しい祖国であらゆる精神的且つ物質的恵みを得られることを確信しております。

Jose P.Guggiari

共和国大統領

ソ連からの難民



ソ連からの難民

パラグアイへの到着：1930

（ブエノスアイレスのドイツ字新聞" LA PLATA POST " の切抜き）

アスンシオン発、１９３０年４月２１日。

パラグアイ領チャコに向かうゲルマン－ロシアメノ派の第一団は金曜日" アピペ号"〔船名〕で当地に到着した。

この移民グループは３５７名（男、女及び子供）より成り、1,０００人以上の移住者の第一団である。

彼等は宗教上の理由で新生ロシアを逃れ、パラグアイに新しい祖国を建設するためにやって来た。パラグアイは彼等を喜んで受入れ、数年前カナダから来た同派の人々がすでに享受しているのと同じ特権を付与する。

この新しい移民達は先に定着した同志達の利害を離れた協力と体験を借りて同じ地区に居を構え、早急に事業開始の諸問題を克服し、彼等の期待に反しない未来に向けて再出発することになっている。

遅くない時期に残り二つの移民団が到着する予定である。

パラグアイは、どの政府の時でも常に善良な移民の入植に対しては大きな関心を示し、彼等に援助協力を惜しまなかったものであり、今回、当局がシベリヤからのドイツ人家族に示す関心とは比較にならない。

これらの移民に対し政府が示した栄誉ある観迎の時機には、確かに彼等が国家にとって大きな利益となることが明白であった。

チャコにおけるメノ派入植地には当初から、強い関心が寄せられた。そして頑強で働き者の新しい移住団は最も熱狂的な観迎を受けるのである。

移住者に対する正式な観迎会は" アピペ号" 船上で感動的に挙行された。

出席者は共和国大統領 Dr.Jose P.Guggiari はじめ大蔵大臣 Dr Eligio Ayala，ドイツ大使 Von Bülow，市長 Bruno Guggiari，移民局々長 Genaro Romero 及びメノ派協会々長 Dr.Eusebio Ayala，またドイツ大使夫人やアスンシオンのドイツ人団体の多数の淑女紳士であった。

共和国大統領とドイツ大使の観迎の言葉の後、出席者全員を感動させたすばら

しい歌が唄われた。たとえ多くの人々はドイツ語の歌詩の意味が分らなかったけれども。

次いで大人達が子供達に菓子、果物、おもちゃを配った。

大人どもは新来者達をこの新しい国と住民についていつ果てるともない質問でせめたてた。

一方、大統領は到着したばかりの移民の間に入り、子供達の金髪をなでたり、大人達には元気づけとやさしい言葉を与え、逃れて来たロシアでの体験や長い旅での出来事をたずねたりした。

市長 Dr.Bruno Guggiari は大統領の兄弟でドイツ語を話すため、通訳の役目を立派に果した。

大統領は船を去るに当って短い別れの言葉を残し、その中で新に到着した人々がパラグアイで真の祖国を見つけることを期待すると述べられた。Von Bülow 大使はこの言葉を通訳し、移民達は熱烈に"エル・パラグアイ及び大統領、万才!"と答えた。

選ばれた随員を乗せたランチが船を離れるとき、数百人の男と女、若者と子供達は励ましの言葉と行為に感謝して彼等を見送った。

まもなく、アピペ号はアスンシオン港を離れ、針路を北にとって一路カサード港に向かった。

緑の地獄に向かつて

約一週間の長く単調な旅を経て、夜が明け染める頃、船はカサード港に到着した。

最初に船に登って来た背の高い精悍そうな男は我々に向って、力強くまじめな調子で"Goode Morjes"(おはようございます)と挨拶した。

見知らぬ国の見知らぬ場所で我々にこんな挨拶をする親切さを想像していたゞきたい。なんのことはない、彼は我々の同志で G.G.Hiebert といい、MCCの代理人で、我々のチャコ到着の準備のための一足先に来ていたものとわかった。

145Kmのプンタリエンス(終点)までの輸送列車が出発する数日間、我々はカサード港の仮小屋に泊った。

この待っている間に、我々はこれから先のパラグアイ生活にちょっぴり慣れる時間とチャンスを得たし、また、パラグアイの生活や習慣を観察することができた。

パラグアイ河は仮小屋からほんの数歩のところにあり、読んだり聞いたりしていたにもかゝわらず、仲間のうちの何人かが河に飛込んだものである。

10月3日、我々は荒涼としたパラグアイ領の中心部に向ってカサード社の汽車に乗込んだ。アスンシオンから MENNO コロニーの一人の同志が我々に同行してくれたが、この人は我々の未来の住家ですでに3年間をすごしていた。

彼の話は我々の不安を解消してくれはしなかった。汽車は拒絶しているような景色の中をつき進んでいった。

ある駅で、一人の若者が私に近づき、興奮した様子で〝とんでもない、俺はここには残らないよ〞と繰返して言った。

彼の悲観論を消すためのいかなる試みも無役だった。彼は我々と一緒に来たことは来たが、チヤコの入植地を永久に去った最初の同志となった。

夕昏れに145Km地点に着いた。駅長 TROXLER氏の指示で我々には夕食が用意され、夕食がすむと夜営の準備をした。

風を避けるために、山積みの板のうしろに、荷物の中から真新しいテントを取出して広げ、毛布や枕を準備して横になり、神に祈った。

次の朝、テントと毛布をたたむと、テントの下に大きなまむしが居た。まむしは、夜中じゆう暖かいテントの下で、恰好な寝ぐらを探していたのであろう。

私の娘は〝パパ、私達を何処につれてきたの？〞といわんばかりに尋問するような目で私をみつめた。

目的地に着くまではまだ長い距離が残っていた。

G.G.Hiebert 氏は我々を運ぶために MENNO コロニーで荷車と牛を借りにいったが、〝牛車〞はなかなかつかなかった。

後になって体験するように、牛の居場所をみつけるのに何時間も要したのである。陽が大分上ってから、ようやく我々の案内人が現われたのであった。

我々はすぐ仲良くなって、彼等を質問ぜめにした。

我々のうちの一人がチヤコの意味を質問した。これに対して、カナダ人の一人

が言葉すくなに答えた――――"チヤコ？それは簡単に言えば、"地獄"、そう"緑の地獄"、まさにそういうこと"。

別のカナダ人は多分"インデイオの狩猟の場"だと言った。

三日間、我々は牛車にゆられて、教徒の最初の部落"Blumental"(花の谷)に着いた。入植者のWiebe氏と家族はその人々特有の親切さで我々を歓迎してくれた。

翌朝、日曜日、我々は最終地、我々の未来の地に向けて旅を続けた。

別の教徒の村、SCHOENTALコロニー(美しい谷)を通過した。人々は教会へ足を運んでいた。

正午近く荒涼とした野原で、つくりかけの一軒の小屋に到着した。

御者は無言で車から降りた。我々は動かなかった。"さて"彼は言った、"着きましたよ。つまり、こゝがあなた方の目的地です"。

私の魂の深部からは思わずうめき声がもれた。"神様、我々をお助け下さい。さもなければ我々は死んでしまいます"。

小屋はパラグアイ協会によって建てられたものだったが、戸も窓もなかった。

トタンの屋根は我々のしおらしい荷物を置くにも充分でなかった。まして300人を収容することなど何をか言わんやである。

我々は「主の日」も無視して、男達は斧を手にとり、急いで丸太や叉木を切って、持ってきたテントで幕舎を張ることにした。

陽が沈む頃、小さなテントの町ができあがった。以上の事はすべて新世界征服について大作家達が描いた冒険話に似ていた。

協会の小屋で日曜日の礼拝を行うというお触れが急いで伝えられた。我々は全員出席した。礼拝が終ると、みんなは自分達の新しい住居で休息するためにめいめいのテントに戻った。

子供達が刈り取った"にがい牧草"の上に毛布を広げて寝床をこしらえた。そしてぐっすりと眠った。

次の朝、毛布をたたむと、牧草の下に再び一匹のまむしを見つけた。

Peter Rahn

ひと切れのパンケーキ

私達はアスンシオンの居心地のよい我が家に居る。家族は四人。6才と4才の男の子、エルガと私。

チヤコについて話すことはあまりない。エルガと子供達はアスンシオンで生れ、ほとんどチヤコを知らない。

しかし、たとえば今日のように、パラグアイ領のチヤコが話題になることもたまにはある。昨日もそんな一日だった。フィラデルフィアからのおばあちゃんから玉子、にわとり、バター、チーズと手製のパンのこね玉の小包が届いたのだ。

家族は大喜びだった。私達は生活に困窮しているのではないし、不足があるわけでもない、よく言われるような"うえ死に"などするわけではない。だけどチヤコの"Oma"から送られてきた手製のパンケーキ、太った大きなにわとり、バターやチーズなどの品物は我々にとっても嬉しいものである。そう、それこそ嬉しい品物なのである。こうした品物の小包が着くと、子供達は馬子のように歓声をあげ、無邪気な質問を矢継早にあびせかけてきても驚くにはあたらない。

パパ、オマはとってもお金持で、そしてとってもいい人なんだよね、そうでしょう?

おばあちゃんは沢山牛やにわとりを持ってるんでしょ、パパ?

ママ、チヤコには一杯きれいなものがあるんでしょ、チヤコにはなんでもあるんでしょ?

子供達はパラグアイ領のチヤコを想像してこんなことを言う。彼等はチヤコを知らない。現在のチヤコもまして過去のチヤコなど何も知らない。

彼等にとってチヤコは"牛乳と蜂蜜が流れる"国である。

神様、他の人達(我々)がたどって来た道を決してくり返さないように、子供達を守ってやって下さい。

エルガは今日のデザートにとてもおいしいパンケーキを作った。パンケーキは彼女が作り方を知っているからうまいのだ。そして子供達は当然のようにおいしいパンケーキを知っている。子供達のとり交している会話で、幼い時の古い想い出が甦ってきた。一度も口にすることができなかった一切れのパンケーキの想い出である。それはもうずっと昔のことだ。28年も前になる。

私がぼんやり宙をみつめていると、長男が気づいて、

パパ、パパはパンケーキがきらいなの？

と言った。その言葉はある感動をもたらしたのである。

オスカル、よくお聞き。あるとき一人の少年が居た。多分お前よりちょっと年上だった。

そして私はあの一切れのパンケーキの話を彼に聞かせることになった。

もうだいぶ前から僕は痛くなるような空腹を感じながら、ひっくり返えした箱の上に座っている。

まったく腹がすいた。ここ何日、いや何週間も空腹の連続だ。もし人間が飢えに慣れることができるものなら、僕などとっくに慣れっこになっているにちがいない。だけど、それならば暑さや、脂垢や、渇きや、虫にも慣れなければならないだろう。

"緑の地獄"へ僕達を運んだ小さな河船を降りて以来、獰猛なしつこい畜生に追いかけられているような飢えと暑さと垢だらけの毎日が続いた。

数週間前に僕は１２才になったばかりだった。が、自分達の置かれている環境が不安定で、野蛮な状態にあることをはっきり理解出来ると考えていた。いや、いゝ直そう、初めからそんなことは分っていたし、そう生活してきたのだ。時の経つに従い、それにも無感動となり、今ではもうどうでもよくなっているが。ともかく、その時の最も重大なことは、何か食べ物を手に入れることであり、更に重大なことは、たらふく食べること、へどが出るほど食べてみたいということであった。食い物は、僕にとって、世の中、全世界の中で何よりも重大なものとなっており、それしか頭中になかったのである。

心を動かされるものは何もない。僕達のこれからの住家を建てるために山で木を切って帰ってきたばかりの兄にも関心がない。垢と汗と塩に汚れた破れたシャツをぬいで、刺のあるいなご豆の木の枝の上に掛ける様子を見ても何も感じない。

焼けるような太陽に３０分もあてれば、そのシャツは古グツのように硬くなることを僕は知っている。

兄はまたそんなシャツを着るんだろう。

さっき大声でシャモジを持って来いと叫んでいたから、一時間以内に、ぐしゃ

ぐしゃ髪の頭を同じシャツにつっこんで、黙って挨拶もしないで、あのケブラチョやいなご豆、りゅうぜつらんの森の中に入っていくのだろう。ただ"セニョリータ"いんげん豆を一皿かけこむだけのために戻ってきたんだ。皿にあるものは何でも、穀象虫や尺取虫、北風が野天火にかけた鍋に吹込んだ砂までも飲み込んでしまうだろう。午後からは、村の指定場所での飲み水用の井戸掘作業が割当てられているので、急がねばならないのだ。そこにはやがて我家が建つはずである。

大人達は全員が交替で昼も夜も休みなく水を求めてその場所を掘っている。

水は大切だ。死活問題だ。食い物よりも睡眠よりも大切だ。近くの部落では、男の人が井戸の中に埋まり、そのままになってしまったこともある。

土壌は砂が多く、木の枠では砂の重圧が耐えられず、壁面がくずれて、彼の墓穴となってしまった。彼を引っぱり出すには大きな穴を掘らなければならなかった。そんな作業だけでもはかどらなかった。彼は死んでいた。けど死んだようには見えなかった。乾いた細かい砂が死体を保護したのである。隣りの女が"そのままにしておいてやれたのに"とつぶやいていた。しかし、作法通り聖歌とお祈りでキリスト教徒らしく埋葬した方がよかったし、より上品だった。

しかし僕の関心は別にある。

腹がすいていた。猛烈に腹がすいていたのである。一時間程前、僕も"インディオ"の井戸の中に居た。それはキャンプ地の中央にあって、僕達のグループがそこで仮の小屋を建てていた。この"インディオ"の井戸が28戸の水をまかなわねばならない。井戸水は僕達が着いたその夜の内にすっかりくみほされてしまった。

次の朝、グループの代表者が入浴と洗濯に水を使用することを禁止した。この貴重な液体は飢えと渇きを癒すという目的のために厳重な配給制が採られた。

数時間、僕は同じ年格好の男の子と二人で井戸の底に居た。二人とも空きカンをかかえて、井戸の底に押しあてていた。そこにはわずかに浸み出てくる水が集められ、ひもでつるされたブリキのおけに移されていた。

しかし水おけは決して一杯にはならなかった。というのは、上では女達が昼食用に水さし一杯分の水を手に入れようと列を作っていたからである。

腹がすいた、何か食べたい。15分も前から僕は姉を見ている。

〝セニョリータ〞いんげん豆が急仕立ての僕の席から二歩のところの鍋の中で煮えている。昨日も一昨日も同じ豆を食べた。明日も明後日も食べる同じ豆だ。

ある者は、慢性下痢にもかかわらず、豆を丸飲みする。この慢性下痢には殆んどの者がやられている。多くの者はどんなに料理してもそれを消化出来ないし、これ以上どうにもならないのである。

テントの中には、17才の僕の姉マリアが居る。彼女はもう豆を消化することができない。兄と僕が掘っている便所までの15歩さえ歩くことができない。

マリアには便所まで行く術がないし、用を足す手立てもない。僕はまだ幼なすぎて、こんなことを知ってはいけないだろうが、みんな知っている。

ある夜、医者のようなのが来た。名前はよく想い出せない。エドガールとか、エディガール、そんな名前だった。

彼は同種療法医で、ここから約70キロのカンポ・エスペランサの近くに畑を持っているそうだ。往復では5、6日もかゝるということになる。

腸チフスの流行を抑えるためにしばらく部落に来てもらった。僕は母と低い声で話している彼のシルエットを夜空の中にはっきりと見た。

小さな管から何かをとりだして母の手のひらにのせた。そして彼が母に言うのを聞いた。

〝3時間おきに5粒、そして食事は柔かいものだけにして下さいよ〞柔かい食事だって、何ということだ! 俺達の持っているものの中では〝セニョリータ〞豆が一番柔いのだ。だけど僕達はマリアの食べ物をもっと柔くしなければならない。数日前から彼女の皿はそのままになっているのだから……。

男が立去ったとき、パパがテントの前で思いに沈んだ様子でつぶやくのを聞いた。

〝それだけか?〞

そして、長い沈黙の後で、

〝大きな木箱を持ってきていたらなあ。それに道具も一緒だ。ならばいい材料を手にしてちゃんとしたものを造るのだが………〞

〝シーシーシー、そんなこと言わないで!

ママは、つぶやいているパパを制した。しかしパパは悲しい独言を続けた。

"多分、やわらかいボラチョの木を使えば……"
"シーシーシー"また、ママの低い声がした。
とにかく、マリアの本当の状態はそんな風であった。

姉ルイサの行動がおかしい。何か隠しているようであやしい。
俺は自分を自己暗示にかける。確かに俺に何かを隠したがっている。不信の目で俺を見ているようだ。
北風を避けてテントの後ろにもう一つの炉火があった。火の上で何か特別な料理が作られている。
俺の本能はこの敵意を感じる雰囲気と原始的環境の中でとぎすまされてきた。
知っているぞ、彼女は何かうまいものを作っているんだ。最後に残った何かを誰かのために。誰かにだ。俺にではない。
木箱にある密封された缶の中に、別の世界の宝物が残っていた。別の世界、きれいな皿、きれいな衣服、ベットとシーツのある家、街路と庭、病院、医者と薬のある世界、牛乳、卵、果物のある世界、飢えも、渇きも、暑さも、汚れた垢もないところ。
ルイサは缶の一つに数個の卵が消石灰の中に保存されて残っているのを見つけていた。別の缶にはとけたバターが残っていた。ほんの僅かしかない、だけど哀れな死にかけた病人にさゝやかなおいしいものを作ってやるには足りるだろう。
多分、余るだろうから、余った分は赤痢にかかって衰弱しているパパとママのものだろう。皆様の分はありはしない。家族8人なんて多すぎるんだから。
俺の本能、つまりよくいう"第六感"という奴はそう判断した。しかし俺のはげしい食欲はサマリヤ人のような感情によって静まることをやめない。
腹がすいた。俺が世界の中心だ。誰よりも俺が真先なのだ。誰もこんなうまいなにかを俺から奪い取る権利はない。
テントの後ろでは夢のようなパンケーキが作られているが、誰も俺にはくれたがらない。俺を排除し、俺をないがしろにするのは不当だ。理解できない。
しばらくして、僕達はケブラチョの木がつくるわずかな日蔭の下で、ひっくり返した箱に座って、いんげん豆を飲み下す。

ルイサはテントの入口で、手に皿を持ってマリアに食事を与えた。皿にはパンケーキがいくつか残っている。ルイサが無言でパパの前に皿を差し出す。羨望と食欲が今にも爆発しそうだ。嫉妬妄想で喚きどなりたい。

ようやくの思いで黙っていると、パパがママに言う。――〃ママ、取って。みんなで分けよう。一番下の子にはいいところをやってくれる。一週間近くも赤痢で苦しんでいるし、井戸の底に居て相当疲れただろう。大人並に働いたんだから。銘々自分の席について自分の分を取りなさい。そう、このようにあるべきなんだよ。

我々はここに居る、そしてここに残る。我々は助言者であられる主のおみちびきによってこゝにやって来た。我々が偶然や気まぐれで、こゝにやってきたと思うことがあってはならないのだよ。今まで通り、ここで働き、それはずっとずっと永遠に続くのだ。

こゝで仕事をし、我々が持っていたものと失ったものを取戻すように努力し、我々の目標と達成を確信し、信念を持って戦わなければならない。

お前達はこゝで成長し、やがて大人になる。私が埋葬されるのはこゝだし、墓がたてられるのもこゝなのだよ。

病気で衰弱したマリアが居るテントの方を向いたパパの気難しげな視線を僕はとらえることができる。すると今度はパパが僕の汚れてやせた顔をのぞきこむ。

〃チビ、どうした。パンケーキを食べたくないのか？〃。

しかし僕はもう食べられない。一口あじ味することもできない。喉が詰まりそうだ、窒息してしまいそうだ。

もうこの世ではなんにも味うことができなくなるだろう。もう空腹は感じられない。病人も、パパも、誰も、もう羨しいとは思わない。僕は自分が恥かしい。

突然僕は己の汚さ、不潔感に襲われる。洗っていない僕の手と服の不潔さ、何よりも僕の心の中の不潔さ。すると本当に吐き気を催してきた。

〃パパ〃、〃豆を食べすぎたようだ。急いで穴へ行かなくちゃ〃と言うや、僕は穴のところへ行ってもどしてしまった。

Kornelius Neufeld

アスンシオン

井戸の中の死

金曜日の午後四時、我々の村に"人が井戸に埋まった"という恐しいニュースが伝わった。

我々の隣人 Pankrats は自分の土地で飲み水の井戸を掘っていた。彼の義父であるKLEEFELD 入植地（TREDOL に近い第一地区）の H.Kornelsen が手伝っていた。

8 mの深さのところで、娘婿の Pankrats が砂の重圧で壁が崩れるのを防ぐためにトタンでできたパイプを降ろそうと言った。

しかし義父の Kornelsen はかまわず掘り続けることを出張した。

娘婿の頼みにもかかわらず、義父は9 mまでそのまゝ掘り続けた。その時、"早く、ロープをくれ"という老人の悲鳴が聞こえた。ロープが井戸の底に達したときは、Kornelsen は砂の下に生埋めになっていた。

すぐに部落の全員が井戸の周りに集まったが、哀れな井戸掘人は数メートルの砂の下敷になってしまっていた。

勇敢な Frank Deuk が救助のため底に下りたが、引続き落ちてくる静かな砂の雨のため、英雄的な救出の意志を撤回しなければならなかった。

翌朝、住民は再び井戸の再掘を試みたが、大きな崩壊の危険から再びキリスト教的意図を放棄せざるを得なかった。沈痛な面持ちの近親者達はその不本意な埋葬を受入れなければならなかった。

夜、村の牧師が形だけの葬式を行い、住民全員が出席した。

しかし、時間が経っても、近親者達は彼等の良心を妥協させることがなかった。

彼等は井戸の底の家族を掘出すことを決した。FERNHEIM コロニーが一団となって発掘に協力した。部落の世話人の指揮の下に大がかりな発掘作業が始まった。

直径9 mの穴が掘られ、そこに遺跡発掘に使うようなテラスが設けられた。

危険の多い重労働にもかゝわらず、多くの勇敢な村民達の作業と神の御加護によって、一週間後に遺体の回収ができた。

入植地の風土はヨーロッパのように涼しくなく、遺体は相当な腐敗状態にあり、発掘人達は作業を続行するために、度々消毒剤と防臭剤を必要とした。

遺体は棺に納められて Kleefeld に送られ、村の墓地にあらためて埋葬され

た。

不運な彼は54才だった。妻と5人の子供と10人の孫を残して死んだ。彼の死は我々に二つのことを教えてくれる——第一に、我々はいつでも主と向き合っていること、第二は、こうした危険を伴う作業には充分な注意を払うこと。

Nikolai Wiebe

らば対牛

我々が最も苦労したのは引き牛を使うことだった。我々ロシアから来た入植者は牛ではなく馬の方に慣れていた。我々はいつも馬の話をした。我々の世話人 Jacob Siemens 氏はこの問題にいつも深い理解を示してくれた。

しかし、当時は馬を手に入れることは非常にむづかしかった。仲間の数人がらばを購入することに解決策を見つけた。この動物は、半分が馬、半分がろばで、次のような利点を持っている——飼料が少くてすむ、耐久力がある、重量を引く、30〜40才まで長持ちする。こうした特徴はチャコ入植者にとってはもってこいである。最早、私はこの奇妙な動物を、その意地悪な性質を知らないままに、二頭購入することにした。まもなく、私は彼等をよく知ることになる。

"ブリ"と"ブランコ"、私には良い買物に思えた。特にブリはてっとり早く私の信頼を得た。彼は働き者で、経験もあり、乗ってもよかった。頭には程良く白髪があり、したがって彼は私の好みにふさわしかったにちがいない。

我々は産物をカルロス・カサード鉄道の駅、プンタリエレスまで輸送し、同時にアスンシオンから到着した食糧と品物を駅から部落まで運ばなければならなかった。私は約450 Kgの荷をプンタリエレスまで運んでゆくことを決心した。

MENNO 入植地では、広い砂原で恐れられている有名な"ベレンの丘(Loma Belena)"と呼ばれている地帯を横切らなければならなかった。恐れられているその理由はこれまで幾度となく多くの仲間が荷を引く動物達に反旗をひるがえされた場所だからである。

夜になって、我々はその恐怖の場所に到着した。荷車はゆっくりと砂地を移動した。私は私の仕入れたばかりのらば達の評判を恐れて、荷車を降り、らば達が友人達の笑いや冷やかしの種にされないように後にまわって全力で車の後押しを

した。
私の唯一の目的は無事安全に砂地を横断することだった。その目的は達成された。しかし、私は内心この買物があまり誇らしいものでないことを感じていた。
それは、仲間達が私よりずっと重い荷を運んだことを否定することができなかったからである。
次の日の正午近く我々は POZO AZUL の大きな宿場に到着した。
私は相棒のらばの意地悪な意図を疑うこともせずに良く知られた大きな水飲み場につれていった。
しかし、彼は腹黒い目的を企んでいて、深みの方に私を引きづっていった。
この時、私は決して手綱を放そうとしなかったので、手綱を水中で引っぱる羽目になった。私は空しく手綱を引っぱっていた。
仲間達の高笑いから察すれば、それはおかしな光景だったにちがいない。
やっと我々三人の役者はづぶ濡れ、泥だらけになって脱出した。
翌日はまた別の悪ふざけをした。私はらば達が草を食べるよう解放した。私は彼等をあらかじめ用心して、荷物の一部であるくさりで繋いでおいた。
しばらくして探しにゆくと、全く私の意図とは反対の事が生じていた。
私はくさりを前に向かうように引っぱってあった、が彼等は後向きに引っぱりあって、互いに場所を譲らなかったのである。
らば達は突然そんな膠着状態をやめたかと思うと、私を恐しい力で野っ原の中を引きづりまわしたのである。
多分、ころばされたり、ひっくり返されたりするのは宿命だったのだろう。似たようなケースはいくらもあった。仲間の被害者達は今までも彼等のらばから受けた身体の中に残るキズ跡を見せてくれる。しかし、私は反省や思索にふける時間はなかった。"ブリ"は彼の大きな顎で私に美事な一撃を与え、私は真昼の太陽の下で、さんざめく星群を見る羽目に陥入ったのである。
私には無情なピロ達が遠く離れていくのをかすかに聞く力しかなかった。私が再び立ち上ることができたとき、回転木馬のように、あたりがぐるぐると廻った。
サンソンと千のフイリスチヤ人の歴史が想い出され、私は彼等の同情を感じたのである。

ある日、私は一頭の牛をみつけるため"ブリ"に乗った。

その日は大変暑い日だった。太陽が天空高く昇ったとき、"ブリ"は乗せるだけがその日の仕事と決めてしまって、それ以上のことは何もしたがらなかった。

私が年老いた彼をムチでせき立てると、私を悪くとって、地上すれすれまで太い枝を張っているいなご豆の木に向って全力でかけ出した。私が力一杯引っぱっても無駄だった。"ブリ"は私から解放されるために無茶苦茶だが非常に効果的な方法を選んだのである。いなご豆の木の枝に引掛けられないためには、私は私の"宝物"の背中から急いで飛び降りなければならなかった。

彼は一区切り走り、振向いて──私をうすら笑いで見ているように思えた幸福で満足そうな表情で立ち去ったのである。

私は家までの路を歩いて帰らなければならなかった。真昼の熱い日射しの中を歩き続けながら、ダビデ王の息子、反逆者アブサロンの歴史を思った──"彼のらばも、こんな風に拷問者から逃げたのだろうか?"と。

こうした事があった後で、私はらば達を売って牛を買うことにした。後になって、私のらばに関する苦い体験の大半が、私の彼等についての乏しい知識によるものだということを知った。たとえば、くつわを使わずに"ブリ"に絶対に乗ってはいけなかったのだ。適切な扱いをすれば、らばは良く働く動物であり、また休みが多すぎ、労働が少なすぎることを嫌う動物でもあるということを今では知っている。

Peter H.Lowen

ジャガーとの対決

私が今からお話ししようとすることは、みなさんには非常にロマンチックに思えるかも知れませんが私にはそうではありません。あの滅多にないジャガーとの出合いを想い出すと、今までも私は寒気を感じ、髪の毛が逆立つのです。

Fernheim コロニーの約45キロにあるミナス・クエ(Minas Cue')(180Km地点)へ旅立った夜は、月も星もない真暗らな、生温かいもやの立ちこめた夜でした。私はそこの部隊に品物を届けなければならなかったのです。妻と養母はミナス・クエへの旅には強く反対でした。まして夜の旅などもってのほか

というわけです。ミナス・クエへの道は昔の軍路の名残りで、当時すでに完全に放棄されており、年代を経た草木におおわれていました。さらに、途中には水が無く、まして次の日にもやって来そうな猛暑を考えると、人間にとっても、また動物にとっても危険な旅と言えるものでした。途中には平原など一つもありませんでした、が私は女達の心配を打消しました。それは私がそれまでに同じ旅を何回か経験していたためです。こうして、私は馬を馬車につないで、真夜中に出発しました。

旅に出て数時間して、私は以前のことを想い出していました。あるとき、道から遠くない場所にやわやかい牧草の小さな草原を発見したことがありました。

私はその場所でしばらく馬にえさをやろうと考えました。その場所を除けば、動物達を食べさせる場所はほとんどなかったからです。小道が道路と草の広場まで続いていました。うまく小道の入口に着き、馬達を馬車からはずし、馬同志をつないで、スイスやババリアのアルプスの人達が牛に使うようながっちりした鈴をさげました。心配するものは何もない。馬の唯一の逃げ道である小道は馬車で塞いである。前回の経験から、私は自分にそううけあいました。

静かに後ろ手を組んで、暗闇みの中を徘徊しながら道跡をたどって進みました。

前方へ４０歩、また戻りに４０歩。夜も１１時頃、火をおこして、やきいもをしようと思いついた丁度その時、何か身の危険を感じました。私のすぐ目の前で一匹の獣が恐ろしいほえ声をあげたのでした。

それは、この山林に住む野性動物のうちで最も大きく、最も危険なジヤガーだとわかりました。私は石のように、氷ったようにその場を動きませんでした。波のように寒感が襲ってきました。私はたった一人、夜のもやの中に武器も、懐中電燈も、火も持たずに居るのです。これまでに、チヤコの森の王のほえ声を聞いた経験のある方でなければ、その場の様子がおわかりにならないでしょう。

時間も考えをまとめる集中力もありません。私は本能的に、同じような声でジヤガーに答えました。

しかし私の声は、むしろ船の汽笛に似ていました。私の相手は腹の底から怒ったようなうなり声で私に答えました。

私は稲妻のようにもと来た道を戻り、旋風のように馬車の方へ走りました。

ジャガーの爪が私の背中に喰い込むのを今か今かと感じながら走り、また走りました。私には避難場所までの距離が数レグアにも思えました。馬車にたどり着くと、その下にもぐり込み、車輪の後にひそんで、数分間じっとしていました。

野獣が再びうなり声をあげました。私は両手で地面をさぐって、わらと小枝を探しました。

一握り分を集めると、マッチを見つけて火をつけました。その弱い焔の明りでさらに小枝を集め、火を強めて燃やし続けながら我が身を守ろうとしました。

あらたな恐怖で私の身体は震えました。私の周囲か、もしくはすぐ近くで小枝と葉っぱのざわつく音とジャガーがしっぽで地面をたたいている音が聞えました。

再びジャガーは体の底からしぼり出すようなうなり声に続いて、戦いの叫びをあげました。彼の者は猛烈に腹を空せていたのでした。そして哀れにも私がその夜の最高の夕食になろうとしていたのです。

私は車輪の火の後で、ジャガー氏は数メートル離れたかずらや、りゅうぜつらん、灌木の間にあって互いに対峙し、こうした状態のまま時間が経過してゆきました。曙光が闇に差しこんできた時、私の相手はその非常事態（私にとって）を解消することを決心し、静かに徹退し始めました。私は遠くで敗北のうなり声を聞いたような気がしました。

太陽が木の葉の間からこぼれると、私は元気づいて避難場所をぬけでました。

細かな砂の上に残された足跡から、ジャガーが馬車から４ｍ足らずのところまで近ずいたことがわかりました。馬達も出て来ました。彼等は黒い鉄鈴の"むかつく"ような音のお陰で野獣の被害を受けずにすみました。馬は顔をあげて、鼻をふくらませ、神経質そうに息を付きました。

彼等にはこの光景は全く面白くないもののように思えたようでした。

Peter H.Lower

空からの攻撃

チヤコの住民が活気を見せる季節のある日の午後だった。

太陽は木々の梢をバラ色に染め、もろこし（cafir）いんげん、落花生、綿花が植え付けられた実り豊かな畑を通して長い影を描いていた。農夫達は額に汗

をにじませて、つらい一日の仕事をまた明日に残して家路を急いだ。
家では家畜や、外から帰ってくる牧群を世話する時間が待ちうけていた。
たくましい肩に鍬をかついで歩いている農夫の手の甲には太い血管が浮き出し、何千時間もの労働によって磨きあげられ、光沢の出た柄をしっかりと握りしめながら、農夫は端から端まで自分の畑を見回し、作物の立派な成長に驚嘆するのであった。12月の初めにはじめて種播きが行われる。ひよわな苗は焼けつく太陽や白熱の砂にかろうじて耐え、北風がその生命をとざすように吹きつける。それがやがて収穫されるようになるまでになる。入植者のある者は、もろこし、いんげん、綿などをプンタリエレスの駅へ輸送する準備をはじめていた。
農夫は綿畑に着くと、植付られた作物の美しい絵を観賞するためにゆっくりと歩いた。子供達ははち切れそうな果包を数えていた。果包は一本の木に100以上もあった。また一方では黄色い花がちぢれ毛のマントのように畑を被っていた。
〃相当の収穫になるぞ!〃
農夫は内心自分に言い聞かせた。
〃昨年の凶作を考えれば良く育ったもんだ。神の正義が正しい審判を下されたのだろう。ヘクタール当り約1500キロとしても大袈裟ではない。キロ当りの価格がたった6ペソだとしても、かなりの収入だ!〃
このベテランの入植者はこう予想して、どんなふうに自分の設備をよくすることが出来るだろうかと皮算用しつつ………。
新しい荷車とらばが必要だった。効率が悪く、大食漢で、何日も山に隠れるような牛を手放す時期だった。子供達に衣類を買ってやらなければならなかった。
多分、靴まで買ってやれるだろうがそれはちょっとすぎた約束だろう。
ママがここに居たら、感激して何を考えただろう。台所用品はもしかすると間に合っていただろうか?寝間衣、タオル、もうちょっと上品な家具はどうだろうか?
このベテランは収穫までに考えられる危険を一つ一つ想い出してみた。
いなごは春先きに姿を消してしまった。害虫は適宜に駆除された。ヨーロッパ農民が恐れるひようの危険は幸いにもパラグアイにはない。その年の収穫は保証されたようなものだった。

〃神の力を持ってしても、お前の運命を変えることは出来ない。不幸は空からやってくる〃

〃南の方角で変な雲が出てきたぞ〃仲間の一人が言った。

〃雨になるのかな？〃もう一人が答えた。〃いや、一雨欲しいところだが、まだ北風が吹ききっていないね〃、村の予報屋が言った。〃ただの煙雲だろう〃別の一人が言った。〃Shoentalの連中が畑を焼いてるし〃

そのあいだも雲は益々近づいて来た。まもなくそれが雨や塵や煙ではないことに気づいた。雲はだんだん大きくなった。雲はいつものよりも厚く、大きく、引っぱられた様に南西から北東へ広がった。入植者達は歩を早めた。次第に雲が空を被い始めたのである。

〃これは何だ、これは何だろう？〃、彼等は口々に言いあった。

〃いなごだ、いなごだ！〃、突然、驚愕した声があがった。

〃いなごだ、いなごだ！〃、何百人もの喉からふりしぼるような恐怖の叫びがあがっていった。事実、村の一方の端では、途方もない数の大きくて貪欲ないなごが地上に降り始めていた。村の世話役は大声で銘々が缶やかめや、金だらいを叩いて、昆虫の降下を妨害するように命じた。しかし村人があっちへゆけば、こっちへと言う具合に至るところで豪雨のようないなごが降ってきた。

急仕立ての太鼓の音は無数のいなごの羽根のぶんぶんという音の中で悲しく空しく失われた。

わずか数分で庭、道路、屋根、樹木、植物、すべての畑はパチパチと音をたてる、煮えたぎるような、殺人的な暗い集団の厚い層で被われた。10匹のいなごを踏みつぶしたところには、すぐに100匹が被いかぶさってきた。

いなごはあたりに充満していた。次第にうす暗くなってきた。そしていたるところに小枝が焼けはじめるような音がした。世話役から村の東端を助けるよう指示を受けた者達はそこに到着する前に自分自身の畑にいなごの洪水が侵入したことに気づき、あわてゝ自分の畑にかけ戻るのであった。

しかし、すでに畑は全滅しかけていた。飛び交ういなごの羽音がまるで交響楽のように響き、地上では幾重にも厚い層をなしたいなごが、作物の葉、果包、花、枝、茎を鋭い鋏みのような歯で音をたててかみ切っていた。

叫びも急仕立の太鼓も空しかった。いなごは止むことなく落ちてきては、あたりを食い荒した。

いなごの雲は幅約600m、長さ10mにも拡っていただろう。

哀れな村人達、文字通り息も切れんばかりのパニックに陥った。いなごは人間の顔といわず目や、耳や、全身に落ちてきた。囲い場の家畜や犬は逃げ場を求めて無駄に走り廻った。

野原から帰った牧群は鳴き声をあげ、尾を立てて山の中に逃げ込んだ。

農場を勇敢に守ろうとしていた人達は戦いが絶望的なこと、どんな犠牲も無駄であることを悟った。彼等の目の前で綿やいんげんが食い尽くされた。枝とは言わず、最も強い植物も、もろこしの太い茎も襲撃の重みに屈した。一時間も経たないうちに農場は丸裸にされてしまった。

"人はあきらめて、神の力の前に膝を折り、もたれかかり、勇敢にも自分の作品と心の崩壊を観察する"。

夜が来た。月は荒涼とした光景を何事もなかったかのように照らしている。

隣人達も家に帰った。いなごの狂乱は何時間も、何時間も続いた。時折、ケブラチョやウルンデイの木の枝がいなごの重みで裂け折れる音がする。絶望した農夫が叩く太鼓の音が聞こえる。すべての努力が無駄なことも知らず、人間の力が及ばないという悲しい現実を認めることができないのだ。

ざわめきは夜通し続いた。

カフィールの熟して乾いた実も昆虫の鋭い歯の犠牲になった。月明りの下で、何人かの疲れ切った入植者達が、絶望的情景を前にして、何らかの救いを求めつゝ被害のことを話している。

このような大事な時に、叡知をもって昔から語られてきた祖父の言葉"年老いた主は永遠に生き続けられる"こそ、苦しむ人達への最善の慰めである。

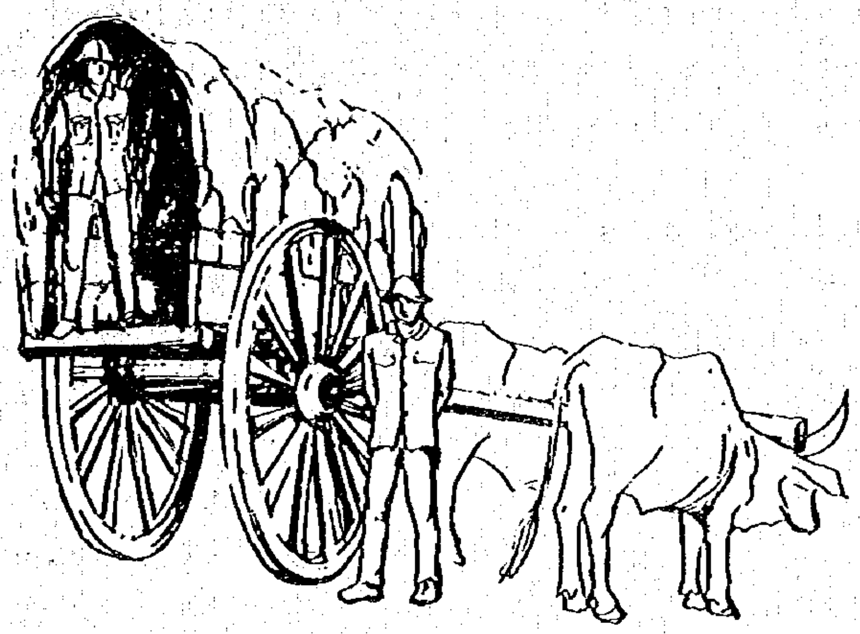
心に恐れを抱いて眠る者も多い。明日に何が起るかを知らない者も多い。しかし誰もが心の中にその誰も破壊できない信仰を抱いている。明日があることを教えるその信仰を。

勿論、悲しみや、破壊や、絶望の朝もあるが、いなごのいない朝もあり、悩み苦しむ心の奥まで届く太陽が輝く明日も来る。

明日は陽の出を仰ぎ、遠くに去ってゆく最後のいなごの雲が見れるだろう。

メンノブラット紙　広6.−1931

無人の土地で



無人の土地で

原野の中の線、それは国境だつた

〃メノ派の入植がなければ、パラグアイがチヤコ地域を手に入れたかは非常に疑問である〃、とドイツ大使は1936年、ベルリンの外務省で所属局に対して報告した。

この仮定は多分支持されないだろう。しかし1920年代のメノ派の入植がパラグアイにとって政治的に非常に重要だったことは確かである。1924年、北チヤコへの入植が本決りになると、境界線問題に関しパラグアイとボリヴィア間にあった潜在的紛争は一気に表面化した。

ボリビアは精力的に抗議した。パラグアイはアルゼンティン国籍のカルロス・カサード社の私有地がメノ派グループに売却されただけの話であり、またその土地が1907年の協定線〃Statu quo〃の線内にあるに過ぎないと苦しい返答をした。

しかしながら、事実を前にしてはいかんともしがたく、両国の新聞は一斉に抗議文を掲載し、戦争突入の気運が著しく高まった。

〃北チヤコはパラグアイのもの(所有)/、これがパラグアイ側の叫びであり、ボリヴィア側では〃旧敵をチヤコから追出そう/〃と叫ばれた。

平和的なメノ教徒がその地域の平和を残念にも乱すことになってしまった。

そんなこととはつゆ知らず、彼等はカサード港から、カンポ・エスペランサを経てローマプラタに至るつらい旅を続けた。沢山の墓を路傍に残しながら……。

それはパラグアイ・ボリヴィア戦史の中の危機の年、すなわち1928年のことであった。

ボリヴィアは紛争の土地へのその〃侵略〃を前に立ち上り、同年9月、ネグロ河の岸にVANGUARDIAの砦を築いた。

このことによって、パラグアイの主都では猛烈な怒りが吹きあれた。

パラグアイの軍隊が12月砦を攻撃した。血が流れ、死傷者と捕虜が続出した。

ラ・パスにおける激怒。戦争を訴える群衆が大統領官邸の前に集合した。ボリヴィア軍はバングアルデイア砦を奪回し、再び血が流された。

ボリヴィアはパラグアイとの外交関係を断絶した。一方、メノ派開拓者は両国間に生じた高い緊張も知らずに北チヤコの処女地を耕した。

9月の初旬、開拓者の土地のはずれにあるクラカオ湖(Laguna Curacao)にボリヴィアの軍隊が姿を現わした。

そこでは彼等の牧人達が家畜の世話をしていた。兵士達は急仕立ての柱に国旗を掲げ、牛が草を食むでいる原野に一本の線を描いて、牧人達に線の東側はパラグアイ領、西側はボリヴィア領だと説明した。

彼等はその命令を守った、が牛はそうではなかった。草を食みながら越境する度に軍の命令で本国へ送還されねばならなかった。しかしクラカオでは流血は起らず、ボリヴィア軍隊は数日後には旗を持って去っていった。

1928年、両国政府が紛争を外交レベルで処理すべく努力したからである。

Peter P.Klassen

チヤコへ行くための二つのビザ

そのパスポート自体、二つとない珍しい物である。Karlsruhe コロニー(広16)の同志が私に送ってくれたそのパスポートは詳しく説明する価値がありそうだ。

二つ折りした大きな黄色の用紙には"パスポート代用"の文字が記載され、在ハルビン、支那(注)のドイツ領事が署名したもので、"国籍"は"ドイツ人"と記入されていた。次のページにはロシア文字、ソビエトの星型のスタンプ、長い縦列の漢字が見られる。発行日は1932年2月15日。

しかし、本当に指摘するだけの価値があるのは破れて、色あせたこのパスポートの裏表紙の記録である。マルセーユ入国とルアーブル(フランス)出国のスタンプの下に次のようにうたった二つのビザがある。

"パラグアイ共和国領事"

"本証明書に記載される者は最終的にはパラグアイに永住する"

Le Haure, 1932年4月4日

"ボリヴィア領事"

"ボリヴィア共和国、領土グラン・チャコ地区へ入国査証済可"

EL Havre , 1932年4月5日

メノ派教徒は、知らぬまにそして望みもしないのに、政治論争の真中に挟みこまれた。多分、南アメリカ諸国の独立以来、最大の紛争の中に。

パラグアイは1920年代にメノ派の移住を支援した。北チャコの広大な土地を耕すことがその土地の主権の主張と抗議に権利を持たせることにつながるからである。

米国歴史家 ZOOK は彼の著書の中で言っている――"チャコ戦争"(注※)："こうして平和を愛するその人々は紛争の道具にされてしまった"。

ボリヴィアは1907年の協定線(Statu guo)の推定的違反についてパラグアイを非難した。

1924年のサアベドラ砦のボリヴィアの攻撃はそうした解釈の結果生じたものだった。1930年、FERNHEIM コロニーが建設された年、政治的緊張は脅迫的な形態を取り始めた。

アムール(AMUR、ロシア領シベリア)地区をのがれてモンゴルと満州を横断し、支那大陸の東岸、ハルビン市の難民収容所に到着したメノ派移民団にとって、その政治緊張は重大な困難を持たらした。この難民グループは北グラン・チャコ(Gran Chaco Boreal)でメノ派の同志達と合流することになっていた。

Le Havre の港で乗船したとき、彼等にとっては、のっぴきならない政治・外交面の問題が生じたのである。

Dr.Benjamin H.Unruh(注※※)教授は彼の小冊子"メノ派救済事業1920－1930における決定及び協定"、45ページの中に当エピソードについて詳しく触れたDr.Kundt(注※※※)の署名入り文章を載せている。

Dr.Kundit いわく――"パラグアイとの政治紛争の中で、メノ派移民団の輸送を自分側に有利に導くため、フランス駐在ボリヴィア外交官が様々な画策を行ったため、ルアーブル港出航日である4月5日は再び怪しくなるという、非常に不愉快な事態となってきた。

出航の数時間前、在パリボリヴィア大使及び在ルアーブルボリヴィア領事の双方から、船会社に対して北チャコへ向う難民にはボリヴィアの入国査証が必要であると

いう電報が送られてきた。

前日の4月4日において、ドイツ領事 Dr.Bergfeldはボリビア領事との会談の席で、ボリヴィア大使が提示したボリヴィア側の要求に対して、ドイツ政府及び他のキリスト教政府の慈善救済による平和的メノ派民間団体に向けられる入植事業はいかなる政治的要素もいかなる外交上の意味も持たず、北チャコにおけるボリヴィア及びパラグアイ両国の紛争とはなんら関係がない旨をすでに説明してあった。

にもかゝわらず、午後2時頃、GROIX 船上に突然ボリヴィア領事が出頭して、口頭と文書で会社の代表者に警告した。

領事は抗議に力を持たせるため、大使の電報を提示した。電報には、ボリヴィア領事の査証なしに難民を乗船させた場合、企業側は重大な結果を招くという国際連盟及び NANSEN 両事務局長の指摘も含まれていた。

この緊急事態を前に、船会社及びボリヴィア領事は船上の Dr.Benjamin Unruh 宛てに何通もの至急電報を打った。教授は私に相談してから、出頭を拒絶した。

Unruh 教授に投げられた槍を今度は投げ返し、特別な使者を通じて声明文を提出した。彼はその中でボリヴィア査証を強くと拒絶する。それが認められない場合に生じるすべての結果に関しては、会社側と船長にすべての責任があることを表明した。にもかゝわらず、会社はボリヴィア領事がパスポート全部に査証を押すことを認めた。難民の総合名簿表に領事査証を押すという私の折中案は拒否された。

"AMERICAN LLDYD" の重役、つまり事実上の船主はこの"深刻な政治紛争"の前にルアーブルの街からあわてて逃げ出した。

船会社の卑怯行為への抗議の表明として、我々は一人も会社が用意した晩餐会に出席しなかった。従って、主賓抜きの宴会となってしまった。

船は2時間遅れて出航した。

悪いことは重なるもので、フランスを旅行していた船医は規定時間まで戻らなかった。会社は急拠代りの船医を見つけなければならなかった。船長は気鋭の南フランス人で、難民達が後になっていうように多くの悪口を叩いた。パラグアイ大使はパリで船会社の行為とボリヴィアの査証に対して抗議を行った。

二重発行の場合はパラグアイ査証が無効にもなるからである。

ドイツ、オランダ及びフランス在住のメノ派の人々は合同書面をもってパラグアイ大使に感謝の意を表し、同時に彼等や不幸な難民達が事件の原因となった政治紛争とはなんら関係がない事、また決して誘発したのでもなければ参加もしていないことを力説した。

査証処置の中で"novum"として導入されたボリヴィアの要求は根拠も実際の意味も持っていない。

今回の移民団が落着く予定のカサード港の東、160－200キロメートルにあるFernheim コロニーとそのメノ派隣人の土地は完全にパラグアイ政府の管轄下にあり、南からのみ接近でき、北、つまりボリヴィアからは接近できない。

国際連盟がとった見解はメノ派教徒の立場と彼等の名声を直接危険にさらすものである。また NANSEN 機関の見解は、ある国の政治的要求について考慮する場合には、当然反論できるものである。と同時に NANSEN 機関がメノ派移住団の輸送の保護上の責任をマルセイユ港までと限度したことを考えれば、警告を行う正当な権利は同機関にはない。

以上が B.H.Unruh 教授の小冊子から抜粋した Dr.Kundid の文章である。

パラグアイに到着したメノ派難民は、係争の土地に入るための"パスポート代用"に二重のビザがあったにもかかわらず、移民局との間にはなんの問題も起らなかった。

Peter P.Klassen

〔注※〕 ハルピンからパラグアイに向かったメノ派グループはアジアを廻り、スエズ運河と地中海を経て、フランスを通過しなければならなかった。乗船は Le Havre だった。

〔注※※〕 B.H.Unruh 、メノ派教徒、ドイツの Karlsruhe 大学教授。特にソ連難民の真の救済者であり、同時にパラグアイへの移住に非常な尽力をつくした。

〔注※※※〕

Dr.Kundt、掲載文の作者。チャコ戦争でボリヴィア軍を指揮した司令官とは無関係。

政治地平線に出現した嵐を呼ぶ聲

少時は平穏な時期を過していた。入植者達は家事に精を出した。最後のいんげんと cafir も収穫された。

試験的に播いた小麦の成育は良好で、穂をつけ、成熟期に入った。牧群も良く育ち、動物達は入植地の平原で静かに草を食べていた。幾人かの幸運な者はすでに美事な乗馬を持ち、必要に応じて耕作の引き馬としても使っていた。

至る所で良く太った豚が処理された。囲い場の鳥は二倍にも増え、一家の女主人は大いに満足した。鶏のほかにあひると小あひるが居た。あひるはその美味な肉や女達が欲しがる枕やふとんの柔い羽根を提供することによって、我々にとっては貴重な鳥だった。以前から、女の子に羽根クッションと羽根掛けぶとんとを与えるのが我々の習慣だった。しかし当地に来て、グラン・チヤコでは冬場の羽根掛けぶとんは贅沢でないことに気付いた。

百姓達のある者は畑を耕し、またある者はフィラデルフィアの小さな工場、つまり製材所、製粉所、製油所などに働きに出かけ、数ペソのお金をかせいできた。

また、我々の病院建設用のレンガを焼く者もいた。病院を持つことが我々の優先問題であった。

我々の組合の代表者達はアスンシオンへ出かけ、沢山の買物をしては戻ってきた。商品が着くと村人の間で販売された。最近、ハルピンから着いた入植団には牡と牝の牛が与えられた。学校は三学期に入っていた。

共和国の新しい大統領 Dr.Eusebio Ajala は入植地への訪問を公表した。

我々は最高の品位を持って大統領を迎えるため一生懸命働いた。しかし、そののどかな田園行事は突然中止された。政治的嵐が空に湧きあがった。そして我々は紛争の真中に居たのである。

7月28日、飛行機が一機コロニーの西方角、つまりトレド街道沿いの№8コロニーの近くに現われた。飛行機は一度旋回したきりで、基地へ戻っていった。

この飛行機を目撃した入植者はごく一部であった。(№6、7、8)

翌29日、午前10時頃、Fernheim コロニーの多くの場所で飛行機の爆音が聞こえた。爆音はみんなの注目を集めた。私は生徒達に鉄の鳥を見せるために校庭へ連れ出した。大半の生徒達は飛行機を見たことがなかったからである。

飛行機は複葉機で堂々としていた。ボリヴィア国境があると思われる西から現われて、フィラデルフィアへ向って接近してきた。

飛行機は最初高度を保っていた、が突然旋回して道の上を低空で通過し、フィラデルフィアの上空を何度か旋回し、二度の機銃掃射を行った。一度の掃射はやじ馬の足元に達し、白いほこりの雲が巻き上った。その後、敵機は上昇し、もと来た方角へ去っていった。

多くのパラグアイ兵士が我々のコロニーを通過した。ある者は負傷兵を移送していた。彼等はいつも礼儀正しく、謙虚で、規律に従って行動し、我々がロシアの内戦で知っているロシア軍のように粗野や無教養ではなかった。

8月1日と2日、砲声が聞こえた。プンタリエレスから帰った仲間がアスンシオンから着いた大部隊を見たと言った。コロニーを引きあげなければならないというニュースが流れた。がその後すべては平静に戻った。ほぼすべてが平隠であった。がまだ安心は許されなかった。

同月3日、飛行機がまたやって来た。村人達は驚いたが機銃掃射はせずに去っていった。しかしインデイオ達はパニック状態であり、レングアーメノースペインの混用語で叫んだ――"ボリヴィア人はカプチ・メンノニータ、カプチ・レングア、全部カプチ／／／"。

彼等は自分達の小屋を捨てゝ、チヤコの山奥に逃げ込んだ。我々はと言えば、敵機が村の上空を一度、二度、三度と飛来するにつれて、あまりそれを気にも留めないようになった。どういう状態であれ、すべてにすぐに人間が同化する証拠である。

6日、チヤコ司令部はコロニーの自治会に撤去命令を通達した。

それは我々にとって信じ難く、不可能で、異常な事態であった。四家族に一台の割りでしか荷車がないがどうして引越しすればよいのか？

村を覆った沈痛な雰囲気を筆述することはできない。司令部の命令は各家族が衣類と食糧を充分携帯せよというものであった。主婦達のある者は最後の小麦粉で麺を作り始めた。入植者の何人かは抵抗した――"俺は一歩も家を離れないぞ。家は俺や家族にとって最後の場所なんだ／"――哀れな人々には苦い記憶があった。

ロシアでのあまり遠くない過去の記憶である。運命が彼等に与えた傷はまだいえていなかった。そして、今や再びすべてを放棄しなければならなかった。わずかな持物とはいえ彼等にとっては実に大きな意味を持っていた。豚は死ぬか逃げてしまうだろう。囲いの鳥は狐かピューマの餌食になるだろう。彼等の家は一度はボリヴィア軍に、一度はパラグアイ軍に、そして結局はボリヴィア軍の所有物となってしまうだろう。我々のやせた土地にはまだ多くの負債が残っている。我々の家は多くの汗で建てられたものだ。

大人達の記憶には古い想い出が鮮明に甦がえってきた。ロシア内戦のいつ終るとも知れない難民のキャラバン、食糧も水もない栄養不良の人々、一切れのパンと一口のミルクと水を欲しがって泣きわめく子供達、ヒステリックな母親、そして絶望した父親。

あらゆる入植地で陳状団が組織され、一方では我々の代表団がイスラポイに駐屯する司令部に向けて出発した。各部落は最新情報を入手し、住民に伝えるべく代表者をフィラデルフィアに送った。みんな緊張した。時計は午後8時、9時、10時を刻んでいった。この完全な静寂にこおろぎやせみまでも息をひそめているかのように思えた。突然、遠くでエンジンの音が聞こえた。代表者が帰ってきた？　どういう情報を持ち帰ったのだろう？

緊張はなお続いた。ここ、チャコの生温い夜に村人達は裁判官の裁定を待つ被告のように、胸に手をあてゝ待ち続けた。

我々の村長であった。彼が車から降り、我々はもどかし気に黙ったまゝ彼を取囲んだ。

彼は報告した――イスラポイでは司令官よりこれまでと同じように丁重な待遇を受けた。司令部も撤退が無理だと判断した。急迫する事態を前に軍隊と同じような行動をすることが不可能と認識した。司令部は命令を変更した――。

我々は残ることができた。行動についての細かな事や指示はもうどうでもよかった。我々はこゝを離れる必要はない。その事以外、その瞬間に重要な事はなかった。この報告は天からのメッセージのように安堵感をもたらしたのである。

その場に居合せた人々の表情とお互いが語り合ったことをここに記述することは不可能である。

安堵、緊張のゆるみ、感謝の気持。命拾いした者の魂、信仰、存在し続けるための理由。ある婦人が後日私に言った――"俺は生来貧乏だといつも思って来た、が今は違う。自分が豊かなことを知っている"

8月8日、各村の家畜を戦闘地区から離れた別の地域に移動せよとの命令が届いた。この指令も後になって変更された。

15日、敵機がコロニー7と8の上空に現われ、何度か旋回した後西の方に去った。

17、18の両日、Lowen と Heimrichs は近くにあるパラグアイ軍営の訪問に出かけた。訪問の先々で部隊は彼等を友好と敬意をもって迎え入れた。

兵士達は身なりも良く、大砲、機関銃、飛行機と充分に装備されていた。また同時に、捕虜や設備が行届いた野戦病院も見学した。病院ではパラグアイとボリヴィア両国の傷兵達が分け隔てなく看病されていた。

19日、フィラデルフィアで総会が開かれ、パラグアイ赤十字への全コロニーを挙げた慈善運動の実行が決議された。

8月21日、同志達が供出した食糧を積んだ九台の車がイスラポイに向けて出発した。贈物はじゃがいも、カフィール、いんげん、パン、蜂蜜それに卵だった。

N. Siemens

"メンノブラット"紙 8. 1932

トレボル、軍の要塞となる

トレボルは最初のメノ派コロニー

Fernheim の用地からは約 900 m離れている。トレボルはドイツから来るべき移民達のために最初の真水の井戸が掘られた場所でもある。

当地では現在でも豊富で良質な水を見つけることは大変むづかしく、この点から見ても実に運が良かったと言えるだろう。数十年を経た後でも、トレボルの井戸は当地全域のために大いに役立ち、メノ派入植者や戦時中には何千というパラグアイ兵士の命を救ったのである。

こうしたいきさつから、当地は60世帯から成る最初のメノ派移住団の仮りの居住地として選定され、彼等は各村落の土地の配分が決めるまでこゝで生活した。

トレボルはプンタリエレスから到着する食糧や品物及びメノ派コロニーで集荷される品物の最初の倉庫が建てられた場所でもある。

この倉庫には MCC（注※）の代表者 G.G.Hiebert 氏と〝パラグアイ協会〟の駐在員 Norén 氏が常駐した。ノレン氏はスイス人で、ドイツ語がわかり、入植者と話し合うことが出来た。

避難民が到着し（人々は我々を単に〝難民〟と呼んだ）、彼等の組織化が社会的にも、行政的にも強化され、村長と助役をすでに設けるようになると、MCC がメノ派入植者のために取得した土地の所有者であると〝パラグアイ協会〟はノレン氏に別の赴任地を与えた。

しかし、ノレン氏はその前に、パラグアイ軍に対して、〝トレボル〟の場所をボイ地区とトレド間の施設の建設改築を伴う軍隊の需要拠点とすることに同意した。

一個分隊を連れた軍曹が着任するまでに何日もなかった。その日から、トレボルは〝トレボル砦〟と命名された。

戦闘が Fernheim の附近でその激しさを増すにつれて、砦には続々と軍隊が到着した。

ある日、騎兵隊がトレボルに駐屯した。テントや兵舎が建てられ、緊張した軍制下の雰囲気があたりを支配した。

その瞬間より、我々の部隊にとって、飲み水の問題が深刻になった。司令部は井戸の前に歩哨を配備した。我々には夜明3時ないし4時までの夜間帯にのみ水を汲むことが許された。これでは村民や動物達にとって水が不足するのは当然であった。このため、騎兵隊は水が豊富にあるイスラボイに移動していった。

しかし、その後に約3万人の歩兵隊が砦を占拠し、我々にも兵隊にとっても水はつねに深刻な問題になった。

但、付記しておきたいのは、軍が我々に井戸の使用を禁止した事はないという事実である。

エルン将軍はいにしえのドイツバルチック艦隊の子孫として知られたメノ派の人々の友人で、自らの責任で砦の拡張と改良を実行した。傷病兵の仮宿舎、防空避難所、塹壕、 etc 。砦の最終撤退までの全期間を通じて、メノ教徒とパラグ

アイ将校との間には誠実且つ友好的関係が維持された。

こゝに一例がある。年老いた牧人の Janz がたき木をとりに自分の土地の奥へ入った。そこで軍曹と出会った。軍曹は彼にいくつかの質問をしたが、言葉を一語も知らないために返答することができなかった。老人は怪しまれた。軍曹は彼を砦に連行した。指揮官もまた彼に質問をした。指揮官は老人が言葉がわからないことに気付き、私を呼んだ。私も我々の新しい祖国の言葉をそれほどよく話したわけではないが、お互いに理解し合い且つ我々の親愛な隣人の性質と彼の身の潔白を指揮官に説明するには事足りた。その同志が明白な理由もなく出頭を命じられた事を知って、指揮官は我々の面前で、軍曹を叱り飛ばした。軍曹は直立不動の姿勢で、半分の確証もないのに入植者に迷惑をかけてはならないという上官の指示を全神経をとがらせて聞かなければならなかった。

ボリヴィア軍隊がコロニー8に現われるようになると、トレボルの司令部は部落の数箇所に夜間歩哨を配置した。ある若者達にとって、こうした任務は悪いものではなかった。

その訳は、彼等は単調な兵舎のメニューにアキアキして、変化を求めていたしあるいは世界中の若者が持っている病気をちょっとばかり、いやしたいという欲求を満たすために一個の卵、二個のマンジョーカまたは数個の西瓜を“調達する”機会がそこでは与えられたからである。

ある暗い夜、私は家の前の畑であやしい物音を聞いた。

そこには美事なマンジョーカが育っていた。当時、マンジョーカは部落で相当不足していた。私は外に出て叫んだ――“誰だ？”“警備兵”、という答えが返ってきた。“私のマンジョーカに警備兵はいらない”、と私は大声で弁じた。

“私の庭から出ないと、指揮官に言いつけるぞ”剣幕におそれをなして、影達は私の畑から消えて二度と戻っては来なかった。

畑の奥に西瓜を作っていた。

ある夜、砦の若者達が西瓜を食べに兵舎から“Yajha' – pa'を敢行した。

闇の中では判別もまゝならず、成熟度も見分け方も知らず、調査をする充分な時間も持ち合せていない彼等は、長めのナイフを使って甘い西瓜を満足するだけ集めるために、片っ端から割っていった。

次の朝、畑はまるで戦場のように無数の割れた西瓜がころがっていた。

私は憤激をやっと抑えた。将校達の何人かは毎日私の家を訪ずれた。その日私を彼等がたずねたとき、私はたまりかねて西瓜畑の一件を話した。

すごい怒り様だった。彼等は畑を見せてくれるように私にたのんだ。荒された跡を見たときのグアラニ語の会話から、私は自分の利己主義的な訴えを撤回した。

なぜなら私は“軍隊の横暴と恥辱”というような表現を聞いたからである。

少しばかりのドイツ語のわかる軍医が私に近づいてきて言った——“我々は恥かしい気持で一杯です”。

後日、私は現場を抑えられた兵士の刑罰の様子を見た。彼等は我々が水汲みにゆく道のそばで、柱あるいは箱の上で重い西瓜を支えて立っていた。我々は哀れな若者達に心底同情した、が戦時下において保たれた模範的な軍規を賞賛せざるを得なかったものである。

Heinrich Friesen

〔注記〕 MCC ——Mennonite Central Comittes の略称

世界中の困窮者を援助する目的で組織された北アメリカ メノ教徒の機関

一通の歴史的書状

Fernheim コロニーの史実資料の保管室に一枚の奇妙な手紙が特別ファイルの中で保存されている。日付けはチヤコ戦争が開始された1932 年となっている。

手紙の編集者はボリヴィアの将校である。ボケロン(Boquerón)における最も激烈な戦闘が始まったとき、ボリヴィア軍はトレド砦を占領していた。

トレドは Fernheim の西端の部落からたった30Kmほどのところにある。

この地区全体が実際に“どこにも属さない土地”であった。ここには交戦中の両軍のパトロールが定期的にやってきた。

事態の重大さも知らない大部分の入植者達はこの“所属不明の土地”へ毎日牧群を連れていっていたが、山の中に良く不思議な人影を見つけた。

古参者達の誇りである我々の学校は小学校は6年制、中学校は4年制で、当時

より少し前にコロニー7（Schoenwiese）に建てられた。

ある日、パラグアイ軍ではない一団の騎兵がコロニー7と8の村民の注目を呼んだ。パラグアイ軍ではないと判断したのは、軍服の色調からであった。パラグアイ兵の服はオリーブ色だが、騎兵隊は柿色の軍服を着用していた。

パトロールは両方のコロニーを通り学校へやって来た。学校では先生方に一通の手紙を渡して、もとの道を戻っていった。

以下がその手紙の内容である。

"Guajho"、ボリヴィア領、1X－10－32.

メノ派部落点7－8及び"フィラデルフィアの指導者各位

本日をもって"ボリヴィア国の法律の完全な保証の下に貴"宗派"の部落が置かれることを通告致します。

貴下全員及び新会員に対し、戦闘のために教育且つ準備された兵士として我々が貴下に対して行う行為を尊重することを期待します。貴下は宗教の指示通り中立的立場を厳重に守らなければなりません。

また、このことが我軍にとっては好ましいという事を新会員に知らせることを希望します。

同時に、我々はすべての裏切り行為に対しては鉄と力の手を持ってこれを容赦しないと警告致します。

ボリヴィア兵士を怖れる事はありません。このボリヴィア兵士は"偉人ボリバル"の名を冠す我軍隊の教育と規律の鏡であるからです。

ボリヴィア万才！

貴下に神の御加護を！

スアーレス軍曹

第四師団、前衛隊長

（Tangue gudt）

本状はカサート港方面へ行進する我が連隊に提示するために有用です。

我々の戦闘機は"メノ派"移住地区を"爆撃"するものではありません。

敬　具

グアホ(GUAJHO)の私の牝馬

1932年9月の初旬。私はコロニー7にある我家の庭に居る。家は西に向って一番左側にあって、コロニー8とは25m幅の土地で区画されている。視線をあげると、軍服姿の騎兵が村の入口に近づいて来るのが見える。私は通りに出て、彼等の軍服からパラグアイ兵でないことを知る。ボリヴィア兵だ。思ったとおり、8騎はボリヴィアのパトロール兵である。

私の知るかぎりでは、パラグアイ軍の Fernheim コロニーの西側の陣地は手薄である。その地域には、私の村から9Km離れて小規模なグアホ砦があり、35キロの所にはトレドが、またトレドから25キロの地点にはコラレス砦(CORRALES)がある。話しでは、約50名のパラグアイ兵がこれらの砦の一つで敗北したという。私は彼等がトレボルとボイ地区の方角へ兵士達が馬や徒歩で退却してゆくのを見た。やせ馬に3人の兵が乗っているのも見た。

今、私の前にはボリヴィア兵がいる。パラグアイ兵の最も残忍な敵と言われる者達だ。この敵が我々のコロニーの中に居るのだ！ 彼等は私を見ると、戸のところまで私に近づいてきた。彼等の黒い目は通りや周辺をさぐり、どんな小さなことでも見逃すまいとしているかのようだ。胸には大きな双眼鏡を吊している。

私の家族や隣人達が私達のそばに近づいて来て、私に手書きの一枚の紙を渡す。

残念だが、みんなと同じように私も何を言っているのか読めない、というよりまだスペイン語がなんにもわからない。コロニー7のはずれには、コロニーの最初で唯一の学校がある。先生方の中には、この文書の中味がわかる人が居るかもしれない。私は"パルド"の手綱を取り、彼の背に飛び乗り、兵士達に学校まで私についてくるように示す。先生方がその手紙を受取る。その瞬間からこの手紙は歴史的な文書として Fernheim コロニー保管室に保存されることになる。

ボリヴィア軍司令部が作成したこの書類はメノ派コロニー宛に書かれたもので、我々を保護、援助するというものだ。従ってコロニーはボリヴィアの支配下に置かれたことになる。

騎兵達と私は家の前まで戻ってくる。別れ際に、彼等はグアホへの道をたずねる。多分兵士達はトレドからの一本道をここまで来たのだろう。トレドからコロニーまでは、狭い平野を何本かの蛇のようにしねった道が続いている。また、別

の道が点在する森と茂みを横切るようにしてある。

私はしばらく考えて、グアホまで彼等に同行することを申し出る。これは良い機会だ。数日前に逃げた私の牝馬がそこに居るかもしれない。私の君主ボリヴィア人は満足した。私は"パルド"に鞍をつけ、一同は出発した。コロニー8を過ぎ開けた平原の分岐路で、左ではなく右の道をとるともう一路グアホへ着く。ボリヴィア兵は用心深く、観察を怠らない。時折、双眼鏡で周囲を調べる。こうして我々は小さな砦に到着した。グアホは美しい平原で、豊富な柔らかい牧草と水がある。我々が通った地点とは反対の丘には牧場と小屋がある。ボリヴィア兵は平原に出る前で停止した。武器、銃剣をあらため、双眼鏡で情景を調べ、攻撃の準備をする。それから神経質そうな蹴を与えて馬を走らせ、戦闘開始の号令とともに突進する。

哀れな私はパラグアイ軍によって発見され、ボリヴィアのスパイと思われるのを恐れて、懸命に彼等に続き離れまいとする。

砦は放棄され、人は誰も居なかった。

抵抗も流血もなく落ちた。ああ、よかった！ ボリヴィア兵は馬を降り、馬の腹帯をゆるめ、携帯袋から濃縮果汁ジュースの水筒を取り出し、湖の水でうすめてそのまずい飲み物を私にも飲ませる。それから、トレドへの出発にとりかかり、一緒に来ないかと私をさそう。"トレドには沢山ボリビア人が居る"、兵は両手をあわせたり、振り動して説明する。"いや、結構、一度の攻撃で充分"、と私は言う。兵達にていねいに別れを告げる。私は牝馬を探して野原を駆けるが、彼女は見つからない。帰りは、兵達と再び出くわさないように何度も何度も廻り道をする。

数日経って再び村に兵隊が現われる。通りの金網に近寄ってみると、約 2000 人の騎兵が私の方にやってくる。

指揮官は Hodeley 大尉だ。パラグアイ軍の軍役についているロシア兵の出身である。

今度は大丈夫だ。話は通じる。ロシアは私が生れた国だからロシア語はうまいもんだ。彼は私に Chenú 小佐と Villarba 大尉を紹介する。数日前と同じように、再び私はグアホへの道の情報屋である。また私は同行を引き受ける。きっ

と私の牝馬はそこに居るはずだ。今は午前１０時頃。私は将校にグアホへ同行した後は自分の馬を探しに行っても差仕えないかとたずねる。〃勿論です〃再びパルドに鞍をつけ、グアホへ向う軍隊の先頭に立つ。

多くの兵は手綱を引いて徒歩で行進する。キャプテンHodeleyと他の将校達も同様である。キャプテン Villarba は頑強そうならばに乗っている。らばは重さも、疲れも感じていないようだ。村の出口で一行に同行したいという村の同志と出会った。彼も一頭の牝牛を逃がしてしまい、グアホ辺に居ると信じている。軍は同行を認めた。我々二人は満足であった。この軍隊に守られて、安心して我々の家畜を探すことができる。

３キロ程進むと、止まれ！ 号令がかかり、キャプテンが私を呼び、山のふもとまでの距離をたずねる。私は約2500から3000メートルと答える。

〃よろしい、我が息子よ、山まで行って、ボリヴィア兵の足跡があるかどうか確かめて来てくれ〃、と私に言い、〃４５分経ったら報告に戻れ〃、と付け加えた。

私は偵察行為に出かける。私はボリヴィア兵がトレドに居ることやグアホ方面のパトロールを続行していることを知っている。もし彼等に出会ったら、私をスパイと思うだろう。我々は戦火の真中に居る。そして今私は〃所属不明の地〃に居る。なのに、キャプテンは強く主張する。彼の命令に従う以外に道はない。

こうして私は出発する。途中起りそうな事件を色々考えながら。もしボリヴィア兵がふもとに居れば、飛んで火に入る夏の虫だ。その後は、どうなる？

半分程の地点で、道は曲り、高い樹木で私の姿は軍隊の視界から完全に消える。

双眼鏡を使っても見えない。ここで、私は可能性を考える。山までいくのはよして、キャプテンには私の直感を伝えようと決心する。４５分たったころ合いを見て私は戻る。

〃それで、どうだった？ ボリヴィア兵の足跡はあったか？ と彼はたずねる。

〃はい、ありました〃。〃よし、先にゆけ、我々も続いてゆく〃。相棒と私は首を切られた子羊みたいだ。動物の件は忘れたい、もうなんにも知りたくない。

家に帰りたいだけだ。しかし、命令に従うように言う。私は馬から飛び降り、手綱と鞍をはずして、馬の背中に強い平手打を喰わせる。私の〃パルド〃はこのしぐさを承知している、跨で一回転すると、馬小屋の方に向って全速力で駆けて

ゆく。キャプテンはいかめしい目で私を見るが反対はしない。我々は深い砂地を前進する。小佐も砂の中を歩く。

山麓が近づくにつれ、私の哀れな良心が私をだんだん重くする。私の直観がもし間違っていたら、私はどうなるだろう？　ボリヴィア兵の足跡がなかったら、どうなるのだろう？　しかし、よかった。このはっきりとついた足跡は、パトロール隊が夜間ここに居て、多分今朝出発したことを示している。私のほっとしたこの気持を誰れも知らない。

〃もう充分だ。私は自分に言い聞かせた。さあ、戦争の任務は兵士達に任せて、私は出かけよう。牝馬の奴が何処に行こうと、何処に居ようと構わない。私は家に戻りたい〃。が事はそう単純ではない。兵士達は馬から降り、大きな機関銃を道の出口に置き、ふもとに沿って銃口を森の奥に向けて配置している。

キャプテンは我々に先進を続けるよう命令する。ボリヴィア兵は平和的な者には何もしないと確約しながら。

〃グアホ平原で見たことを報告に戻って来いよ〃。我々は脇の下に鞍を抱え、みじめな立場を共にする仲間を連れて前進する。〃いやだ——私は彼に言う——いやだ、いやだ。こんな仕事はこれ以上続けるのはいやだ。危険すぎる。俺はこわいよ、いやだよ、俺は兵隊でもスパイでもないんだ〃。

ほこらになった木の幹に鞍を隠す。〃行こう——私は相棒を信じる——山に入って逃げよう〃、〃いやだめだ——彼は答える——つかまれば銃殺だ。

前にはボリヴィア兵、後にはパラグアイ兵が居るんだぜ〃、〃俺にはどっちも同じようなものだ——私は答える——ボリヴィア兵とぶつかったらどうする？もう少し行って、それから逃げよう〃

けど、ふり返って見ると用心のため我々を尾行した銃剣を持った兵士達がいた。

もう沢山だ。私はふり向き、絶望的な決意で仲間を従えて戻りかける。兵士達は私の決然的な態度に気付き、道を開ける。

そとに出る。平原では、非常にきびしい出迎えが我々を待っている。キャプテンの非常に強くて荒々しいロシア語が落ちてくる。しかし、我々の強い決意を知って、帰宅を許す。

後になって、そのときの派遣隊はグアホでは一人の敵も見かけなかったことを

知った。兵隊達はもとの道をコロニー8まで戻った後、トレドへ直行する別の道を選んだ。そこで彼等はボリヴィア兵のパトロール隊と遭遇し、戦闘が始まった。

これが我々の近郊での最初の戦いであった。

ボリヴィア兵はトレドから追放された。砦はパラグアイ軍によって占拠され、その後の敵の襲来に備えて強化された。

Heinrich Diirksen

村の泉での親睦

メノ派入植地の井戸はチャコ戦争中パラグアイ軍の戦略要素となった。

水は燃料より重要であった。ここに紹介する話は Martin W.Friesen 氏がカナダの"メッセンジャー"という雑誌の 1933年2月号の中で見つけたものである。

"パラグアイ領チャコにおける戦時情景"というタイトルがつけられていた。

北チャコに繁茂する刺の多い雑草や"苦い牧草"に被れた野戦歩哨台には、午後のむせるような暑さがすっぽりとかぶさっていた。白熱の砂と焼けるように輝く大気はすべての計画を妨げ、自動的に歩兵と騎兵の行軍は取消される。

パラグアイ東部出身の忍耐強い兵士達までもこの暑さには参っている。とにかく、家に居てこんなに暑さを感じたことなどかってなかったと誰もが認めた。

この苛酷な地域に毎月何千という兵士が到着し、東から西へと鋭い剣をさげて移動し、この土地の支配権を求めて血なまぐさい肉弾戦を交える。

ある連隊が最近建設されたばかりのメノ派入植地を防衛するため、トレド方面に派遣された。ここはボケロン砦附近よりずっと静かである。ボケロンではここ数日激しい戦闘が続いている。ここには自由がある。オリーブ色の軍服を着た賢そうな若者や機敏そうな少年達は小説にでてきそうな珍しい村を訪ねる機会に恵まれている。

広くてきれいな通り、良く手入れされた垣根、金網が張られた庭、小ざっぱりして垢抜けした様子、行届いた整頓。この国に生まれた彼等には非常に好ましく映った。"きれいな家だなあ！"、時々こういう声が聞こえた。彼等はこの入植地が昔から存在し、また非常に裕福だと思っている。しかしながらそうではない。

ここに部落ができてからたった二年しか経っていない。生産物を販売する可能性が少いため、資金など誰も持っていない。

近くで稼げるものといえばもっぱら骨の折れる手仕事の収入だけである。しかし、こんなことは祖国防衛の若者達には無関係である。彼等はドイツ語を話さないし、住民達は新しい祖国の言葉を学ぶ機会がなかった。

〟苦い牧草〟と呼ばれる長細い帯状の土地で分離される二つの村の中間に軍隊は野営した。周囲の家畜用は別にして、二つのコロニーの飲料水の水源は5カ所の井戸である。これがキャンプ地に当地を選定した主な理由である。遠く離れるともう飲み水は手に入らない。引続く干魃と、とりわけ北から吹き続ける熱風は山の乏しい水汲み場を干上げてしまった。従って、解決策はその場所しかなかった。

長蛇の列をなして、疲労困憊の軍馬が水を求め、〟サムウ（Samuhu）〟の水たるに近づき、熱した頭を下げて、うまい冷い水の中に顔をつっこむ。馬達はいつまでも飲んでいる。〟サムウ〟の囲には、さらに動物達がおしよせる。兵士達もまた大きくゆっくりした飲みっぷりで味い、喉のかわきをいやす。それから布や麻布でくるんだ大小様々な水筒に水を詰め、また一度、二度と水を飲む。

すぐにたるとまぐさおけは空になり、二つのつるべのついた井戸の滑車は再び音をたてて廻り始める。おゝ、その滑車のきしる動きよ！　幾週も幾週も、ほとんど休みなく音がなりつづけた。

ある時は夜明け前に始まり、蒸し暑い日中を通じて続き、深夜になっても止まないこともある。震えるようなチヤコの夜の厳粛な静寂にかん高いカラカラという音を送る。生命と活動の激しい脈搏である。

万物は一滴一滴の水をどれほど神に感謝していることだろう！

深紅に染まった夕日の巨大な円は広大ないりくんだ遠い森が作る偶然なシルエットの影に隠れてしまった。星が天空にまたゝきはじめるころ、最後の人と動物が喉の焼けるような渇きをいやし終える。

植民者の牧群が村の通りに姿を見せる時間である。動物達は騎兵隊によって包囲された井戸のそばにばらばらに集り、水おけへの道に割りこもうとする。しかし、動物の厚い壁を前に割りこむことを諦らめ、主人の示す大戸びらまで後退す

る。井戸は休みなく働き続けなければならない。先頭の集団が泉の飲み口から離れる。おけが空く。植民者は庭を出て、牧群をおけの方へ誘導する。たこだらけの手でつるべ綱を強く引っぱり、水を汲み上げる。

しばらくすると、水おけは満杯にならなくなり、やがて空で上ってくる。がその節くれだった手はなおもつるべを投げ入れる。水はちゃぽちゃぽと音を立てて少しずつ"サムウ"井戸を満す。

南十字星がその軌道の長い旅をすでに終えたころ、滑車の歌はやむ、がまたすぐに始まる。人と動物が生き抜くためにはそれを必要とするからである。

騎兵隊は森のとぎれるところに野営している。テントの前で兵士達が燃やすたき火の列が闇を照らす。ふざけ合いながら、彼等は親切な植民者が差入れてくれたおいしい肉とじゃがいもを焼いている。意気軒昂である。

ボケロン砦は長い激しい戦闘の後、パラグアイ軍の手に落ちた。武器、弾薬、食糧など戦利品は、それこそ大切なものであった。窮乏によるいざこざや暑い日の息苦しさも忘れられた。

まもなく、静かな夜にパラグアイ式ギターの甘いしらべが奏でられる。グアラニーの息子達の豊かな声が祖国パラグアイのビブラードのきいた歌を歌う。

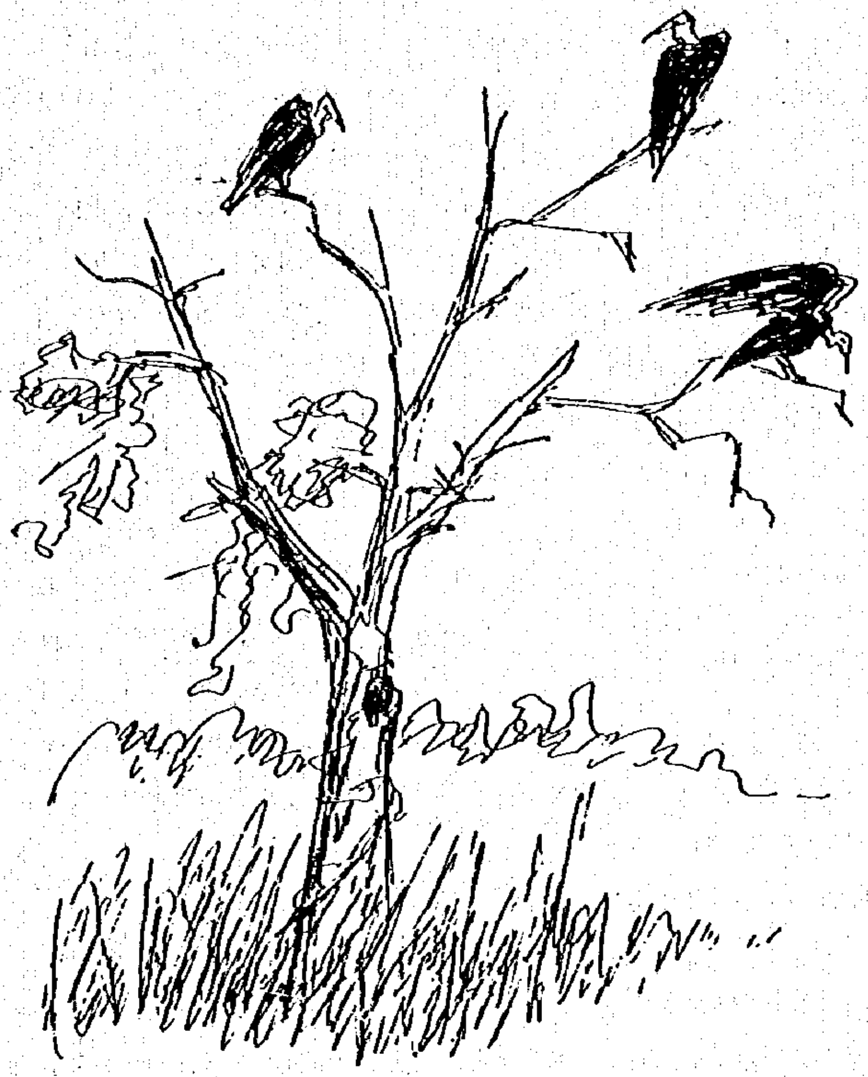
植民者は子供の手をとり、若者達の唄を聞きに集まってくる。

心労を重ねる母、悩み多い美しい女、隠居したお年寄、りりしい原野の開拓者達のぼんやりした影が闇の中を進む。

歌が終り、一瞬すべてが静止したような静けさが生れ、次の瞬間、聴衆の大きな拍手がわきあがる。チヤコの夢のような夜は疲れた兵士達が当然の休息を求めるまでの長い時間彼等の奏でるギターと歌声を聞いている。

夜のシンフオニーは若者達に代って、こおろぎとせみが引き受ける。

後陣では



後陣では

"ウルタウよ泣け"

嵐の雲が立ち、湧きあがる。稲妻は天をかける。ロシアでの迫害を逃がれ平和を求めて来たはずなのに、戦争や戦場の叫喚が我々を取りまいている。我々の北チヤコは飛行機、大砲、弾薬、大型トラック、軍服、武装兵士で"近代的"になった。つぎからつぎへと兵士達は戦闘の犠牲になってゆく。

悲しき進歩／ 我々の愛する祖国の上にふりかゝるなんという不幸／ 我々の新しいコロニー、我々の畑や子供にとってのなんという災難／ 父なる神よ、この戦いに一日も早い平和な解決をお与え下さい。

1932 年の春は早くやってきた。ウルンデイの大木はすでに葉を落し、ケブラチヨやその仲間の木は美しい新緑で着飾っている。

節の多いいなご豆の木はまもなく熟れる長いさやをつけている。インデイオ達はその豆で酒を作り、夏祭りを祝い、酔いつぶれるのだろう。

パラトード木はその曲った枝を広げ、黄色い大きな花を空に向けて一杯に咲かせている。ほてい腹のサムウの実はふくれて、白く光る絹のような繊維が無数についた種子を散らす。

花とかずらで被われた何千という灌木は山林を飾り、チヤラタ鳥(charrata)や色とりどりの羽飾りの仲間達が歌う。

このように、万物が神の栄光を謳歌する一方では、人間の生命が消えてゆく。

グランチヤコの地を血で染めて屍が横たわる。捕虜や傷兵や多くの若者達が、ふるさとや家庭から遠くはなれて見知らぬチヤコへの原野の草むらで生命を終える。

アルトパラグアイの森林の畑で、あるいはチチカカ湖の岸辺で、母親は息子の、恋人はフィアンセの、妻は愛する夫の帰りを空しく待っている。彼はもう二度と戻ってこないだろう。肉は禿鷹に食われ、燃える太陽で骨は白く変り、そこは十字架を建てる者も花で墓を飾るものも誰もいない。

孤独と苦悶、待ちつづけた数ケ月の後に、アスンシオンあるいはラ・パスからの一枚の葉書。丁重な選択された弔詞――"………及び祖国のために戦死され

ました……偉大な兵士でした。………"と。

今、英雄的なパラグアイ女は慰めようもなく泣きくずれる。彼女の心は強く純粋に愛しているために。

どんなに多くの母親が他人の服を洗濯し、アイロンかけをしながら息子の教育と勉学を可能にしてきたことか！

パラグアイ女の心を７０の大戦争のあの悲しい詩は表わしている。

泣けよ、泣け、ウルタウ
ヤタイの枝の中で
私が生まれ、お前が生まれたパラグアイは
もうこの世にはない
泣けよ、泣け、ウルタウ！（注※）

Nikolai Siemens

メンノブラット 4.9.－1932

（注※） アルゼンチンのロマン派詩人カルロス・ギド・イ・スパーノ(1827－1918)が1868年、"Nenia（哀悼の歌）"の題名で発表した詩集の一片。当時は大いに流行した。

トレド砦

フィラデルフィアより約４５㎞の地点に豊富な真水をたゝえた井戸のあるトレド砦がある。

恐らく、この名前の由来は母国スペインの有名なトレド市からきたのであろう（注※）。

我々は入植の当初より、この場所の名前を聞かれていた。それは多くの機会に、徒歩や馬やらばで、あるいは荷車で、トレドに向かうために我々の村をパラグアイ軍の小隊が通りすぎていったからである。しかし、トレド方面に向かう軍用トラックや飛行機は一度も見かけなかった。

創世紀が語っている天地創造の三日目のように静謐がグランチャコの孤独の中に広い森をつゝみこんでいただろう。誰にも妨害されず、鳥達は巣を作り、野生動物は森辺でおだやかに草を食んでいた。

多分、時にはレングア族のインディオが夏の豪雨に出くわして湖で道を間違うこともあろう。が静寂と平和はこのおだやかな場所を支配し続けたに違いない。

ある日軍隊が現われ、動乱が始まった。兵舎が建ち、燃えるまきのにおいと煙が立ちこめ、奇妙な号令の声が響き、鳥達は遠くに去り、鹿は別の場所で草を探がし、人は征服したての場所をトレドと呼んだ。

1932 年8月に、パラグアイの守備隊をしのぐボリヴィア軍が砦を奪取するまでトレドが重視されることもなく、何年か経った。ボリヴィア軍の戦闘機が我々の村の上空を飛び、フィラデルフィアへ機銃掃射を浴びせたのもこのころである。

国を総動員したパラグアイの兵士達があらたにチヤコ地域に到着して、トレド周辺の情勢が一変した。

9月下旬、ロシア人のキャプテンが騎兵隊を指揮して砦を攻撃し、ボリヴィア軍を撃破して奪回に成功した。その時以来、トレドはパラグアイの手中にある。

今日でも、トレドは大変立派に築城された砦である。その年の3月と4月に起きた激しいボリヴィア軍は砦の再征服に失敗した。砲声はうなり、銃声は夜通し我々の村で聞こえた。日中はそれほどではない戦いの音は、夜と共に激しくなり、夜明けまで死の〃クレツセンド〃を続けた。

きっと敵の攻撃が夜間に集中したためだろう。熱帯の夜のしじまの中で死の音を遠くに聞く我々さえも魂がしめつけられるのを感じたのに、戦闘の近くや真中に居た若者達は一体どのように感じて居たのであろうか？

はるか彼方にまたゝく星までも震えているように思えた。

軍用トラックの列また列が兵士や武器や食糧をトレドへ向けて運んでいき、ある時は戦病兵や捕虜を積んで戻ってきた。

前線へ向う兵隊達は気鋭で、勇敢で、最後の勝利を信じているように見えた。

パラグアイ軍は構築物のうしろに居たため敵よりも有利であった。一方、ボリヴィア兵は塹壕を襲撃しなければならなかった。

戦果のない16日間の攻撃と多数の命を失った後で、ボリヴィア軍は敗北を認め、重要な戦闘器材を放棄し、気力をそがれ、打ちひしがれて退却した。パラグアイ側の戦死者は大したことはなかった。

トレドへ行って、戦火の跡を見てみたいという欲望があった。長い間、我々の

想像のスクリーンに数多くの影像を送ってきた本場だからである。

数日して、その機会がやって来た。我々の部落はトレドの司令部、というより経理官と勘定を清算しなければならなかった。何人かの友人である将校が、私にトレドへ行って前線の担当官と勘定をすませるよう推めた。フィラデルフィアの参謀本部は簡単に通行証を発行してくれた。友人であるバード将校が月曜日に自分の車でトレドへ連れていってくれた。隣人を一人同行した。

コロニー7、8を通り、Fernheim を後にし、山林部を通り、広い平原部を横切った。車はまたたくまに我々を砦の近くにまで運び、最初の兵舎が見えてきた。四方八方から、"オラ・メノンニタス"(やあ、メノさん)という若者達の親しげな大声が聞こえた。若者達はみんな我々の村を通ってきたのだ。彼等は村の若者と、多分私とも友情を温め合った仲であった。オリーブ色の服を着て、ひげをはやし、日に焼けた姿から彼等を見分けることはできなかった。誰もが兄弟であり、家族の一員に思えた。

200m手前で車を降り、厚い樹木の中につづく小道を歩いて、我々はトレド司令部の前にでた。司令官も経理官も不在で、副官が非常に親切に我々を迎えてくれた。

私は訪問の目的である問題を説明し、戦火の跡を見る許可をお願いした。

幕舎には軍医の Dr. Recalde がおり、我々は彼とドイツ語で話しをすることができた。軍医は我々の願いが叶えられるよう交渉することを我々に約束した。

将校達はとにかく何か食べることを主張し、将校クラブに我々を連れて行き、そこではコックが料理の注文を受けた。

"コック長" ── 将校達はこう呼んだ ── はキャンプの台所にあるもの全部を使って我々のために最大のもてなしをしてくれた。食事は大変おいしかった。

やがて、多くの大人達と若者達が話をするため我々をとりまいた。言葉上の問題はあったが、我々はにぎやかに話しあった。百姓で一家の父である一人の兵士が肩からつるした袋の中から、色々の種類の Cafir(もろこし)の実を取りだした。我々は彼にどれが良い品種か、いつごろ播種したらよいのかと説明しなければならなかった。私は書類入れの中に我々が"冬のいんげん"と呼んでいる、"チリ産"の白いいんげんを持っていることに気がついた。

彼の小さな宝物に加えるよう私は白いいんげんの種子を彼に贈った。"無事に家へ帰れたら、播いてみます"、と彼は言った。

我々が砦で一夜をすごさなければならないことを知った別の兵士は、妻や子供達が不安がらないか、と心配そうにたずねた。"我々の父さんはいつ来るだろう？""手を合せて、神が彼をボリヴィア人からお守り下さるようお祈りしましょう""あなたの両親もあなたのことを祈っているのでは？"、と私は若い兵士に問うた。"勿論です、毎晩私のことを祈ってくれています"。

ロシア人の工兵が蚊の多い場所でどうしたら我々が一夜をすごせるかということを心配した。兵士達には蚊帳が余分になかったからである。しかし、我々の親愛な実践的なコックは問題を解決した。

灌木の下の場所を清掃し、地面に毛布を置き、頭の箇所でテントを円く鈎型にし、それを枝に結んだ。魔法の仕掛けのように蚊帳が現われた。こうして立派なベットの用意ができたのである。"おやすみなさい"と丁重に挨拶して、我々の友人達は去り、我々の蚊帳の下にすべりこんだ。

トレドの上に静かな夜が更けていった。無数の星が夜空に輝やき、三日月がゆっくり移動し様々な想いが私を眠らせなかった。"ついこの前まで、最も激烈な戦場であった場所が、今は深い静寂の中に安らいでいる。蚊帳の外をたたく血に飢えた蚊が私の"ゆりかごの歌"となった。

朝の光が我々を起した。太陽が昇るところだった。樹々の枝には小鳥達が新しい一日の誕生を歌っていた。蛙は近くの畑で鳴いていた。銃弾が巣を破壊し、育てていたひな鳥を奪われてしまったかまどりも黄色いケブラチョの木の又木に丸い土の巣を作るために戻ってきた。彼等のふるわせたような歌声がトレド砦の新生の空を一杯にしているところをみれば、きっとあの悲しみも忘れてしまったのだろう。

しかし、理性を持っている人間は違うのだろうか？　少年の最良の戦友は手榴弾の死の破片を頭部に受け、頭はくだけ、血と脳髄は仲間の軍服に飛び散り、死んでしまったのではなかったか？

いつだったんだ？　昨日か？　一昨日か？　今、その少年はここに居る。私から数歩離れて、生き残った戦友とたき火を囲んで、冗談を言い合いながら、にこ

やかにマテ茶を飲んでいる。勿論、死んだ英雄である若者の最後の住家となった築山に小さな十字架を立てたのは彼である。十字架はやがてばらばらとなり、腐ってしまうだろう。熱帯の強い雨に洗われて築山はくずれてしまうだろう。

しかし、生き残った者は、ケブラチョの又木のかまどりのように未来を歌うだろう。戦線での危険を注意すると兵士は肩をすぼめて言う。“私の義務ですから。もし運命が私の心臓に弾を向けたら、死ぬほかはないでしょう。兵士の運命です”と。

二人の兵士が一人の不運なボリヴィア兵士を連れてきた。

哀れな恰好であった。最後の戦闘に破れてボリヴィア軍が敗走するとき、彼は山中で迷ってしまった。それから7日、飲まず食わずで生きのびた。彼はパラグアイ将校の詰問にふらふらしながらふるえて答えた。食物が与えられたあとで、トラックに乗せられ後陣に送られた。

山から出ると一人の兵士が車に近づいた。軍医は彼に我々と同行して司令部のテントへ行くように命じた。戦線へ我々を案内するよう電話で連絡を受けていたのだった。手続きは簡単だった。我々は戦線に近い監視所に到着した。一人の歩哨兵が我々に同行した。200m程進むと塹壕の上に出た。塹壕と平行して、深い樹木の影に隠されて土塀が軍需物資や食糧を供給するために築かれていた。

約1500m進むと抜根して、山焼きの準備がされたような場所に着いた。歩哨はその場所を“岩”と呼んだ。“なんのためにしたのですか？”、と私は彼にたずねた。歩哨は答えた。“まあ、見て下さい。こうするのに16日かかりました。斧を使わず弾と大砲だけで”。印象的だった。ケブラチョや酔っぱらいの木のような古い大木は弾丸の雨に抵抗したが、幹は鉛で充満し、葉は落ち、殆んどの太枝は手榴弾でふっとんでいた。

“ここが我軍の塹壕です”、と案内人は説明した。“あそこからボリヴィア兵は我々に攻撃を仕掛けたのです”

塹壕を離れて、平原を横切った。数体の遺体を見た。それらは土で仮の埋葬がしてあった。先にゆくと、そのまゝの遺体があった。ある兵士は手榴弾で足を失くして、ほんの数メートル離れたところに横たわっていた。

我々はカーブを描くようにして、再び山に入り、敵の塹壕のそばに来た。

至るところに、パラグアイ兵のテントと兵舎があり、しばらく前までは砲声と死にかけた者のうめき声が聞こえたところに元気な話し声と笑いがあった。

親切な兵士達は我々に明るく挨拶し、あらゆる種類のおみやげをくれた。機関銃や臼砲の薬莢、手榴弾の針、etc は多分司令官の指示に従ったのだろう。

我々は兵士や、親切な将校や、塹壕や、そして"岩"に別れを告げた。日暮れの太陽の光が我々を伴走した。私はその日を決して忘れないだろう。

Nikolai Siemens

メンノブラット .&3 - 1933

〔注意〕トレドの命名はフェリペ・トレド大佐の名を記念したもので、彼は三国同盟戦争(1865-1870)中死んだ大統領護衛艦隊の艦長。国民的英雄とされている。

"夜明けよ、夜明けよ、私の短い命を照らせ"

(騎兵の夜明けの歌)

40年以上も昔、南アメリカの中心、北チャコの荒涼とした無人の広大な土地で激しい不幸な戦争が勃発した。

ボリヴィア軍はピティアントウタ(Pitiantuta)砦を征服した。パラグアイ軍はパラグアイ河から西に向けて前進した。1932年の中頃、チャコの南部地域で激しい戦闘が開始された。

戦争勃発時、我々のコロニー Fernheim はまだ建設されて二年足らずだった。

チャコ戦争は私の幼年期の最も鮮烈な体験の一つである。

我々、コロニー10の子供達は村の学校めざして好奇心にかられ、興奮してかけて行った。そこには、見たこともない何頭もの牛に曳かれた巨大な車輪の荷車が到着していた。我々は軍服姿の兵隊、武器、機関銃、大砲に感嘆した。

兵士達の食物が我々を魅了した。彼等がくれたビスケットを喜こんで食べた。

母親はもう子供達が自分達の庭に帰ってくるのをみかけることはなかった。

その後、軍隊は連日やって来た。とぎれることなく、兵士の列はコロニー10の一箇所から入り、別の箇所から常に西に向けて去っていった。当初は兵士の多くは大人であったが、そのうち、若者や声変りしたばかりのような少年兵が増え

た。彼等はいつも西へ、トレドへ、戦場へと向っていった。トレドでは巨大な戦場の弾薬が待っていた。我々の小村は巨大な軍のキャンプ地となり、付近の野原には長い塹壕が作られ、我々の学校は司令部に変り、運動場にはすごい防空壕と物資貯蔵所が造られた。

こうして、数ケ月が経過した。新しい兵隊が到着しては去っていった。

夕方と夜明けには大砲の響音が聞こえた。大人達は村を引揚げることを心配そうに話していた。

しかし、何も起らなかった。ある日、軍隊は去り、学校は解放され、授業が再開された。

我々の先生は戦争の出来事の進展にいつも強い関心を寄せ、少しずつ国の北西方面へと遠のいてゆく前線の最新ニュースをよく聞かせてくれた。音楽の時間にはいくつかの兵隊の歌を習った。我々はそれらの歌を兵士達が学校を訪ずれる度毎に熱心に歌って聞かせた。その頃は"良き仲間"という歌が歌われた。

ある音楽の授業のことが、私の記憶には永遠に残っている。

我々は"騎兵の歌"を習っていた………"夜明けよ、夜明けよ、私の短い命を照らせ、すぐに死のラッパの音が鳴り響き、私も仲間達と死んでゆく"

悲しいメロディーに私の声もつまった。うしろの方から、最高学年の最後尾の席からすすり泣く声が聞こえた。

みんなうしろを振り向いた。歌はやんだ。そこにはクラスの最年長者ピータが居た。彼は頭を机の上に乗せ、からだを震わせて泣いていた。

"どうした、ピータ？"、と先生はピータの亜麻色の髪を優しく撫でながらたずねた。声を取戻すまでだいぶ時間がかゝった。ピータは震えながら、とぎれとぎれに言った ——"可哀そうな兵隊、僕は彼等のことを決して忘れてはならない。彼等は戦場で死ななければならないのだ"。

もう歌うことは誰もできなかった。そして生徒達は黙って運動場へ出ていってしまった。

"騎兵の歌"を聞くと、ピータとチヤコ戦争のことが想い出される。

Peter P. Klassen

フレツド・エンヘンの爆撃

我々がやっと村を設計し、初めての仮住まいを建てかけた頃、ボリヴィアとの戦争が勃発した。幸いにも我々は戦争のことをあまり気にすることもなかった。

私と友人の Peter Wiebe に小麦粉の引取りにプンタ・リエンスへ出かける順番が廻ってきた。のろい痩せた牛に途中まぐさもやらず荷車を曳っぱらせてプンタリエレスまで旅をすることは、少くとも一週間のちょっとした冒険を意味した。

"フレツド・エンヘン"駅にはメノ派 Fernheim コロニーから無数の荷馬車が集まっていた。すべてこれらの車は綿を運んできたもので、帰路は食糧品、特に小麦粉を積んでゆかねばならなかった。

思いがけなく、カサード港から軍隊を乗せた列車が着き、"フレッド・エンヘン"駅の広場は兵士達でごった返した。

突然5発の銃声がして、右手に大きなレボルバー銃を持った隊長が大またで広場を横切りながら急いで駅を離れるようにと叫んだ。すると爆音がして、続いて三機のボリビア軍の飛行機が現われた。

もう逃げる時間はなかった。我々は地面にひれ伏して、両手で頭を覆った。

不気味なうなり声がして、我々のすぐ近くで、ものすごい爆発が起った。私は立上り、走り、再び地面に伏せた。別の恐ろしい爆発、また走る、別のうなり、爆発。

信じ難いことだった。走りに走った。が飛行機はつねに人の上にいた。悪夢はほんの数秒であったにもかゝわらず、一秒一秒が非常に長く思われた。敵機はそれて、何事もなかったかのように去っていった。

多くの爆弾が落されたが、爆発したのは三個だけだった。

兵士の中に死亡者と負傷者が出た。駅長の Troxler 氏は金の入ったままの金庫をそのままにしていた。誰もが命からがら逃げ出したのだ。

我々は急いで荷を積み終え、駅を離れなければならなかった。悲しくつらい帰還であった。戦争の勃発以来、兵隊ばかりでなく村民の間にもマラリアが猛威をふるった。我々の子供の多くも旅の途中病気にかかった。コロニー2の二人の若者は旅を続けることができなかった。

診療所は病気の兵隊で一杯のため子供達を収容することができなかった。彼等

のうちの一人はカサニージョに置かれ、まもなく死んだ。

コロニー8の Juan Penner は荷車から降りることができなかった。我々は交替で彼の面倒をみた。

その後、兵隊の縦列がほこりにまみれ、青白い色をして、また病に苦しんで、我々の村の通りを去っていった。

我々の学校は病気の兵隊であふれた。一人が死亡した。我々は遺体を毛布にくるみ、我々の墓地に埋葬した。彼の墓のそばで我々は祈り、国歌を唄った。

〝あの星の海のはるか彼方に、最良の国がある〟と。

Peter Enns

フイラデルフイアでの機銃掃射

これはチヤコ戦争です。フィラデルフィアにある私達の病院の薬店の広いひさしの下に軍用電話が設置されました。戦線からたえず情報が送られてきました。

軍の下僚が一人常時待期してます。電話のそばには医院長の姿をよくみかけます。先生方に元気がないこともしばしばです。私はこの病院の婦長です。

病院の近くに防空壕がつくられました。ある朝、一人の兵隊が走ってきて、敵機がフィラデルフィア方面へ向ったという情報が入ったので急いで避難するよう私を説得しました。

〝残念ながら〟、私は答えました。〝私には患者があります、彼等だけ残せばきっと恐れをいだくでしょう。ともかくありがとうございました〟。

その日は偶然にも、パラグアイ東部からコロニーの役場がつれてきた多数の馬のせり市が開かれていました。このせり市は近在の住民の人気を集め、フィラデルフィアの製材所の広場を埋めつくしていました。

ボリヴィア機の爆音が直接我々の小部落に向かってくるのが感じられました。

旋回する飛行機が見えたと思ったとたん、機銃掃射の音が聞こえました。敵機はフィラデルフィアの工業センターを襲撃したのでした。幸いにも銃弾は建物の屋根と土地に落ちただけですみました。

せり市は中断され、人々はあわてゝ自分の村に戻ってゆきました。

あの日から30年以上が経ちました。私はドイツの Stügart 市にある〝国

際交友協会"にきています。
ここでパラグアイへの移民について講演するよう招待されたのです。
私の講演のテーマには勿論あのチャコ戦争の私達の体験が含まれています。
私は参会者の方々に、我々が過した苦しみ、緊急避難命令を前にした村民の絶望感、私が病人や負傷者を看護していたフィラデルフィアへのボリヴィア機の襲撃などのエピソード、神が私達の祈りをお聞きとどけになり、逆境にある私達をお守り下さったお蔭で、パラグアイ軍からもボリヴィア軍からも軍隊の侵略を受けずにすんだことなどを話しました。
私の講演が終ると、主催者側の方々がみえて、お祝の言葉をいたゞきました。
一人の紳士がそばにきて、私に手を差しのべて言いました。
"私の敬愛する婦人よ、あの飛行機を操縦していたのは私です"、私の前に居る紳士はボリヴィア空軍総司令官 Hans Kundt 将軍その人だったのです。
私は困りはてて、"私達を爆撃したのは貴方でしたか?"、という返事以外何も言うことができませんでした。
そのあと、私達はやさしく、平和的に話し合いました。

Suse Isaak

私のボリヴィアの捕虜

チェヌ少佐とビジャルバ大尉はトレドから戻り、コロニー8の郊外に中継地点としての常設キャンプを設けた。
一方、ホデレィ大尉はトレド防禦を強化するため援軍を受けた。肉の補給はイスラボイから生きたまゝの牛を運んだ。その他の食糧は大きな荷車で着いたが、若牛達は牛飼いが追い込んだ。トレボルを越えてトラック輸送を行うことは殆んどなかった。
私は大きく太った一頭の雄牛を持っていたが足を痛めているため、畑仕事には役立たなかった。ある日、私はチェヌ少佐のところに行って、私の牛と若くて元気な牛とを交換してくれるようにたのんだ。
牛の数については少佐の権限であったが、その種の交換には許可が必要だった。
したがって、彼は若牛一頭と私の雄牛をコロニー8のキャンプで交換して欲し

いという私の願いを叶えるべくキャプテンあてに推選状を書いてくれた上に兵士を一人つけてくれた。

私にはコロニー6の友人 Willy Klassen が同行した。

金曜の朝早く我々は出発し、約40キロの道のりをのんびりと旅して、夕方トレドに到着した。私はキャプテンに会いに行った。彼はグアホの件ですぐ私を想い出してくれた。

彼は山辺の塹壕を案内してくれた。塹壕の前には敵の攻撃を防ぐため、鋭った木杭を張りめぐらした溝道がつけられていた。

この柵を越えようとしても、腹部に鋭い一突きを受けるだけだろう。塹壕に沿って、無数の電話線が広がっていた。司令部と塹壕や作戦部を結ぶ避難所もあった。キャプテンは私の未来の引き牛のいる囲い場まで同行してくれた。けどそこにはボリヴィア兵が見放した小さな毛の多い数頭の動物しかいなかった。どれを見ても、荷車を引くことや畑仕事には役立たない。すでに季節は9月中旬で、種播きを始める時期だった。私は交換を撤回し、その夜のうちに戻りたいとキャプテンに申し出た。彼は戦争状態にある地域の夜間通行を否定した。

にもかゝわらず、再び私はキャプテンの宿舎に出頭した。彼は折畳み式のベットに横になり、ランプの光の下で本を読んでいた。

我々の会話は短かく、結果は前と同じだった。私は仲間と同行して来た兵士と共に戻った。小雨が降り出し、夜の闇はカーテンのように我々の行手をはばんだ。

至るところで、塹壕にそのまま横たわっている兵士の姿を感じた。

あたりが静まり返ったころ、私は仲間に言った ——“出かけよう、俺はこんなところには居られない。こゝで一晩すごすなんて、うんざりだ”。友人はすぐ同意した。兵隊を起こした、が彼は命令に背くことをきっぱりと拒否した。彼は少し迷っているようだった。が馬は鞍をつけており、私には残る理由は何もなかった。我々は護衛なしで、こっそりと出発した。今考えると、我々の行動はおろかで、分別のないものだった。しかし、あのとき私には急がねばならない理由があった。

コロニーでは婚約者が待っていた。すでに金曜日の真夜中だ。土曜日の午後にはどうしても欠席できない招待の約束があった。その上、私は自分の大牛とボリ

ヴィアの毛深いやせ牛とを交換する気持はなかった。

最初の哨戒兵に会ったのは夜明けだった。彼等は抑えた声で我々の行手を制し、我々も同じような声で答えた。

そこを通してくれた。幸いなことに、二番目、三番目も運よく通過できた。彼等は我々をメノ派の入植者だと判っていたのだろう。

複雑な小道をたどって、馬は無事我々を主要道路に導いてくれた。帰宅したのは朝の8時だった。

無事帰宅できても、私は内心かなり不安を感じていた。キャプテンの命令に背むき、同行者を置き去りにし、戦時下の軍の砦を抜け出たことに対し罪の意識を感じたことを認めざるをえない。私は身仕度をして、再び馬に鞍をつけ、恋人と連れだって招待の場へ出かけた。彼女にはトレドへ行ったことだけは話したが、夜中の出来事には触れなかった。

漠然とした予感と不安感を抱きながら、日曜日の夕暮れに村に帰った。そこで何に出くわしたか想像したまえ。家の大戸びらの支柱に、ボリヴィアの山のように灰色をした高原の毛深い小さなやせ牛がつないであった。私の太った動物の姿はなかった。キャンプで屠殺されてしまったに違いない。神のお裁き。

キャプテンは我々の行動に腹を立て、お返しに交換をあくまで実行するという意地悪さをもって答えた。

友人であるチェヌ少佐は軍にとっては喜こばしい動物が手に入ったことに満足していた。が月曜日に彼に会うと、ひどく叱られた。そのことはそれだけですんだ。よそ者、つまりメノ派住民には大変寛大であった。

"ビル"、ボリヴィアの捕虜を私はこう呼んだ。その後、彼は立派な引き牛に成長した。私は自分から彼が戦争捕虜だとは決して言わず、パラグアイ生まれの良き友として処遇した。ただ、時々は彼が帰化したのだということを感じさせた。

1937年、"ビル"はロサリオのイタクルビに移住し、そこで"Friesland"コロニーの建設に参加した。私は彼の非難を一度も聞いたことがなかった。

Heinrich Dürksen

フイラデルフイアの病院で

チヤコ戦争が勃発したのは、Fernheim コロニーが建設されていた二年目のことでした。ボリヴィア軍はメノ派入植地の近くまで前進してきました。

開拓地として準備をされていた土地には病院の建設が開始されていました。

現在、手術室のある小さな建物が最初に完成されたもので、そこには薬局と診察室がありました。当時、わらぶき屋根の建物の周囲には広い縁があり、日中には涼しい雰囲気を作り出していました。また、この場所は患者達の待合室としての役目も果しました。窓は当時はまだガラスやよろい戸ではなく、金網が使われていました。

北風が吹くと、砂やほこりの侵入を防ぐために毛布を使ったものでした。

ほかにも、環境の不安定からくる不便なことがありました、が病人を病院で治療できるという事実は大きな進歩でした。建物のそばにはトタン屋根の炊事場が建てられました。

当時、フィラデルフィアには、組合の職員である David Neufeld の家族以外には常住している人は居ませんでした。

最初の組合の建物が完成し、そして製材所、製油所、製粉所、その他が平日は働いていました。けど土曜日の正午には、従業員全員が自分の村に帰ってゆきました。村のどこかでお祭があるときなどは、フィラデルフィアは完全に無人の地と化してしまいました。土曜日になると私と患者だけということも少くありませんでした。こうした状態は危険であったし、人身的な危険性を含んでいたと認めてよいでしょう。

こうした中で、病院の建設は続けられ、土レンガの建物が完成しました。立派な建物の屋根は寄贈してもらったトタンでふかれました。軍が建物を占拠し、軍の病院に変ったときは、まだ土壁の塗りが完了していない時でした。建築工事は中断され、部屋の一つが手術室になりました。

私達の手術台や器械も譲ることになりました。別の場所に大きな薬局ができました。負傷兵や医師用にはまた別の部屋があてがわれました。

私達は何に従えばよいのか判りませんでした。私達は自分達の活動を別の場所で行うことを考えました。すると、医師達がそれに気付き、残るように我々を忠

告しました。彼等は私達の患者もみること、援助と保護を惜しまないことを約束してくれました。

縁側に戦線からの電話が設置されました。電話を通じて、フィラデルフィアから25キロも離れていない戦場から戦況が日夜報告されました。病院の建物の近くには防空壕と塹壕がつくられました。山には傷病者用の大テントが用意されました。病院の周囲には囲い鉄線がまだ張られていなかったために、自動車やトラックが無秩序に中庭に出入し、時にはそのため身動き出来ない有様でした。

昼に夜に激しい仕事が続きました。

医師達は日夜手術、切断、輸血、その他を行いました。重傷者はすべてフィラデルフィア病院へ運ばれました。コロニーの病人も手当されました。金曜日が軍医による村民の診察に当てられました。外科医達は責任外の手術も引受けてくれました。それは美しい協力でした。

私達は彼等から多くのことを学びました。彼等はいつも私達を助けてくれました。協力を鈍らせるものは言葉の問題でした。少しスペイン語を勉強した仲間達はあぶなっかしい通訳をつとめました。

私は覚えるために、必要度の高い言葉を書出して、夜や自由時間に一生懸命に用語を勉強しました。助産婦の Dürksen 夫人は病院と村の両方で忙しいにもかかわらず、いつでも、どこでも、バターを作る牛乳クリームをかきまぜている時でもスペイン語のボキャブラリーを勉強していました。同様に医師達もドイツ語の勉強に熱心でした。私達は彼等の助力と救護に深く感謝しております。村の人々は少ない持物の中から、マーマレード、バター、白パン、にわとりなどを感謝の気持として差出しました。

チャコ戦争とパラグアイ軍の医師団のお蔭で、私達は長いこと立派な看病を病人達にしてやれることができました。

Suse Isaak
婦　長

兵　隊

戦争が勃発したとき、私はやっと5才になったばかりでした。当時の想い出は

恐怖と苦悩の非現実な錯綜です。いつも、そして至るところで耳にした言葉、繰返された言葉は"兵隊"でした。

夜中に西瓜が全部盗まれると、"兵隊"だと言われました。私達の愛する"パルド"、美しい馬はある夕方、いつものように家の大とびらの場所に見当りませんでした。そして兵隊達がつれていったと考える方が当然でした。

ある暗い夜、庭に動く影を見て、私は大声をあげて家の中に逃げ込みました。

母が私の恐怖をなだめ、慰めてくれている間に、父は見知らぬものをさがしに外へ出てゆきました。恐ろしさを感じながら、私は戸外の音に注意しました。

奇妙な言葉の会話が庭で続いていました。扱いにくい、しっこい、荒々しい声のように思えました。

それは兵隊達でした。パパに何を要求しているのだろう？　父は部屋に戻り母に何か説明していました。言っていること全部は判りませんでしたが、とにかく兵隊達は去ってゆきました。

夜、私は驚いて目を覚ましました。にわとりがやけに鳴いていました。喉をつまらせたような叫びと同時に静かになりました。苦しい幻覚が私の幼い胸でうずきました。翌朝、夜中に兵隊達は戻ってきて、奪えなかったものを持っていってしまったことがわかりました。

部屋に入ったとき、大人達の会話がやんだことを想い出すのは何か不吉な感じがしました。

私の幼い聴覚は少女、襲われた、兵士といった単語を聞きわけました。少女に何が起きたのか、それ以上の事を想像することはできませんでした。が大人達に何か重大事を読み取りました。

夜、夢を見ました。いつも追害者は銃とナイフを持つた兵隊でした。

悪夢の絶望の極限では、突然道が開けて、漂いながら追害者から逃がれることができました。あるいは死の瞬間に目を覚まし、水をかぶったように汗をかいて、母か祖母のふとんの中に逃げこむことができました。

ずっと後になって、兵隊達がしたことがそれほど重大でなかったことを知りました。しかし、5才の少女の想像力の中には、単純に兵隊とは悪人だという概念が凝集されてしまいました。

肩に銃をかついだ兵士の長い行列を私は恐れの気持で見ていました。

そして肩にかけた銃は私の潜在意識の中に焼付き、私のつつましやかな村の通りを兵隊が行進してくる。私は恐しさで隠れました。

ある日、私達の学校の病院に収容されている負傷兵にパンを焼こうという呼びかけが家づたいに伝えられました。母はパンを渡しについて来るかと私にたずねました。兵隊？　再び恐怖感が私の中に生じました。しかし、母親の手につかまって、何が起きるかしら？　大丈夫、保護されているという感情と子供の好奇心が恐怖にまさり、私達は出かけました。

私は新鮮なミルクが入ったほうろう引きの容器を持ち、母はパンのかごを持ちました。

私達は学校である病院へ着きました。けど、あゝ、あのうめき声は、一体どうしたのでしょう。私達は兵隊の中に居ました。村の大勢の婦人達が手にかごと容器を持ってきていました。

あれから３０年が経った今日でも、私はあの異常な驚きをはっきりと覚えています。

これが兵隊なの？　このひげの、やせて疲れ果て衰弱した姿が兵隊？

彼等の顔は何故そんなに青白いの？　彼等の武器はどこにあるの？　けどこの哀れな少年達には悪いことなんかできない！　あの血のにじんだ包帯。あの少年の頭のガーゼにしみているのは血？　神様、聖母様、お母さん、お母さん！

いたるところで聞こえてきたこの言葉とうめき声。

忘れることのできない印象でした。

“兵士であることの喜び”、数年後、若者運動の仲間達とこの歌を唄いました。

あのすさまじい情景、あの栄養失調の顔、苦痛にゆがんだ顔、地面に横たわる衰弱し切った兵士、「神よ、お母さん、お母さん」こうした思い出から逃れることは決してできませんでした。

Else Klassen

見知らぬ兵士

チヤコ戦争中のことでした。すさまじい砲声が空を震わしていました。

コロニー6、7、8の人々はあの当時のことをはっきりと覚えています。

私達少女は夜でなくても母のそばを離れることをいやがりました。しかし、私達の恐怖と心配は、戦線がコロニーの土地までも到着するということで、緊急撤退命令を前にした両親の苦悩と比較すれば小さなものでした。

ある日、コロニー6の附近で一人の兵士の遺体が見つかりました。遺体はすでに腐乱状態でした。

どのようにして、その場所で兵士は死んだのでしょう？ 数時間、多分、数日間哀れな兵士はそこで病気で横たわっていたのでしょうか？

父と隣人は埋葬のため発見場所へ出かけました。少年兵の遺体を前に深く感動しました。所持品の中に Estanislao Dominguez というネームの手帳とE．Dのイニシアルの文字がケースに彫られたナイフがありました。

それらの品は大事に保管しました。穴を掘り、無言のうちに兵士の遺体を埋葬して、孤独な盛土の上につつましい十字架を建てました。

"ある恐しい出会い"という題で、数日後メンノブラット新聞がこの話を記事にしました。

偶然にもこの記事がパラグアイ軍の見習い士官 Shreiner 大尉の目にとまりました。キャプテン Shreiner はドイツ移民で、プエルト・ロサリオの東部方面に入植していました。トレボルの病院で、キャプテンはこの記事を読んで驚き、"恐しい出会い"の話が気になったのです。

その少年兵 Estanislao Dominguez は近くに住む友人の息子かもしれない？

ドミンゲス夫妻は相当年配の経済的にも豊かな夫婦で、彼等の一人息子がエスタニスラオという名前でした。そして彼は祖国防衛のため志願していました。

事件に関心を抱いたキャプテンは即刻調査を開始しました。

調査によって不可解な死をとげた若者の身元はすぐに判りました。エスタニスラオ・ドミンゲスはコロニー7の野戦病院に従事する衛生隊に属していました。

ある日、E・D兵士は気分がよくないと言い、フィラデルフィアかトレボルの病院に入院する許可を申請しました。そしてコロニー7から出てゆきました。これが彼についての最後の情報でした。彼を知る者は彼がどちらかの病院に入院していると信じ、その衛生兵のことを心配したものは居ませんでした。

こうして、エスタニスラオの死の謎は永久に判らずじまいでした。病気が彼の歩行をとめたのでしょうか。あるいは喉の渇きが彼の体力を消耗させてしまったのでしょうか。確かなのは、無慈悲な運命がきっと彼に助けの手を差しのべたにちがいない親切な村人が住む部落の近くで落命したということでした。

キャプテンシュレイナーは当然の義務として彼の友人に報せました。

若者の両親は悲嘆のうちにも息子の死に関する詳細を伝えてくれるよう熱心にたのみました。

ある日、軍のトラックが私の家の前に停まりました。軍のトラックが来ることは当時は珍らしいことではありませんでした。

トラックからキャプテンシュレイナーが降りてきて、すでに知人同志である父を見ると、E・Dの墓へ案内してくれることを頼みました。彼の使命は遺体を近くに移動したいという故人の両親の希望を実行することでした。

男達と父、そして私も許可を得てトラックに乗込みました。村を出てしばらく行ったところでトラックは停り、そこから埋葬の場所までは兵隊達が枝や龍舌蘭をかき分けて私達に道を作ってくれました。そこは少し前まで"無名兵士"として取扱われていたのだが、生前にエスタニスラオ・ドミンゲスと呼ばれたことを今では我々は知っていました。

男達は作業にとりかゝり、しばらくして遺体が発掘されました。遺体はキャプテンがあらかじめ準備させた黒い棺に注意深く、やさしく安置されました。

ドミンゲス夫妻の一人息子の亡骸はきっと、両親と共に眠る墓地で永眠の床についたのでしょう。

けれど、どんなに沢山の親や友達が死んでいった、あるいは行方不明の愛する者が、荒涼と広がる北チヤコの何処に埋められているのかも知らず泣きつづけているのでしょう!

Gerturd Kliewer

ロシア刑務所の中でのチヤコ戦争(注:原)

1932年のことだった。私はLeningradoからWologdaへ、Wologdaから白海の岸のArchangelskへと刑務所暮しを続け、当時はArchangelkの

予備刑務所に居た。

南アメリカではパラグアイとボリヴィアの間で戦争が起きていた。いわゆるチヤコ戦争である。我々の不安な、きびしい立場にもかゝわらず、新聞は読むことができた。

毎日監守が小さな鉄格子ごしに、"Prauda"を渡してくれたのである。

(Prauda:"真実"、共産党の新聞)。

我々の読解力でも、世界の出来事を知ることはできた。私が最も関心を持って読んだ記事は、チヤコ戦争の戦況だった。その訳はチヤコに両親と兄弟達が住んでいたからである。

その激しい戦争の原因は何なのか?

ソビエト政府がその動機を我々に悟らせ、解説するまでには時間はかからなかった。

しばらくして、"プラウダ"は大きな風刺画を掲載するという説得力のある方法で、誰が戦争の真の扇動者であるかを示した。二隻の巨大な石油タンカーが相対している。それぞれのタンカーの上にブーツをはき、つばの下がった帽子をかぶり、大きな槍を持った南米の牛飼いが乗っている。二人の荒っぽい紳士はお互い相手を馬から引きずり降そうとしている。

各タンカーには大きなラベルが貼られていて、読者の理解と疑問への解答が凝らしてある。ラベルは次のように読める。

"England (Royal Dutch)及びU.S.A(Standard Oil)"

この仕掛けで、読者は事情が理解できるわけである〔注原文〕。

2カ月前から、私はポーランド将校と監房に入れられていた。この間8度の取調べがあった。私の罪状は逃亡とスパイ行為だった。この罪の回復のため、自ら故郷に戻り、同志達のスパイとして働き、その情報をG.P.U(国家政治警察)へ報告することが要求された。私はそのいやらしい要求に抵抗した。私の死刑執行人の脅迫も私の強い拒否の前では無駄だった。またいつものように、深夜、私は監房から連れ出され、取調室に向かった。

取調官の部屋に着くと私は心理的に新たな拷問に身構えた。しかし何事も起らなかった。私の無造作な拷問者は椅子から立上り、ついてくるように命じた。部

居に近い一つのドアを彼はうやうやしくノックした。印象的な事務机を前に一人のGPU高官が座っていた。

彼は私に前の椅子に座るよう命じた。取調官はそばのソファーにうやうやしく座った。

気のないような静かな声で高官は私の要求と逮捕の動機をたずねた。私はこれまでの取調べと同じ返答を正確に繰返した。私が1929年ロシアからドイツへ移住した家族の一員であり、ドイツへ移住する許可が同じように与えられるべきだとするドイツからの書状を受領したこと。私と同じような立場の若者がドイツへ移住したことを。

私の最後の言葉が余計だったのだろう。高官は激しく怒鳴った。"嘘つき、お前はメノ教徒ではないのか？"私はメノ教徒だと答えた。"私は大勢のメノ教徒を知っている。彼等は嘘はつかない"、と彼は言った。"私も嘘は言いません。確かな事だけしか言いません"、私は答えた。

高官は続けた。"パラグアイでの激戦で、チヤコにあるメノ教徒のコロニーが敵の空爆をうけて、全滅したということをお前は知っているか？""いいえ、知りません""そうだろう、だからパラグアイへ行く必要はないわけだ。その代りお前には Wologdz 地区のお前の村へ戻った方がよかよう"。

こうして面接は終った。私は監房へ、そして予備刑務所へと戻った。

GPU の提案を拒絶した結果、私には三年の強制労働が課せられた。

数ケ月して、パラグアイの家族から便りを受けた。"GPUの真実の友と称するお方"はメノ教徒コロニーの崩壊についてあからさまな嘘をついていたのであった。

Jakob Martens

〔注察〕ソビエトに残ったメノ移民の大勢の家族達は逮捕されて強制労働収容所へ送られた。

本文の著者は第二次世界大戦後、チヤコに到着した。

(注察察)

社会主義国家では、チヤコ戦争が資本主義者の争いと解釈された。

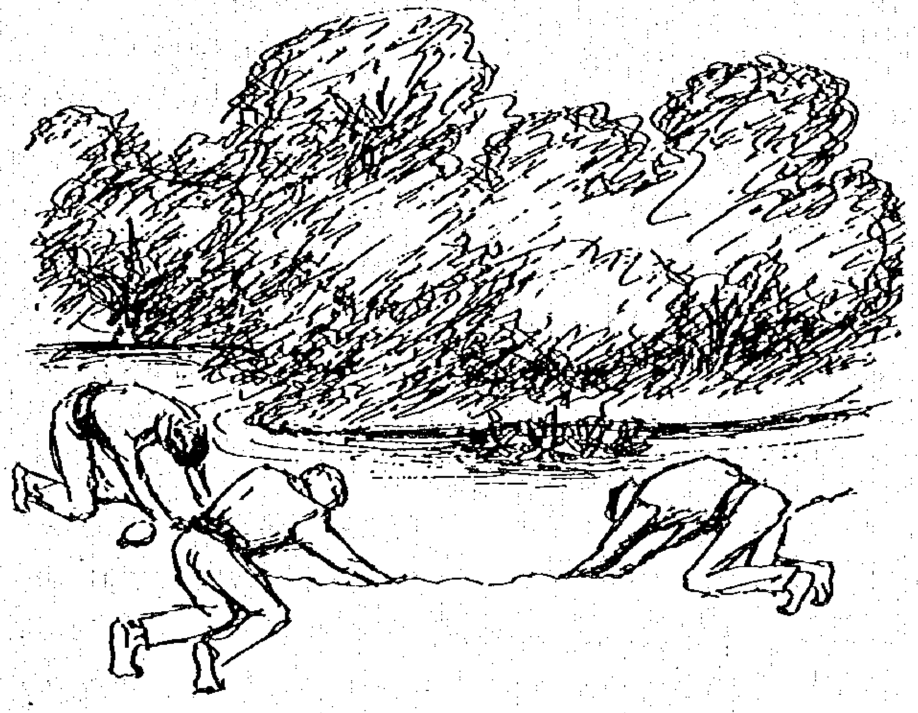
こうした解釈によれば、二大石油会社がチヤコの石油資源をめぐって

パラグアイとボリヴィアの両国を戦争に追いやったのである。

アメリカの歴史家 David H.Zook は 1962 年に出版された彼の著書"The conduct of the Chaco War"の中で、この解釈に反論している。歴史博士の肩書を持つキャプテンズックはベトナム戦争で、司令官として亡くなった。

上記著者の翻訳とプロローグはアメリカ、テキサスのアウスティン大学で30年間教壇に立ったパラグアイ人の作家兼教授 D・Pablo Max Ynsfrán (1894 − 1972)の手によるものである。

チャコ戦争中の出来事



チャコ戦争中の出来事

黒パンとの交換

それが起きたのは1932年かあるいは1933年のことだった。

正確には想い出せないが、ボケロンの戦いの後我々のコロニー10にはトレド砦からのボリビア軍の奇襲に備えて、パラグァイ軍の北東方面を強化する任務を受けた守備隊が駐屯していた。

数十年後、私は不意に私の愛する部落を訪問する機会に恵まれ、コロニー18に向かう古い道のあった〝カンポ　アンゴスト〟(狭い平原)の端に沿ってつくられたケブラチョの塹壕と避難所の跡を見つけた。〝グーホ〟砦の戦闘が起きた頃だった。守備隊はロペス少佐、トーレス及びフローレス両大尉により指揮されていた。当時の事や当時の人々を覚えている人も少ないだろう。司令部は村の中心にある我々の学校にあり、兵隊のキャンプはコロニー18に至る山端に沿って建てられていた。多くの仲間達が校庭につくられた防空壕のことを覚えているはずである。ところで、学校の前の鉄線で囲まれた〝パロ　ブランコ〟(白い木)の狭い立木の上に立っていた哀れな兵隊達のことを覚えていないだろうか? 違反を犯したのか、あるいは命令に服従しなかったのか、いずれにせよ何かの罰を受けて、両肩に重い銃を乗せ、裸足で、何時間も、まるで電線にとまっているツバメのように立っていた兵隊達。

私の話は丁度その頃まで逆昇る。

我々はコロニー7の学校へ通っていた。全部で七人だった。皆さんは全員をご存知でしょう、Gerardo Becker, Aarón Fast, Peter Neufeld, German Harms, Hans Fast, 故Jacobo Fast それに私。14才か15才の少年だった。

学校に着くまでの7キロを我々はいろんなことを取りざたしたり、話したりして通った。その日、私はカバンの中に非常に大切な記録を所持していた。前日、すばらしい取引をしたのだ。即ち、馬を手に入れたのである。もろこしの黒パンと馬を交換した。私の馬になったのである。それを証明するために、ポケットに1枚の書類を持っていた。私に馬を売った兵隊が渡したものだった。哀れな馬は畑のむこうの野原の端で横になっていた。

多数の馬が'カラジャー'の戦いと'ボケロネ'の戦いの後、飼料不足で野原や山の中で死んだ。その馬もそのうちの一頭だった。昨夜、私は充分な水ともろこしの穂と乾草をやった。哀れなやせ馬は茶色の目に感謝の気持を一杯表わしているようだった。馬はもろこしをゆっくりかんだ。しばらくして、私が立去ろうとするともの うげな顔を元気そうにあげた。私の仲間の多くもこの種の馬をもう少しきちんとした方法で手に入れていた。数週間、穀類と草をやって世話してやると、すごく元気になった。後日、それらの馬は'EP'という軍所有の印をつけられていたため、軍が回収することになり、私もその馬を手放すことになった。

しかし、その時、馬は私のものだった。そして私は彼の誇り高い所有者だった。取引きの成功には二倍の誇りを持っていた(パンは母から盗んだ)。
私は商人としての自分の才覚に大いに満足していた。しかし私の仲間は私をひやかした。子供達の間ではよくあるように、彼等は私を称讃しなかった。それは、Jacobo Fast が私より一枚上手だったためである。

Jacobo は同じ日に見事な蚊帳を手に入れ、蚊帳の方が死にかけたやせ馬より数倍も価値があると皆に説明した。そんなもの、私には何の役に立たなかったが。勿論、彼は蚊帳をたった半切れのパンで買ったのだった(多分、彼も母親から盗んだのだろう)。

仲間達はきびしい詰問を行った後挑発的な言葉を浴びせかけ、あわや喧嘩になるところであったが、私の商人としての能力を悟らされ、私は自分自身に不満を感じながら、黙って学校への道を歩いた:ちくしょう!なんで俺も又蚊帳を買わなかったんだろう?'

運命がこの取引の劇的な悲しい結末を書かなかったとすれば、多分このことは、すべてここで終り、永遠にそのままになっていたであろう。

その朝から数日が経ったある土曜日のことだった。学校は休みだった。兄のピータと私は山にたき木を集めに行った。帰路、'Cama del Agua'と言われる小さな野原にさしかかると、銃剣を持った二人の歩哨が我々の行手をふさいだ。いつも我々に友好的で丁重な若者が、その日は非常にいかめしい、陰気な様子をしていた。我々には'止れ'と一言いっただけだった。

言われた通り止って待つより仕方がなかった。たき木を積んだ二頭立ての牛車

を狭い道で向きを変えるのは無理だった。
少し離れた野原から力強い号令が聞こえてきた。歩哨は一歩も動かなかった。
我々は何が起きているのか非常に気になった。我々は牛車から降りた。歩哨が何もしないので、好奇心にかられて、その野原の方へサボテンの刺の中を進んだ。
そこには非常に勇ましい光景があった。200名ほどの歩兵隊が開いた長方形に並んでいた。長方形の真中には、たくましいトレス大尉と数人の将校がいた。ほえるように鳴り響くキャプテンの大声は野原全体にこだましているように思えた。
我々は一語一語をはっきりと聞いたが、理解することはできなかった。はなたれ小僧の我々にはスペイン語がそれほど判るはずもなかったし、キャプテンはグアラン語で話しているようだった。しかし、いずれにせよ、そこでは何かが起っており、誰かにとってはそれが大変な事であることがわかった。
事実、思った通りだった。
長い説教がより激しい号令で終ると、5人の軍曹が前に進み出て、キャプテンの前に整列した。
別の命令で、列から1人の新兵が早足でキャプテンの前に立ち不動の姿勢をとった。引続いて次に起ったことは、精神的に訓練されていない私にとっては残酷で、すさまじい情景だった。私は見えている事が理解できず、事情がのみこめたのは大分時間が経ってからであった。
新兵は地面にうつ伏せになっていた。四人の軍曹が彼の両手と両足を押え、一人の軍曹がむち打ちを始めた。私にはわからない声がむち打ちの数を数えていた。
4回、5回とむち打ちを受けて、新兵はうめき始めた。叫びでもなく、ひいひい言う声でもなく、悲鳴でもないその声に私は息が詰まりそうだった。どれほど時間が経ったのか……、ふと私は自分の身体全体が震えているのに気付いた。喉には何か大きな異物が詰まったようで窒息しそうであった。以前にも同じような体罰をみたことがある。恐怖が脳裏に拡がってきた。次に気付いたとき、私は走っていた。たき木を積んだ牛車に向かって、裸足のままサボテンの間を走った。がっしりした車輪の幅を見て、私は身体の中にうっ積していた感情が爆発して、哀れな新兵のうめきに似た嗚咽をあげた。
その時、歩哨兵が何を考えたかは知らない。彼等は何も言わなかった。

まもなく、ピータも戻ってきた。彼も無言のままだった。歩哨はその場を立去った。すべてが静寂のままだった。ピータは牛車を動かした。小さな野原を横切るとき、200メートル程先を行進している兵隊が見えた。

曲り角にさしかかった時両脇を仲間の兵士に支えられて例の受刑兵も行進してゆくのが見えた。

〝むち打は100回だった〝とだけピータは言った。

横道を出て、主要通りを兵隊の後からついていった。

コロニーの端の最後の区画に私の家があった。兵隊はさらに向こうのキャンプへ行進していった。例の新兵も仲間と一緒であった。

次の日、つまり日曜日、ピータが昼食に客をつれてきた。

司令部の伝令としてロペス司令官に仕えるWalter Kleinert伍長であった。

ドイツ人の血を受けてドイツ語がわかるおかげで、伍長は私の両親の特別待遇を受けたのである。

彼は常に歓迎され、可愛がられた客であった。

昼食中、彼は話した。

〝昨日一人蚊帳を売払った兵を捕まえました。蚊帳は装備の一部で、軍の所有物なので売却することは禁じられています。100回のむち打の体罰でした。体罰はこうした事態を避けるためばかりではありません。規律が維持されなければ、兵隊はどうなるか分りませんからね。これは子供の遊びではありません。戦争なのです。もし規律が守られなければ、戦争には勝てませんよ。〟

Kornelius Neufeld

アルセの池

1932年10月20日の夜であった。

当時はまだボリヴィア軍の砦だったサアベドラに食糧品を積んだ一台のトラックが入ってきた。トラックと一緒に衛生隊々長と数人の医学生が到着した。夕食会が開かれた。外は真暗な闇が支配していた。将校達の夕食が終り、戦略情況についての確認があった後、彼等はトラックの方へ戻っていった。実行しなければならない命令が残

っていたからである。

ビルバオ　リオハ博士、サアベドラにおけるボリヴィア軍々医はその時間、病院の前に座っていた。すると、赤十字の表示のあるトラックが駐車してある場所で、騒動が持ちあがった。何かを探し、走り廻り、叫び、命令が出されていた。トラックのライトがつけられた。

ビルバオ軍医がその場所に来たときには、砦全体にすでに警報が鳴っていた。闇にまぎれて、兵隊達が飲み物や煙草の箱を盗み出したのだ。しかし、そんなことは大して問題ではなかった。バルビオ軍医によると後で判ったことだが、秘かに輸送されていた何本かの容器入りの小箱もまた消失していたのである。

砦は大混乱に陥っていた。

将校達は指令を与え、兵士は走り廻って、兵舎を探した。が見つかったのはウイスキーで酔った兵隊とポケットに高価な煙草をしのばせた兵隊だけだった。

そのとき、ビルバオ軍医はトラックから少し離れたところの太い酔っぱらいの木（ Palo Borracho ）の後に不思議な包みを見つけた。

軍医は包みを持って、ランプの光で中味を確認するため病院の診察室の方に急いだ。

箱を開くと、二本のフラスコが入っていた。フラスコには髑髏のレッテルが貼ってあった。軍医はレッテルの文字を読んでぞっとした。

彼の手には何千という人間の死が握られていたからである。

フラスコには研究所で培養されたコレラ菌が入っていた。

軍医は事態をすぐに察知した。ボリヴィア軍の戦線は事実上崩壊状態だった。ボケロン（ Boqueron ）、ジュクラ（ Jucra ）、カスティージョ（ Castillo ）及びラミレス（ Ramires ）は過去数週の間にパラグァイ軍の手中に落ちていた。

アルセ（ Arce ）砦はパラグァイ軍によってはさみ打ちの状態にあった。ボリビア軍の志気はうだるような暑熱とチャコの森の刺の多い茂みの中で日に日に低下していた。

ビルバオ軍医の判断では、ここで或る事が秘かに実行されるはずであった。それは友軍司令部の絶望行為、細菌殺人作戦であった。コレラは体力を消耗した兵隊の間に急速に広がるだろう。それは戦争の終結となるだろうか？　それがボリビ

アの勝利をはたして意味するのだろうか？

軍医は吐き気を感じた。診療室がぐるぐると廻った。

彼は無意識のうちに行動にとりかかった。細心の注意でフラスコを開け、空き缶に一見マーマレードに似た中味を空け、アルコールでフラスコを消毒して、戸棚から普通のマーマレードを取出して、フラスコに詰め、栓をして箱に入れ、箱を閉じて、見つけた場所へと急いだ。

サアベドラ砦は静かになった。ビルバオ軍医は将校宿舎に帰り、折りたたみベッドに横になった。となりでは、外科医長のデルガディジョ軍医がすでに夢の中にあった。

誰かがデルガディジョを揺り動かしている気配を感じたのは深夜をすでにまわっていたにちがいない。

ささやくような声からビルバオ軍医はその声が司令部の将校であることを確認した。'ペニヤランダ大佐の命令です……最高機密……全員が砦を撤退したとき……アクレの池に中味を注ぐ……'

彼等は静かに出ていった。戸外でオートバイの走り出す音がした。衛生隊のトラックは砦に放棄されていた。

ビルバオ　リオハ軍医のこの物語は1972年4月、' Juventud '紙に掲載された。サアベドラの１０月２０日夜の出来事は４０年の沈黙を破ってここに明らかにされたのであった。

一方、パラグァイ軍については次の事実が知られているにすぎない。

１０月２１日、パラグァイ軍アルセ砦を占領。一番手の工兵が敵の塹壕に接近したとき、黒煙が砦で湧きあがった。

パラグァイ軍の先衛隊が砦の両側から侵入したが、すでに敵は戦闘を放棄していた。

燃え上る建物には目もくれず、パラグァイ兵達は一目散に池へと向かう。

チャコ戦争では水をめぐって戦闘が行なわれた。アクレの水は有名で、羨望の的だった。

兵士達は渇きで半分死にかかっていた。

騎兵も馬の手綱を放して池へと殺到した。'コマンド命令／　一滴の池の水も飲まない事／　水は毒物で汚染されている／'疲労しきった兵士達は燃えるわら

ぶき屋根の間で坐りこんでしまう。
しかし、喉の渇きは命令よりも強い。次から次へと山を抜けて兵隊が池へとやってくる。口を水面につけて、毒の入った水を飲む、飲む。しかし誰も死なず、病気も伝染しなかった。
　ボリヴィア軍司令部の厳密指令がどれほど強くとも、またパラグァイ軍の隠密行動がどれほど強くても、それはボリヴィア軍々医ビルバオ　リオハの功績だった。
彼はパラグァイ軍だけではなく自軍をもコレラから救った。
こうして、世界史に残る最初の細菌戦争の危険は回避されたのであった。
　〝メンノブラット〟

訳：Peter P. Klassen

バクテリア戦争の失敗

　ボリビア軍の衛生隊将校Aberalde Ibañez Benavente（注※）の"チャコ戦争の血と渇き（SED Y SANGRE EN EL CHACO）"の一章を紹介する。
これは前話を補足する物語として興味深い。なお、アベラルド　イバネエス　ベナベンテはボケロンの戦闘中は最前線にいた。
以下は上記著書の抜粋である（第12章、169ページ）

　ユクラとアルセで敗北した軍隊が無秩序パニック状態で撤退しているという物騒な情報がムニョスにもたらされた。
軍隊には意気消沈と敗北感がみなぎり、上官命令は無視され、大混乱の中に撤退が始まっていた。
友人、陸軍中佐David Toroの手紙によれば、〝不名誉と恥辱〟の日々であった。
　こうした悲劇的な状態におびえるムニョスに戻るに当り、これまでの不運続きが細心の注意を払って計画したプランをまたも失敗に終らせるのではないかという不安など考えず、戦いを有利に展開するために決定的作戦を実行しようと決心した。
　早速、私は最終作戦を提案すべく第一軍団の参謀本部の隊長連を召集した。
この作戦は万一の必要に備えて考慮に考慮を重ね真剣に準備されたものであった。

我軍はビジャモンテを通過する際、全員がコレラとチフスのワクチン注射を受けており、アジアコレラに対する免疫を持っていた。私の手には細菌研究所の所長であるDr. Luis Prado Barrientos によって数日前準備されたコレラ培養菌（らせん菌）のフラスコがある。
私は隊長達との会議において敵の進撃を阻止するため、非常手段として細菌戦争に訴える可能性を説明した。砦を退却する前に井戸の水を汚染しておけば、戦争はすぐに終結するだろう。
コレラは敵軍を倒し、且つ高温気候によって菌は後々までも繁殖するだろう。
計画は万場一致で採決された。
私は外科医である二名の軍医に撤退しようとしている砦の水を汚染することを一任した。彼等はただちに出発した。
しかし、軍医が帰還したあとも何の結果も報告されず、一同は失望した。
軍医が命令の実行に乗り気でなかったという多くの報告があり、二人の外科医は私が下した命令を恥かしめたという理由で除籍された。
（彼等は命令を実行したと断言した。）
私は後になって、保存上の不注意で菌が死んだのだろうと考えた。
しかし今日に至るまでこんなに最高の手段を考え出したことを決して後悔したことはない。結果さえよければ、きっと窮地にあった祖国を救ってくれたことだろう。
〔注※〕：Abelardo Ibañez Benavente：'Sed y Sangre en el Chaco'
―ラ・パス　1967

レングア族、戦争の犠牲者〔注☆☆〕
当時、私は7才の少女でした。
大人達は明けても暮れてもチャコ戦争を話し、私達子供もまたチャコ戦争を話題にしていました。そればかりではありません。
小鳥の歌と蛙や、こおろぎやせみのシンフォニーが聞える野性の孤独はすぐに輸送トラックのエンジン音や自由自在の高度で、不可能なトンボ返りを見せてすさま

じい音で大気を震わす巨大な鳥、"飛行機"のモータの音に侵害されました。

私達はよく通りの門戸に集まって、兵士の行進や兵士を満載した車を見送りました。トラックに乗った兵隊の中には前線へ勇躍出かける者、疲労し、負傷し、あるいは病人となって帰る者と様々でした。

やがて軍のキャンプが村の両端に設営されると、私達を取囲む戦争の雰囲気がなお一層感じられるようになりました。

しかし、私と同じ位の年令の子供の心にもっと強烈に焼付けられた出来事や印象もありました。あるときは近くまたあるときは遠い戦線から聞える砲声よりももっと強烈な忘れることのできない出来事です。レングア族狩りは私達に最も強い印象を残した出来事です。何人かのレングア族の酋長が犯した裏切り行為によって、司令部はレングア族の追放と見つけたら殺してもよいという命令を下しました。私達のつつましい家の中や裏に逃げ場を見つけていた哀れな、悲惨な、浅黒い肌の、青白い顔をして震えている彼等を今も当時のままのように想い出すことができます。私達は喜んで彼等を保護しました。彼等は私達の労働力であり、友達であり、私達と同じ神の創造物でした。敵が酋長の無知と野心を利用したとしても、女や若者や子供達に何の罪があるというのでしょう?

モリノ酋長と彼の妻は私達が常時たのめる働き手でした。

彼等は母を"私の姉さん"と呼んでいました。

ある時、母が彼等のまもなく生れてくる子供を引取ることを申し出ました。母は生れてくる子供が消去されるだろうと思ったのです。モリーノ夫婦にはすでに子供が一人いました。私達は兄弟姉妹合せて10人で、下の子はまだ数カ月でしたが、母は生まれる子供を殺すことは避けたいと考えました。けれどインディオは昔からの風習で、子供を提供することを知りませんでした。

後日母に語ったところによれば、白人に自分の子を渡したという神への冒涜は許されないことであり、子供は生れるとすぐ熱い砂で窒息死させられたということです。(注※)。

モリーノと奥さんはその日私達の隣人のピーナツ畑で収穫の仕事を手伝っていました。父、姉妹そして私も我家の畑でピーナツの収穫をしていました。両家の畑の中間に村の井戸があり、兵隊達が水汲みに集まっていました。

そこへ、下士官と兵士が水を求めてやって来るのが見えました。
すぐに母は台所の窓から、軍曹と兵隊が銃をかまえて、狩猟者のように身をかがめ鉄線のさくに沿って、インディオを狩る瞬間をねらってやってくるのを見たのです。

私達の隣人Kaethler さんはモリーノと奥さんが数分以内に死ぬ危険にあることに気付きませんでした。

危険を報せる母の声が聞えました。姉のGretel はすばやく反応し、インディオが居る方向に走り、大声で叫びました。危険の報せはすぐ伝わりました。彼等は幽霊の影のようにとうもろこし畑に姿を消しました。こうして殺人者の期待は報われませんでした。軍曹は激怒しました。
私達は彼をだまし、妨害し、人間狩りをふいにしてしまったのです。彼は地団駄をふみ、どなりちらしました。

当時11才だった姉のGretel は責任感の強い少女で、Kaethler さんの長男と父をキャンプへ連れて行きました。

パパとKaethler さんの息子はどうなるのだろう？
権力者の見方からすれば、私達の行動は大きな裏切り行為と見なされ、死刑になるかもしれません。パパと再び会えるだろうか、村中が心配で戦いていました。

しかし、神様のお蔭様で、夜になると彼等は無事帰ってきました。
村の人々は全員二人の話をきこうと彼等を取巻きました。司令官と父や村民の友人である指揮官、また上級将校達もキャンプを留守にしていました。

怒っている軍曹は二人を粗野に扱いました。
言葉の問題でよく理解が得られず、彼等は指揮官が帰ってくるまで箱の上で立たされました。

司令官は帰ってくると、まず軍曹の報告を聞き、次に父に説明を頼みました。
父は不完全なスペイン語で事件を説明しました。
司令官の措置は二人にとっては驚きでもあり、また人情あふれるものでした。

二人には少しも判らない説教をして下士官を叱り、重ねて'捕虜'に謝罪し、家まで送ってくれました。

可哀想なインディオの生命を救い、そして親切な指令官のおかげで私達の愛

する家族が無事に帰ってきたことを私達は神に感謝しました。

Frieda Kaethler

〔注※※〕 部族の仲間が犯した裏切り行為によって，チャコに駐屯する軍の最高権力は戦闘地区における部族の迫害を一時的に命じた。

〔注※〕 レングア族の家族計画では夫婦は一人以上の子供を持ってはいけないことになっていた。

生まれた子は口に熱い砂を詰めて窒息死させられた。

モリーノ酋長

モリーノ酋長が女房を連れて私達の家の庭に来たのはチャコの冬の寒い朝のことでした。いつものように仕事をしたいというのでもなく、パンやいんげんを欲しい様子でもありませんでした。

実は彼は大量のじゃがいもを買いに来たのです。5ペソ分のじゃがいもを買いたいというのです。インディオにとって5ペソは大金でした。また我々にとっても大金でした。それには訳があったのです。インディオ達は山奥に逃げていこうとしていたのです。

大きなガソリン缶に山盛り一杯のじゃがいもを渡しました。それが5ペソに相当しました。

モリーノはぼろのひだの間に入れたお札をさぐっていました。するといつの間にか三人の騎兵が庭に現れ、我々に銃口を向けました。

逃げ場はどこにもありませんでした。二人のインディオは外へ連れ出されました。村の通りを抜け道が曲がり、山に入る所まで早足で二人は追い立てられて行きました。

モリーノは逃亡を企てました。兵隊達はそれを予期してかのように、一発そしてもう一発、モリーノめがけて発砲しました。銃声はまるで大砲のように山にこだましました。二度目の銃声のこだまが消えるとき、モリーノは最後にうめき声を残して死にました。

モリーノの女房が有刺鉄線の間をくぐり抜けたとしても、それは無益なことでした。

兵隊達は馬から飛び降り、インディオの女の頭に銃口を向けました。
叫んでも無駄でした。誰も彼女を取戻すことはできません。私にもできることではありませんでした。

彼女は捕われてキャンプに連れてゆかれました。後手にしばられ、首をゆわえられ、馬の足並と同じように走らされてゆきました。三日後に彼女は釈放されました（あるいは逃亡。真実は誰も知らない）。

一族は集団でコロニー9のうしろの森の奥に長期間ひそんでいました。

後になって軍隊の行動の理由が判りました。戦線でボリビア軍のスパイとして従事した疑いで“モリーノ酋長”というインディオを警察が追跡していたのでした。

それは全くの別人でした。
我々のモリーノ酋長は一度も村を離れたことはありませんでした。それは全くの事実でした。しかし、残念ながらモリーノは死にました。
彼の死は我々にとって戦時中の劇的な出来事でした。

Heinrich Janz

遠い平和

すでに戦争は二年目を迎えていたが、戦況の酷しさは相変らずで、なんらかの終止符が打たれるという見通しもなかった。

祖国のどれほどの息子達が、優れた子供達が戦争の犠牲になってしまったのだろう？

ボリヴィア大統領の子息、Alberto Salamanca 下士官までもナナワ（Nanawa）戦闘で戦死した。

パラグァイ大統領Dr. Eusebio Ayalaは10月28日のパラグァイ放送局を通じて放送された演説の中で次のように述べた。

“この機会にパラグァイの経済発展について話しをしたかった。が戦争状態がそれを許さない。

私は平和を愛し、戦争を憎む。私は国際間の問題が武力で解決できるとは思わない”

このところ、メノ派入植地は迷惑からやっと解放された。軍隊はほぼ我々の村から去っていった。

パラグァイ軍の食糧や衣類の支給も前年よりはるかに改善された。

以前は徒歩で移動していたが、今はトラックで輸送されている。

' Mennoblatt ' No 11 – 1933

犯罪者部隊にかこまれて

1933年2月のことだった。

我々四名がプンタリエレスから小麦粉を輸送することになった。

一行がカンポ エスペランサに着くと、一人の兵隊が我々から卵を買いたいと言った。この種の商売、つまり我々の産物と金もしくは兵隊の食糧との交換は、プンタリエスへ旅をする我々にとっては重要な取引きだった。卵の値段が折合わないのを見て、兵隊は警告的口調で言った。' 卵は私に置いていきなさい。悪くない値段ですよ。今日中には軍隊があなた方の持物全部を持ってゆくことになるでしょうからね '

兵隊の言うことなど信じないで、我々は旅をつづけた。ポソ アスールに着いたときは日も暮れていた。

歩哨が道をふさいで言った' 戻りなさい '。

村の住民に小麦粉を運ぶことは重大な使命であり、歩哨の命令を理解しかねていると、彼は一人の将校を呼んだ。

将校はやって来て、同じ命令を繰返した。但し、もっと強い口調で。一体どうしたらいいのか？ 空車で帰るわけにはいかない。

我々一行が思案に暮れ、相談していると、四名の将校がやってきた。

彼等は我々の立場に気付いたのだろう。家族に食糧を運ばなければならないことが判ったのだろう。各荷車に一名づつ乗り、その場を離れるべく牛車を全速力で走らせた。

すると奥の方に怒号し、悪口雑言をはいている大勢の無秩序な部隊が見えた。

その危険地区を脱すると、将校は牛車から降り、三日以内は戻ってこないようにと我々に強く警告した。

駅長のTroxler氏はプンタリエレスへ我々が到着すると驚いた様子で挨拶した。
'神の人よ、どうして命があるのかね？ あの1400名の部隊は全員が犯罪者、ごろつきで刑務所から戦線へ送られる途中なんだ。生きのびたら赦免されるだろうという兵隊達でどうでもよい連中だよ' 驚いた、駅長の話を聞いて我々が何を感じたかわかりますか？'

我々がこれ以上議論することもためらうこともなかった。
おとなしく三日間をプンタリエレスで過ごしてから帰ることにした。ポソ アスールで一人の兵士がごろつき部隊は予想外に遅れて、今しがた出発したばかりで、主要道路を通ってカンポ エスペランサに向かっていると教えてくれた。

我々には数千フィートの平担で、なめらかな主要道路を彼等の跡について行くより仕方がなかった。

一つだけ方法があった。もっと先にわき道がある。兵隊が主要道路を通っている間に、旧道を抜ければ犯罪者の前に出ることができるだろう。
道は悪いがこれしか方法がない。

我々は牛車を速めた、が荷を積んでいるため速度がにぶく、主要道路に戻ったとき、不正規部隊とわずか200mやりすごしたにすぎなかった。

悪漢どもは我々を見ると、血も凍るようなものすごい叫びをあげた。
我々はTroxler氏の話を想い出し、その危険から脱がれられるよう全能の神に祈った。

神が我々の祈りをお聞き下さったのか、8人の将校がレボルバー銃を手にして全速力で近づいて来た。
そして我々を道路わきにとめて、むちを振って1,400人の犯罪者部隊を追い立てた。

叫びとののしりの声が潮のように我々の頭上を通っていった。馬に乗った警備隊が道から離れた囲い場へ不正規部隊を連れてゆくのが見えた。
再び危険は去り、我々は命びろいをした。

一行の年長者が言った。'あの将校達への感謝の気持を忘れまい。彼等の力強い援護を介して、主は我々をお守り下さった'と。

Martin T. Duock

メノ教徒のスパイ

我々Wolf一家は1930年パラグァイに到着したメノ教徒のグループでした。
我々は同志達と入植当初の窮乏と悲惨さを共にわかち合いました。
1932年パラグァイとボリヴィア両国間に戦争が勃発したが、我々の前進は一部が停滞したにとどまりました。
我々は犠牲と忍耐をもって、生きることと未来に向って戦い続けました。
犠牲の一人が私の兄Jacoboでした。

18才になったばかりのジャコブは、当時の若者がしたように、入植地を出てアルトパラグァイ沿岸の港で仕事を探し、現金収入を得て家計を助けようと決心しました。カサード港である技師が直接ボリヴィアに行って仕事を探すことを推めました。
技師が言うには、ボリヴィアの方が賃金がよいということでした。ジャコブは彼の言に従い、ボリヴィアへ行きました。その後の彼の消息は長いこと不明でした。やっと彼の手紙が届き、彼の身の上についてはそれほど心配しなくなりました。戦争は再び激しさを増し、コロニーにはマラリアが流行し、すでに多くの犠牲者を出していました。
父はできるだけ早く戻るようにジャコブへ手紙を書きました。

緊急事態を知り、彼はパラグァイへ戻ろうとしました。
けど当時両国間をつつんでいた政治情勢を考えると戻ることは容易なことではなかったと誰しも想像できるでしょう。
そうした中で、彼はやっとカサード港にたどり着くことができたのですが、そこで軍当局によってボリヴィアのスパイ容疑で直ちに逮捕されました。時は1933年、まさにチャコ戦争が最も激しい戦局をむかえた年だったことは忘れてはいけません。罪を自状させるために、ジャコブはあらゆる拷問にかけられましたが、無実で何も知らない彼からはなんら情報を引き出すことができぬまま、アスンシオンに送検され、そこで投獄されました。

当時、メノ派のコロニーは首都に代理人を持っておらず、兄は文字通り孤立状態に置かれました。
こうした状態にもかかわらず、彼はある刑務所の看守を通じて国務大臣宛に手紙

を送ることができました。
九日後、きびしい警護の中をジャコブは刑務所から国務省に送られ、そこで特別裁判が開かれました。
それは非常にまれなケースであり。メノ教徒入植者の息子でスパイ容疑で起訴された若者を近くで見るのはそれだけの値打ちがありました。
幸いに彼は身分を証明するFernheim コロニー管理者が発行した通行許可証の原本を所有していました。
それだけで充分でした。国防大臣は直ちにジャコブの釈放を命じ、さらにチャコの軍領地に入りコロニーへ戻るための通行証を交付してくれました。
病気と栄養失調の状態でジャコブは戻ってきました。
しかし我々には彼の気持をほぐし、保護してやれるものはありませんでした。
家族のほぼ全員がマラリヤ熱に苦しんでいました。こうして彼は再び重労働と家族の扶養を引き受けることになりました。
プンタリエレスからの食糧輸送に再びジャコブは出かけることになりました。
四日間のプンタリエレスへの劇的な旅へ荷車の列が出発したのは1933年の4月のことでした。
小雨模様の秋の天気と早目の冬の酷しい寒さが感じられる日でした。
日が立つにつれ、ジャコブの健康状態を知っている両親は彼の安否を心配するようになりました。悪い予感が現実となりました。ジャコブが重病で旅を続けられる状態ではないというのです。追いかけるように仲間の一人はカサニジョで死亡し、砦の軍の墓地に埋葬されたという情報がもたらされました。最も早い荷車で我々は彼に会いに出かけました。コロニーの近くの最後の宿場で戻って来た村の荷車の列に出合いました。
ジャコブはまるで死人のように衰弱し、やつれきった様子で車の中に横たわっていました。戦慄さえ感じよるうなその光景に、我々は何も言えず、胸を詰まらせるだけでした。
震える声でやっと父が言いました"息子よ まだお祈りができるかい?"
輝くような力をふりしぼって、ジャコブは冷たい冬の空気を吸いこみました。
彼の肺は数秒間だけやせこけた胸を持ちあげ、我々の耳には彼のかすかな息の音

が感じられました。そして息はほとんど聞こえないような答えとなりました。
〝ええ、父さん〟。それが最後の彼の言葉でした。
無言で我々は旅を続けました。家に着くまで誰も口を開くものはいませんでした。夜の9時に息をひきとりました。享年19才でした。

Bernard Wolf

カサニージョの十字架

十字架は箱板でできていた。そして〝メノ教徒〟とだけ書いてあった。
墓は巨大な瓶樹木より6歩離れたところに、パラグァイ兵士の名前が記された似たような9本の十字架と共にあった。

プンタリエレスへ到着する一歩手前の宿場としてメノ派の馬引き達が知っているカサニジョは偉大なチャコ戦争の最初と最後の戦闘のあった場所でもある。
しかし、ここでの敵はボリヴィア兵ではなく〝マラリア〟将軍だった。長い兵舎には牛の皮で編んだ簡易ベッドにやつれきった数百のパラグァイ兵士が横になって最後のマラリアの攻撃と心臓の最後の鼓動を平然とした様子で待っていた。

幾度となく私はカサニジョを思った。幾度となく〝瓶樹木〟の湿地帯を通るつらい道を克服しなければならなかった。
そして軍需物資の箱材で作られたあの十字架のことをいつも考えた。墓の主はGerhard Hildebrant と言った。享年20才、私の友人だった。

彼はロシアのシベリアで1913年8月19日生れた。1929年、彼と両親はロシアからの脱出を試みた。我々が知り合ったのはドイツの難民キャンプだった。
そして我々はドイツからパラグァイまで同じ船でやってきた。ここチャコでも我々は隣り同志だった。
Gerhardは良い若者だった。彼は一人息子で、そのため父を助けなければならなかった。家を建て、鉄線を張り、畑を耕やし、井戸を掘り、家畜を世話し、プンタリエレスからの食糧輸送の当番の時は馬子までやった。コロニーから鉄道のあるプンタリエレスまでは100キロの道のりがあり、そこまでの旅は2週間、時にはそれ以上かかることもあり一寸した冒険でもあった。荷車の一行が1933年の4月村を出発した頃、マラリアは村で次々と生命を奪っていた。それはしとしと

雨が降り続く季節で、' 瘤瘡木 'の湿地帯は出水して通れるものではなかった。

我々コロニー1の一行はコロニー2より数日後に出発した。
カサニジョに着くと、Gerthard Hildebrant が軍の病院に入院したことを知らされた。
旅を続けられないほど容態が悪化したためである。

私は一行から離れて、隔離所に居る私の友人に会いに行った。
彼を見たとき私は息が詰まりそうな気持に襲われた。硬いすれた寝台に毛布もシーツも無く、あの元気で力に満ちた20才の若者が人間の骸骨のように横たわりただそこには彼の影だけが残っていた。

' どうだい、ヘラルド? 'やっと私が彼に言った言葉だった。
沈痛な面持で看護夫が私の腕を取って、外へ連れ出した。' マラリア 'と言葉少なに言い、頭を悲しそうに振った。

私は一行に追いつき、旅を続けた。
私はヘラルドに帰りには一緒に連れてゆくと約束した。旅の間中、彼のまわりの悲惨な墓場のような情景をはらいのけることはできなかった。はたして私の隣人はもとの勇敢な開拓者となり得ようか? 彼の両親へ何も報告することは出来なかった。
我々にはやせた牛と自分達の足以外、輸送方法もなく馬も持っていなかった。
また、湿地帯を通り、残り80kmのフィラデルフィアからカサニジョ間を重病人を運ぶことは不可能だった。
我々の病院も当時は大した設備を備えてはいなかった。
ただ、充分な看病をしてやれば彼を救えるかもしれないというかすかな可能性と、家族や友人がそばに居れば、病気に打勝つ新たな力が湧きあがってくるかもしれないという望みがあるだけだった。

翌日、我々は荷物を積んでカサニジョへ戻ってきた。軍当局は砦近くに荷車を停めることを禁じた。
私は自分の荷車を一行に残して、歩いてヘラルドに会いに行った。
プンタリエレスで手に入れた3個のオレンジを持っていた。
友人に会うには許可が必要だった。病院は伝染病棟に近づくことを強く禁じてい

たからである。
ヘラルドは死に瀕していた。すでに口もきけなかった。私はベッドの上にオレンジを置いた。
〝食べるか?〟と私は彼に聞いた。彼はうなずいた。
私には鎌の男と神に対面する用意ができたかと彼にたずねる勇気はなかった。
馬鹿なことに私は彼にたずねた、〝充分か〟と。彼は少し手を動かし、はっきりと答えた、〝うん〟。
昨日と同じように喉が詰まり、私はそれ以上何も言うことができなかった。
看護夫が病棟の外まで私について来た。
私は一行に追いつくため力の限り走った。
村に着いて私が一番先にすることは、彼の両親に会って事実を話すことだった。
両親は自分の家の庭で、家を建てるためにレンガを焼いていた。
私にはすべてが無益に思えた。そんな仕事が一体何の役に立つのだろう?
村で一人だけらばの荷車を持っているKornelius Kliewerがカサニジョへ父親と同行することを申し出た。
彼等が砦へ着いたとき、息子の墓がそこにはあった。
〝メノ教徒〟と書かれた箱板の十字架をつけた墓は菩提樹の下にある。
彼は1933年4月28日に死んだ。
その後、プンタリエレスへの旅の途中、私はカサニジョで荷車を降り、Gerhardの墓を訪ずれた。新しいつき山が増えて、それらと並んだ彼の十字架を見つけた。
汚れたシャツの袖で目をふいた。
ハンカチは持っていなかった。

Jacob Pahn

今日まで私は〝EL BOLI〟と呼ばれている。
パラグァイ軍の騎兵隊はかなり深刻な問題と対決しなければならなかった。
軍ばかりでなく軍馬も乾草と水不足に耐えなければならなかった。そのうち我々の村の野原にはやせ馬と死にかけた馬が見られるようになった。
メノ教徒達は何ペソかの金銭と数個の西瓜でやせ馬の一匹を手に入れることがで

きた。沢山の動物が野原や山で、飢えと渇きで死んでいった。

ある日、友人のエンリケが一匹のやせて死にかけた馬をつれてやって来て私に話してくれた。コロニー９のくぼ地にもう一頭のくたばりかけた馬がおり、しっぽを持ちあげていたから、多分立つことはできるだろう。少しばかり世話をして、少しばかりのとうもろこしと水とやれば村まで連れて帰れるかもしれない、と。

それ以上の説明は不要だった。私はその馬を手に入れ、助けるためには、根気も遠出も、乾草も夜番も惜しまないとすでに心に決めていた。

私の想像力は乗馬としても引き馬としても使える気性の激しい光沢のある若馬を描いていた。

朝食後、急いで"私の馬"を探しに出かける準備をした。母の衣服のひもがあったので、丸めてポケットにしまった。野良着を着こみ、何色か見分けのつかなくなったズボンをはいた。きっと、何かの制服だったのだろう。それからよく知らないが、最近トレボルでスイカ１個と交換したらしいイエスキリスト時代に使われたような十字組の皮サンダルをはき、わら帽子をかぶった。

アマゾンへ探険へ出かけるとまでにはいかないが、とにかく身仕度をして、私の"美しい若馬"との対面に出かけた。

私は急いだ。その場所までは相当距離があるし、日中の暑さはきつい。

コロニー９の通りが始まる場所には分れ道があって、３０名ほどの兵隊が駐屯していた。100メートルほど手前で一発の弾を見つけた。私位の年令の子供がよくするように大事に弾をしまった。

我々は誰でも狩りに出かけるため、ときどき銃を手にする機会があったからである。

分れ道の所で私はちょっと立ちどまった。方向が判らなかったからである。私の馬が待っているくぼちへ行くにはどっちの方角へいけばよいのか？

右方角の道をいこうと決めた瞬間、歩哨が私に叫んで合図をした。歩哨は怒鳴っているが私は彼の言葉がわからないし、気にもしない。私は歩き続けた。歩哨が怒鳴る。私はとまらない。何の心配もないので振り向きもしない、だけど、何だろうと考えようとしたら兵隊が私の目の前に現われた。どこから現われたのか分らない。

私を取囲み、キャンプへ連れていった。
軍曹は気狂いのように喚鳴った。あんまり喚鳴るので私には本当に気狂いに思えた。
兵隊達は武装した姿に変っていた。そう、その通り、狩りに行くため、ときどき我々に貸してくれる見事なあの銃で武装しているのである。それらの銃は、あたかも私が重大な逮捕者でもあるかのように私の方に向けられている。中尉が現われてまた喚鳴った。だけど、彼の喚鳴り方は私を不安にした。
少しづつ、それが冗談や遊びでないことが私にも判ってきた。それは、中尉が〝ボリヴィア人〟と叫んだからである。
　これは大変だ、エライことになった。私を誤解している。だけど、恐ろしい。
　私は自分を判らせようと努力した。
〝私、ボリビア人なし。私、メノ教徒。私、馬探しにゆくところ〟けど、私の雄弁は役に立たなかった。
　いくつかの言葉が聞きとれた。ボリヴィアのズボン、ボリヴィアマークの鞍、ボリビアのサンダル〝アルティプラーノ〟、ボリヴィア人、ボリヴィア人、スパイ、スパイ、スパイ。〝ボリヴィアの蚤〟という言葉まで聞いたようだった。
私の黒い、真黒なパラグァイ人やボリヴィア人のような髪までも彼等の不信をかった。陽に焼けた茶色の皮膚も彼等は調べた。それから私にガソリン缶に座るように命じ、一人の兵隊が長いトルコ刀を引抜いて私の毛深い皮膚を ― 無雑作に ― 掻きはじめた。ボリヴィアの蚤でも探していたのだろうか？ 兵士の銃剣の使い方が次第に荒っぽくなってきたので、その情況から生きて戻れないのでは、と一瞬思った。
ひとしきり、しごきが過ぎると、私は再び自分がその土地の住民で、メノ教徒だということを一所懸命説明した。
しかし、誰も私の言葉に注意を払う者はいなかった。
中尉が大声で命令を下した。兵隊は私を後手に母の衣服のひもでしばり、四人の兵士が銃を構えて私を囲み、どこへ行くのか知らないが歩き出した。
　コロニー９の入口に着くと、父の友人の Isaak Klassen さんがやってきた。衛兵達が私を追い立てるように歩かせてはいたが、私は立停って、私をどこに連

れてゆくのか聞いてくれるようKlassenさんにたのんだ。

兵士達がトレボル砦へ私を護送することを知って、私は少しばかり安心した。

太陽は無慈悲に照りつけた。我々の道はまだ長い。我々村人全員が使っている水汲み場を通った。

遠くから、私の友人であり仲間でもあるGerald Flemmingを見つけた。彼はバケツを持っていた。

Gerald は私より言葉ができる。私の両足のマメは破れていたし、両手はしばられて自由がきかない。若者達はボリビアのスパイを捕える使命をあまりにも本気に実行しすぎた。Geraldは遠くから、私と知り合いの兵隊達に挨拶した。私は両手を少しゆるめてくれるよう衛兵に言ってくれと彼にたのんだ。

若者達は承知して、私の願いを聞き入れてくれた、が逃げようとすれば射殺するとヘラルドに警告した。

我々は行進を続けた。少しは楽になった。だが、暑さはまだ続いていた。

兵隊達はびっしょり汗をかいている。そしてときどきつまづいている。私はそれを知って、少し満足した。

彼等に同情してるようだ、もとの哀れな兵士に変身してしまった彼等に。コロニー12と1を過ぎると、本当の陸軍通りに出た。兵隊の姿がかなり多い。

砦の中央で、私の護護兵は監視兵に私を引渡し、別れを告げた。

若者達は私にも別れを告げた。どうなっているのだろう？ 私は良心に従って、彼等を振りかえらなかった。私は小さな部屋に座っていた。小さな隙間から砦の動きが見える。トラックが出たり、入ったりしている。食事も充分とっていないような、あごひげをはやした一団を乗せたトラックが着いた。あごひげの一行が降ろされた。彼等が丁重に扱われているようには思えない。

ここではあごひげは好まれていないようだ。全く好まれていないようだ。しかし私には考えなければならない別の問題があった。

問題の一つは、どうしてここを出て、どうして家へ帰るかということだった。

私の歩哨は話し好きだ。平和的且つ友好的共存以外に良い方法はない。どうやら、彼は私がメノ教徒だと判ってくれた最初で唯一の兵隊のようだ。

それは、私にドイツ語で熱心に語りかけてくれることから推察される。

しかし、話題が私の置かれた立場には応じてない。
大して慰めにもならない'メノ教徒は Schoene Fraeulein を持っている'(メノ教徒は美しい娘を持っている)や、'私は liebe Schoene Fraeulein '(私は美しい娘を愛する)という言葉で少し元気をとりもどす。多分、私はかたくなな性格なんだ。けど、ここを出て、家へ帰りたい。

歩哨のロマンチックな文句に向けられていた私の注意は部厚いファイルを抱えた金髪の兵隊へと移った。
私は少し彼の方に近寄ってたずねた。

'ドイツ語を話しますか?''ええ、話します'と彼は答えた。

'私を助けてくれませんか'、と私は続けた。'私は伝令兵で、車が待っていますから。すみません'、と言って、彼は出ていった。

突然、メノ教徒であるコロニー1の Falk さんが馬に乗って現れた。
私は大声で彼を呼んだ。彼は窓に近づき、そこで何をしているのかと私にたずねた。

私は彼に事の顛末を語った。私の話を聞いてこの善良な同志は私が驚くほど大笑いした。'馬鹿げたこと、すぐに話をつけよう。私は司令部に牛乳を届けているので、高級将校達はみんな私の友達だよ'

まもなくドイツ語を話す兵隊がやってきて、私を高級将校の前へ連れていった。
彼等は天蓋の影になった装飾テーブルを囲んだ背中つきの椅子に座っていた。

近づいて気がついたことだが、背中つきの椅子は実は上手に切断した木の幹で、テーブルは酔っぱらいの木(Samuhú)の部厚い切れ端、天蓋は森にある野生のかずらだった。
テーブルの上のビンとコップだけがチャコとは無関係な加工品であった。

言葉少なに私は事件を話し、ボリヴィアのズボンと弾の由来を説明し、探しに行く途中だった馬の一件も話した。

私を一番感動させたのは、私が肉体的に虐待されなかったかと彼等がたずねたことだった。

私は通行証をもらい、自由になった。
太陽は西にかたむいていた。夕暮れも真近だ。最後の歩哨を後にしたとき、私は

やっと安心した。そして家までの8キロの道を急いだ。

家に着いたときは夜だった。私はこっそりと家の中にすべりこみベッドへもぐりこんだ。疲れていた、が一日の出来事が想い出されて眠れなかった。

突然、村の通りをやって来る牛車の音が聞えた。車は家の前で停まった。隣人の声がした。' Friesen さん、Friesen さん、息子さんは家に居ますか？ '

' 居ると思いますよ '、と母は答えた。

' 会いたいのですが '

' 何かあったのですか '

' 私が知るかぎりでは、息子さんはトレボルで捕まっていましたよ '、隣人は言った。' ちょっと待って下さい '、と父が言った。' 確かめてみます '。

父は私の部屋へ入ってきて、ベットを手で探り、私の頭に触れると出ていった。

' おかしいですね、息子はベットで眠っていますよ。何か私に話しでもありますか?

' いえ、いえ '、隣人はこう言って、牛車を動かして立去った。

' 間抜けな話だ！ '

Abram Friesen

イスラ ポイの祭日

ポイ地区病院の理事会は入植者からの物資贈与に対する感謝の気持を' Mennoblatt 'に公表することを私に命じた。

本年7月18日、ここイスラポイにおいて、Siemens , Hein , Loewen及びKlassen各氏にご挨拶を申し上げる機会を得た。

彼等は我々の傷病者にトラック二台の素晴しい食料品を送って下さった。

贈与主（部落名）

- Rosenort №10 (Lugar de las Rosas)
- Waldesruh 11 (Sosiego del Monte)
- Schoenbrunn 8 (Bello Manantial)
- Schoenwiese 7 (Prado Hermoso)
- Friedensruh 6 (Paz y Descanso)

－Philadelphia　（Fernheimコロニーの商業・社会管理センター）

贈与明細

10 $\frac{1}{2}$袋　落花生

8　袋　かぼちゃ

16　袋　じゃがいも及びマンジョーカ

9　袋　甘いパン

370　ケ　卵

11　羽　にわとり

3 $\frac{1}{2}$キロ　キャラメル

兵士隊が分配されたお菓子を口一杯にかむのを見て大変嬉しかった。病人もベッドで上体を起し、その見舞品を味わった。それは非常においしかったため、元気を取戻した者は二度目を要求し、大勢の者がおかわりを手に入れた。

Siemens家の二人の可愛い金髪の子供さんがお菓子を分配してくれた。苦しみに耐えるひげづらの兵隊達は明るさを取り戻した。多分、彼等はその時家で待っている息子や兄弟のことを想い出したことだろう。

我々と一緒にいたメノ教徒の方々は彼等の贈物がどんなに歓迎され、感謝の気持で受取られたかを自分の目で確かめられた。

我々の理事長がその機会に述べたように、それは、まさしく'メノ教徒の人々の手によってパラグァイの土地で作られた産物'の激励である。

Dr. Juan M. Boettner

イスラ ポイ砦－1934年7月

(Mennoblatt No 7, 1934)

イスラ ポイ病院で元気になった"病人"

最近、フィラデルフィアで'チャコの運転手'という映画を見ました。映画の気持の悪いシーンは絶望的な悪夢となって夜通し私を追いかけてきました。私が最も強い印象を受けたのは、一口の水を得んがために、兄弟同志が争うその残酷さでした。

一口の水を手に入れようとして、手に弾を受け、渇きで死んでいった哀れな男の

ことを忘れることができません。番人が彼をどんなに無慈悲に虐待したか、地面に押えつけて、卑怯と呼んだシーンが忘れられないのです。それは理解出来ないことでした。

しかし、その映画のシーンが1934年の戦争中のイスラポイでの出来事を私に想い出させることになりました。

この事件のきっかけも同じような恐怖と悲惨によるものでしたが、こちらはもっと親切で、陽気でした。

すでに述べましたように、事件の動機となったのはチャコ戦争の哀れな傷病兵が置かれた悲惨さと困窮だったのです。

Fernheim コロニーのいくつかの部落の入植者と Filadelphia の住民はイスラポイ病院の傷病兵に食糧とお菓子を届けることにしました。

私達の贈物は質量から見ても大したことはなかったけれど、結果は満足できるものでした。

軍は物資運搬用に二台のトラックを持ってきました。父は四名の代表者の一人に選ばれて、病院へ行くことになりました。

父は私と3才の弟の同行を許してくれました。

私は興奮して日曜日に着るストライプ入りのつつましい綿の一張羅を着て、一足しかもってないストッキングをはき、十の字の紐のサンダルをはき、三つ編み髪を整えて、落花生、根菜、パンなどが入った袋の上に乗込みました。

素敵な旅だったこと！

私達は信じられないくらいのスピードで走っていました（多分１５～２０キロ／時間）。道は狭く、カーブが多くて、いなご豆の木の枝や刺のある木が顔を打ち、ほこりと砂が舞いあがりました、が旅は楽しいものでした。

やがて、イスラポイに着いて、病院へ行きました。粗末な壁とむき出しのベッドが目につきました。至るところに、傷病者がいました。

Juan Max Boettner医師は一行を代表して、お見舞品を分配しました。
弟と私もキャラメルとボンボンを渡す光栄に浴しました。

何人かの兵隊が私の金髪をやさしくなでてくれました。その瞬間、遠くにいる息子か兄弟のことをなつかしく想ったにちがいありません。

そのとき私は病院のベランダのベッドに横になった一人の哀れな兵士に気がつきました。彼はお菓子とピーナツを受取ろうと細い手を伸ばしていたのです。

私は彼のたのむような眼に感動して、少しばかり量を多くしてやりました。けど、ああ／、驚いたことに、その哀れな病人は、Boettner 医師が近ずくと、鹿のようにベッドから飛び降りて、脱兎の如く逃げ、シャツの下に宝物を隠してしまったのです。

私は困ってしまって、父に起った事を話しました。Boettner も兵隊の悪戯には気づいていました。

非難も罰もありません。誰も哀れな若者に見舞品を返せとは言いませんでした。

今も私にはBoettner 先生、父、そして仲間達が元気になった"病人"の悪戯を見て愉快そうに笑い合ったあの声が聞こえてくるような気がします。

Frieda Siemens de Kaethler

行方不明

ある春の美しい朝、コロニー7の最初の学校の先生と生徒達は遠足に出かけようとしていた。みんな大はしゃぎだった。

こうした遠足は滅多にないことだ。

学習プランは非常に広範囲にわたっており、着実に実行されなければならなかった。学校に行けるということは子供達やさらに中学校の生徒達にとっては特権だった。親や大人は家族全員を畑仕事の労働力として必要としていたからである。労働は生き抜くための休戦の無い闘いだった。従って、遠足にゆくということは異例のことであり、みんなの喜びも当然だった。出かける場所はコロニーから数キロの地点にあるいなご豆の樹木で囲まれたのどかな平原だ。そこで遊び、歌い各自持参の弁当と水筒で昼食をとることになっている。

みんな陽気で、元気一杯だった。

予定地に到着する手前で、上級生達はキャンプ用に日陰の場所を探し始め、子供達は附近に沢山咲いている花を摘んだり、サボテンの実を取ったりして散っていった。幾人かの生徒達は忘れずに石投げなわを持参し、その近くに沢山いるす

ずめや鳩を追いかけていた。

数人の子供達がチビのコーネリアスの姿が見えないと報らせてきたのはキャンプが最高潮のときだった。コーネリアスは仲間達と一緒に山にサボテンの実を探しに入ったまま、行方が判らなくなった。

大したことはないと思われた。この子供達はここの深い森と野原で育ってきたんだから。しかし、先生達は男子生徒を数名づつのグループに分けて、チビのコーネリアスを探すように指示した。先生が一名、チビはみつからなかった。女生徒とキャンプ地に残って、連絡係をつとめることになった。無駄だった。

先生方は全員を召集して、ほかにも誰か足りなくはないか調べてみた。

'ピクニック'は中断された。

家へ戻ったのかもしれないということで、数人のグループが心配気味に帰っていった。お祭りはお流れになってしまった。

チビは家にも戻ってはいなかった。情況は非常に深刻になった。

コロニー7の全員が大捜査に動員され、近くのコロニーも自発的に捜査に参加した。

夜になっても、居なくなった子供の消息は判らなかった。

野原という野原には見張りが置かれ、かがり火がたかれた。

子供の助けを求める叫びが聞えるかもしれない。あるいは多分、子供はかがり火の輝きを見てくれるだろう。

村の子供達は休む前に、小さな仲間の無事を神に祈った。

コーネリアスの母親は一晩中祈っていた。

翌朝、大捜査が再開された。三つの村の住民が動員された。朝の八時に、二人の騎兵が村の通りに入ったとき、コロニー7には人気がなかった。

先頭の中尉の鞍にチビのコーネリアスが幸せそうに、満足そうに座っていた。

チビは将校に自分の家を示した。彼は涙を流す母親の空まで広げられた両手にしっかりと引渡された。母親が中尉に一生懸命に礼を述べようとすると、彼は空を指さして、涙にかすんだ目で厳粛な様子で、多分次のように言った。

'いいえ、奥さん私にではなく、奇跡的に息子さんを救った天におられる神へ感謝すべきでしょう。'

兵隊はもと来た道を帰っていった。

一体何が起きたんだ？

どのようにして兵隊に発見されたんだ？

ショックにつぐショックを体験したコーネリアスが余談を含めて、少しづつ両親と隣人に話した断片的な話をまとめると次のようであった。

‘僕は仲間と一緒にサボテンの実を集めに出かけた。皆んなが僕よりも沢山取ってるもんだから、僕も夢中にさがした。みんなが行ってしまったあとも、取りにくい赤い大きな実を取りつづけた。

急に、自分が一人ぼっちになったことに気がついた。大声で叫んだが、誰も答えないし、誰も来なかった。

仕方ないので、歩き始めた。

道に出たので、その道を歩いた。

道はだんだん狭くなり、最後にはインディオが通るような見分のつかない道になってしまった。日暮れになって、暗くなってので怖くなって、めちゃくちゃに走った。

暗くなる前に家に帰りたかったから。すごく疲れた。少しばかりのわらを見つけたので、ふとん代りにして横になった。

すぐ、ぐっすり寝てしまった。目を覚ますと、太陽はすっかり沈み、暗かった。

飛び起きて走り続けた。

月が出た。

そのときまで、喉が渇いていることに気づかなかった。朝早く家を出たときから一滴も水を飲んでいなかったから。

水のたまった穴があった。水は濁っていてきたなかった。

テレレ（Tereré）を取る管をバンドの中にしまっていることを想い出した。泥の中に差しこんで、少し吸った。

ずっと気分がよくなったので走り続けた。

足の裏を怪我して、刺もいっぱいささっていたけど一所懸命走った。

突然、灌木と木の枝の間に火の光が見えた。火の周りに人の姿も見えた。

僕はかがんで口笛を強く吹いた。

火の周りの影が立上った。兵隊だった。

兵隊は銃をとって、僕が隠れている方にやってきた。

二人の兵隊がまっすぐ僕の方に近づいて、僕の前に来た。目と目があった。

〝メノニータ？〟、とたずねたので、

〝そう〟、と僕は答えた。

すると、一人の兵隊が二つ銃をとって、もう一人の兵隊が両手で僕を抱きあげ、火の方につれていって、何かを見つけたと言って、ほかの兵隊を呼んだ。

みんな寄ってきて、僕をみた。それから僕をテントの中につれていった。テントの中には将校が居た。ビスケットとマテ茶をくれた。とてもおいしかった。

それから足の裏の刺を抜いてくれて、足とすねとふくらはぎに何か黄色いものを塗ってくれた。

いつ眠ってしまったのかわからない。次の日、家へ送ってくれた〟

（パラグァイ、メノ派学校の読本より）

西瓜のもうひとつの売り方

1933年。チャコ戦争中のことだった。我々のコロニーは建設当初であり、入植者は皆な窮乏に苦しんでいた。

現金収入はなかった。

しかし、畑にできた産物を兵隊達に売れば、なにがしかのお金が手に入った。その年も西瓜が豊作で、我々の入植者の何人かは近くの砦へ食糧、特に西瓜を売りに出かけた。商売は運まかせだった。

兵隊達はいつも腹をすかしていたが、現金を持っていることは珍らしかった。

私も何回か旅をした。そして、いつも畑の作物を売っては収入を得た。

ある日、私はイスラポイへ西瓜を積んで商売に行く準備をしていた。

当時、一台の荷車を四世帯で共有していたので、自分が使用できるまでは数日間待たなければならなかった。

荷車の利用には厳しい交替制が設けられていて、たとえ悪天候とか其他の理由によって、車が使用できなくても、順番は次に移ってしまった。順番がまわって来たので、夜の間に西瓜を荷車に積込んだ。

兵隊達のかすめ盗りの対策として、板で屋根を作り、側面も板で囲こんだ。

夜通し旅を続け、朝早く砦に着いた。砦に入る許可は西瓜で支払った。
右側には歩哨がおり、左側では兵隊が訓練中で、正面奥では標的めがけて射撃訓練が行われていた。従って、商売の方は兵士の休憩まで待つより仕方がなかった。

11時近くになって、あちこちから腹を空かし、喉の渇いた兵隊達が到着し始めた。商売の予感が的中した。無いものは現金だけだった。
いつ支払われたのかは知らないが、彼等は一センターボさえもっていなかった。
大勢の兵隊が荷車を取巻いた。私は盗難よけについての自分の先見の明に大いに満足した。兵隊達は持物との物々交換を申し出た。ワイシャツ、ズボン、上衣、靴、etc.
しかし、こうした商品は軍の所有品であり、売却することは固く禁じられていた。
但、空袋は禁止の対象ではなかった。
空袋はコロニーでは皆んなが欲しがる品物だった。兵隊達は私に袋を提供した。

交換が始まった。空袋一個に西瓜一個。商品が着くと商品が出ていく。私は大いに満足した。

兵隊が新品の袋を持って来て、車の奥にそれを押込む。また新品の袋が着き、車の奥に押込まれる。また、そしてまた同じ事が繰返される。沢山の新しい袋！商売繁盛である。私がふと疑惑を感じたとき、すでに被害が生じていた。荷車の奥の割れ目から、兵隊達が袋を抜き取り、仲間に渡す、それをもう一人の仲間に渡し、彼がその袋と西瓜を交換する。何という商売繁盛であることか！　一体何個の西瓜がこうして出ていったのだろう？　私の後ろには、数個の袋があるだけだ。若者達は笑いころげ、私の怒りなど気にもしなかった。こうして空袋の買入れは中止となった。取引きは終りだ！

兵隊が離れている間に、西瓜を全部盗られてしまう前に立去ろう。
私は二牛力の' ロールスロイス 'を始動させた。が何か妙だ。
何だかまだ判らないが、どこかが悪いようだ。私から西瓜をかすめるため、出発を妨害しようと何かしてるにちがいない。
けど、全く何も起っていない。

私は気合いを入れて、力牛を走らせた。馬引きの叫びと口笛と拍手が私を追いかけた。呆然として、方向を失って、右を、左を、前を、後を見た。しまった！

やっとわかったぞ！　右後輪がいまにも抜けそうなのだ。牛車を止めて、修理を始めた。車軸を持上げるのは不可能だ。なにせ半トンはある。若者がカーニバルのように笑いながら、口笛を吹きながら走って助けにやってきた。
盗賊めが車軸と車輪をおさえているワッシャーとボルトを抜いてしまった。
ワッシャーとボルドがない。
一人の兵隊がボルトを取り出した。もう一人の兵隊はワッシャーを見せた。それぞれを西瓜一個と交換。取引の成立！　私は牛車に乗った。若者達は叫びと笑いと口笛の同じシンフォニーを奏でながら再び私についてくる。10メートル行くとゝ左後輪がはずれた。兵隊達が再び私を助ける。
ボルトに西瓜一個、そしてワッシャーに西瓜一個、秘密出版の辞典に書いてあるいくつかの国の言葉でののしってみても効き目はなかった。右前輪がはずれる。左前輪もはずれる。その度にボルトには西瓜一個、ワッシャーには西瓜もう一個がかかった。
この悪魔の兵隊どもに雷撃を与え給え！
もう一つのチャコ戦争がまさに勃発せんとしていた。
私が知っている秘密の語彙を全部使いはたしたとき、突然、私は自分の感情が変化するのを感じた。
信じられないことかもしれないが、私を囲んでいる恥知らずの若者のように、幸せと満足感を感じた。
驚いた様子で、兵隊達は私の明るい笑っている顔を見ていた。
私は車輪の幅に登って、西瓜を覆っている板をはずし、右に左に全部の西瓜を分けてやった。私の足元には、取引でかせいだ空袋が三個残っていた。
商売繁盛！
若者達は砦の大戸びらまでついてきた。そこでは監視兵が西瓜の関税を要求した。
私は高笑いしながら、むちの先で後を指した。そこには、チャコの少年祖国防衛兵達が高々と腕にせしめたばかりのトロフィーをかかげていた。
監視兵もそれを見て大笑いして、道を開けてくれた。
1939年のことだった。チャコ戦争は数年前に終結していた。
私はアスンシオンのレストランに座ってビールを飲んでいた。少し離れた所で二

人の男が、やはりビールを飲んでいた。彼等は何か興味ありげに私の方を見ていた。私のことを話しているようだと気付いた。
一人は片腕だった。
彼等は席を立ち、私のテーブルに近寄ってきた。チャコ戦争の元戦闘員だった。二人共あのイスラポイの有名なスイカ取引の主役を演じた当時の若者だったのである。

我々は握手し、笑い合い、話し、ビールのおかわりをした。

Peter H. Löwen

メノ教徒の荷車

メノ教徒がヨーロッパから持ってきた四輪車はパラグァイ人によって、当時〝カーロ メノ〟と呼ばれた。
大きな車輪のパラグァイの荷車とは違っていたからである。

そのほかにも、一対の二頭だてのメノ牛車に対し、パラグァイのものは三対、四対と使っていた。

チャコ戦争の戦闘員だったパラグァイの作家・詩人であるDARIO GOMEZ SERRATO はメノ教徒の牛車に大変強い印象を受け、次のような詩を捧げた。

カーロ メノ

良く世話された輝くような牛達の力強い足どりにのって、四輪のカーロメノはすべるように進む。

勇敢な金髪の開拓者、太陽の息子達が汗の収穫を荷台に積んでゆく。

気鋭のらばを兵士がけしかけたとしても、カーロメノは、土煙の中を軽々と飛んでゆく。

ゆるやかに進むのにもよく、飛ぶのにもよく。

けれど、美しい娘が花の荷を山と積むとき、軽快とりりしさはまさに頂点に至る。野性の気品にみちた美しい開拓者の娘はさっそうとしたカーロメノから魂をうばう。

丘を越え、野を走り、村から村をゆくカーロメノが見たい。

パラグァイの荷車がお前を認め、お前のしなやかなリズを知り、冷たい季節を

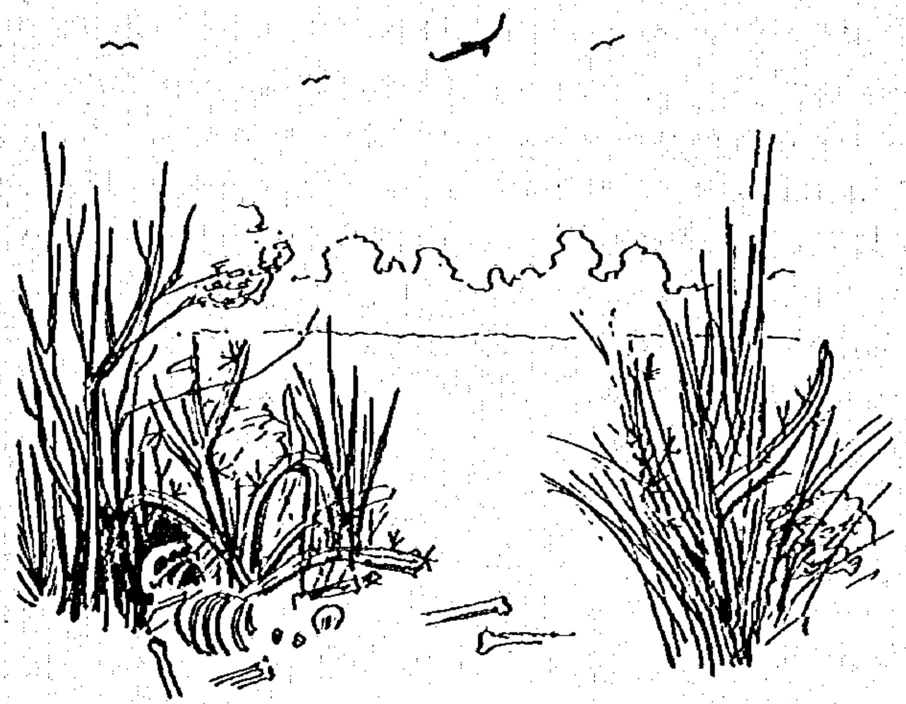
風にむかってよりよく走ってゆけるように。

Dario Gomez Serrato　〔注※〕

〔注※〕：1903年生れ。音楽家、新聞記者及び民族をテーマとする著述家。

1929年、グアラニ語の詩集' Yacy Yateré 'を出版。

砲火の中で



砲 火 の 中 で

ボケロンの戦い

パラグァイ領チャコの主権を争う激しい戦争は小ぜり合いとゲリラ戦で火ぶたを切った。本格的戦争は当時の陸軍中佐 José Félix Estigarriba のボケロン砦の奪回命令が下った時点で始まった。イスラボイからパラグァイ軍が進撃し、1932 年9月9日に攻撃が開始された。

パラグァイの有名な作家Augusto Roa Bastos はボケロンの戦いを次のように書いている〔注※〕

"9月9日(ボケロンを前にして)。

我々はおびただしい血の洗礼を受けた。錐もみのような攻撃が我々に襲いかかった。総攻撃は敵の防衛最前戦で開始され、堡塁を築くことも出来ず、山林にかくれることも出来なかった。正面には東南の方向へ、幅1000 メートル以上の林の切目があって半月状に拡がり、まるで、村の広場のように平担で木も何もなかった。林の先端は、平担な原野のくびれた所まで伸びていた。1回、2回とみさかいもなく分隊が攻撃をしかけるがはげしい機銃掃射によって、とうもろこしの粒のようにはじきかえされる。特にプンタブラバの丘の前ですさまじい銃撃戦が展開されていた。我方の砲兵隊は目測砲撃を行い殺戮戦を有利にしようとした。臼砲や曲射砲は敵陣に落下せず、味方の攻撃隊の突撃路をつくってくれた。両翼の陣営がもろにぶつかり、すさまじい乱戦となって大混乱に陥入った。温存されていた我方の歩兵大隊もまた、乱戦前戦に投入された。敵陣が混乱するのに時間はかからなかった。

しかし、銃撃戦なしに敵兵を退却させることは出来なかった。私の中隊は、最初の攻撃で大きな被害を蒙った。行方不明の中には私の従卒もいた。

午前中、前戦の攻撃は全面的に停止した。凹地になっているところには、おびただしい屍が望遠鏡の届くかぎり続いていた。

その日一日はボリヴィア軍の重機の射撃によって悪寒に襲われたように断続的に震動し続けた。私は、長い間、様々な恰好でころがっている屍の群を望遠鏡でさがしたが、白日の下にさらされている屍の中から私の従卒のそれらしきものを見つ

けることは出来なかった。

勢のよい撃合い。我軍のめくら大砲は茂みの中で突立ってうなり続けたが、その轟音も無役だった。

小銃と自動小銃の銃声の合い間にはまるで風邪をひいて咳をしているような臼砲の音が鳴った。

傷兵の列は道をうずめ、後陣に向かってやつれた、むごたらしい流れとなって動いていた。

夜になった。軍規の弛緩。疲労。無気力。怒り。あきれるほど大きい蚊の群が休みなく我々を襲った。撃退方法はなかった。退却中に肘に受けた弾のかすり傷が火照ていた。しかし、もっと火照ていたのは喉の渇きだった。身体の中まで焼けるようだった。

前線までは水は届かなかった。水を求めながら兵隊はほこりのつばをはいた。

9月10日

大胆不敵な司令官は包囲作戦の展開を命じた。全力を挙げて再編成された兵力が新たに戦闘にいどんだ。

昨日よりもより慎重に、たとえ同じような結果に終ろうとも。

しかしながら、今日我々には新な防衛手段があった。死体の山である。

悪臭の胸壁に保護されて、行きあたりばったりに堡塁の中心を探すことができたので、我々は地面をはって進んだ。

砦はどこにあるのだと全員が自問している。

ボケロンを守っているやっかいな城壁を前に、我々はめくら闘鶏をやらされているようなものだった。

身の毛もよだつような音に合せて屍の海の中で踊るダンス、その砲火や鉛の波は情容赦もなく我々の羽根をむしりとってしまう。空からは黄緑色の飛行機が我々の頭上をすれすれに飛び、産卵魚のように爆弾の雨を降らせ、蛇口をひねるように散弾をまきちらした。

一方、砦には小さな落下傘が投下されたがそれには半ば包囲された兵隊のための氷の箱が乗せられていたのである。ボリヴィアの司令部は部下の健康を考えたものだ。おがくずで保護されたその荷の一つが我々の場所に落ちてきた。

水の弾丸の効果は爆弾の炸裂よりも混乱をもたらしたことである。

9月11日

蒸し暑さ。ほこりの粒子、空気そのものが巨大な火の玉となって我々を押しつぶしてしまうようだ。

渇き、その白い死はもう一つの赤い死と腕を組合ってほこりをかぶって散在していた。

担架兵と同様、水の輸送班にも休息はなく、食糧も与えられない。

後方基地から二個師団に貴重な水を運ぶトラックは1ダースほどしかない。

輸送班は入りくんだ難路を缶を肩にかついで運んでいる。大部分の水は運ぶ途中でこぼれたり、蒸発したり、盗まれたりする。

この48時間に与えられた水は将校が水筒半分、兵隊は煮えたぎるような水が一人当りコップ半分ほどだ。

'鉄の弁当箱'の中に入っていた缶詰の肉は兵隊を元気づけるものであった。

分隊全員が戦線を気が狂ったように放棄し、給水車や冷やしている水缶に殺倒したりすることもある。そのうち二人が我々のすぐ近くで銃剣で突き刺された。

それでも空缶のそばから離れずにひざまずいて盗人には見せしめに機関銃を威嚇射撃しなければならなかった。

〔注※〕: Augusto Roa Bastos: 'Hijo de Hombre'、ブエノス アイレス、Editorial Losado, 1960

ボケロン戦闘の終結〔注☆〕

1932年9月29日

夜が明けかける。命令は実行しているが、重軽機ともこわれてしまい役に立たない。残った銃はわずか。銃剣の用意を命じる。最後の瞬間、最後の小銃兵は傷病兵達を守らなければならない。

各戦区で戦闘を終らせようというパラグァイ兵の声が聞こえる。

将校団を取囲んで脅迫する声も少くない。この'無益'な流血を長びかせようとしているのはボリヴィア将校団であり、当然彼等がすべての結果に責任をとらなければならないだろうと主張している。この騒ぎに対して、我が部隊は沈黙で答え

ている。沈黙は最も勇敢な者を引きつけるもの。たとえ、銃口を口に当てられようと。

闇の中に、戦線の全域にわたって、大きな叫びが湧き起る。この戦区の指揮をとる将校達の氏名はすでにパラグァイ軍によって知られている。

私と話したいといって、私の姓を呼ぶ……。

無益な戦闘に終止符を打ち、互いに握手すべきだという声が強い。最後に、もうどんな抵抗も無駄だと主張する。

少しづつ、分厚い戦列が陣地を侵略している。我々の小銃隊が銃口をつきつけて発砲する。' Corrales ' のHerminio Fretes 大尉が傷つき倒れる。

一瞬ではあるが、敵の前進がとまる。

午前5時。パラグァイ司令部はMarzana分隊指揮官と軍使交換を提案する。将校間であらかじめ合意をとった後、我方からAntonio Salinas Crespo大尉と下士官Carlob de Arita。 相手側より、二人の中佐Aralos Sánchez とSautiriago及びIslas中尉が砦に入る。

彼等は我々の絶望的な状況をよく知っており、このままでは自殺行為だと主張する。Marzanaは完全な壊滅状態にある150名の傷病兵をユクラ方面に撤退させることを要望するがパラグァイ司令部はそれに反対する。彼等の意気込みの中に、自分達の圧倒的な勢力を確信している。我々はむなしく軍使の帰りを待つ。

この瞬間、我々の陣地の附近で激しい戦火が起る。防衛の最後の抵抗である。闇にまぎれて、いくつかの地点を占拠した敵軍が砦の中心へと総攻撃をかける。耳をつんざくようなわめき声で戦闘は終る。しかし、敵兵は銃剣で我々のとどめを刺す代りに、我々に水と薬品を分けてくれる。不思議な疑いようのない終結。

私の戦区では、我々はBrito少佐、R.1.2 "Ytororó" のBatallór の指揮官が捕虜となる。

睡魔におそわれて、全体の出来事をうまく捕えられない。知覚が麻痺してくる。手さぐりで歩く……。

パラグァイ軍の将校は我々を目隠しをして第二師団までつれてゆく。

ボケロンの戦闘は終った！

パラグァイ軍の第一師団の指揮官Gaudio Nunes大佐は、怒りっぽい人物で、

Mazsana がたった 240 で戦ったことを信じない。夜間に死んだ兵士の数をかぞえさせる。まだ森に兵隊がひそんでいると信じているためだ……詰問の要約：機関銃はどこにある？ 一答：使用不能です。

君の旗は？ 誰も旗のことは知らない。睡魔に目かくしをされたままで「緑の地獄」の曲りくねった道を捕虜収容所へ向かって私の兵隊達が胸を張って行進するのを見る。

Gaudioso Núnez 大佐、パラグァイ軍第二師団指揮官は人間味のある人物で、我々を彼の司令部に引きとめた。

将校も兵隊もじっと彼等の戦争捕虜を観察している。我々にコンデンスミルク入りマテ茶とビスケットをくれた。

私はこの食糧を' コールビーフ 'の完全な缶とまぜ合わす。我々の誰もがご馳走を丸のみにする。無理に食べるとまた倒れてしまうかもしれないのに。突然、Mazsana 大佐が現れ、将校の一団につれられて道を出てゆく。我々は呆然として彼を眺めている。喉が詰まる。涙が乾いた目にあふれてくる。

すすり泣きを抑えることはできない。

Gaudioso Núnez が命令する。

' パラグァイの将校及び兵士、これら勇敢な者達の涙に敬礼。戦士も泣いてよろしい！ 気をつけ！

全員が不動の姿勢をとり敬礼する。彼等も泣いている。我々に打勝つまで２３日間にわたって激しい戦闘に耐えた戦士である。

（注※）：Albertó Taborga T中佐著。

' Boguerón , Diario de Campaña '

ラ・パス、1970 より抄出。

ボケロンのサマリア人

1932 年 9 月に起こった。パラグァイ軍とボリヴィア軍はその地域の唯一で最も重要な水を求めて、ボケロンの深い草むらの中で激しく戦った。攻撃側も同じ救いのない残忍さで戦った。けれど、弾丸や銃剣よりも凶悪で、恐ろしいのは敵も味方も気狂いにしてしまう喉の渇きだった。

我等の祖国（パラグァイ）の元看護婦があの戦場の不思議な話を我々に語ってくれた。

何週間も、同じ激しさで、ボケロン砦の支配をめぐる戦闘が続いていた。今や、決戦も真近なことが感じられた。

連日、我々のパトロール隊は偵察に出かけたが、度々敵との激しい撃ち合いがあった。そうしたボリヴィア軍パトロール隊とのある日の交戦で、相手側に多数の死者と捕虜が出た。

捕虜の何人かは重傷を負っていた。

敵の負傷兵をイスラポイへ送ろうとしたとき、ボリヴィアの若い兵隊が私をつかみ、激しくすすり泣きながら、捕虜収容所へ送らないでくれと頼んだ。

彼はいつも自分と共に祈り、自分のために祈ってくれている母の居る家へ戻りたかったのだ。私は彼をなだめ、私もキリスト教徒で、同じ神に祈るのだということを説明した。

若者の目は輝き、傷の痛みも忘れ、母のことや母がキリスト教徒の生命を非常に大切にしていることを語った。

私は彼を私の胸にやわらかく押しつけて抱擁してやり、いつか元気で無事に家へ戻れるように、キリスト教徒と兄弟としての義務である人道に従って扱うことを約束してやることしかできなかった。

このように、世界中どこにでも、血なまぐさい戦場にまでキリストの兄弟に出合うものである。

Ernst Bitzen

一人の敵

中隊の先頭をゆく私は、荒野に横たわる彼を見つけた。

彼は生気を失った目を私に向け、土色のくちびるを動かし、震える手をあげて苦しそうに言った

"水、水、神よ、一滴だけでも！"

その声はうめきにすぎなかった。

私は彼のそばにひざまずき、すでに黄色くなったほこりだらけの顔をふき、水を

与えた。
死にかけのボリヴィア兵は大きなため息をもらして、息をひきとった。
私に何と言ったのか、何と言いたかったのか私は知らない。
ただ、あの不透明な冷たいガラスの目は永遠に感謝をこめて私を見ているだろう。

Hugo Rodriguez Alcalá（注※）

〔注※〕：パラグァイの詩人、1917年生れ、教授、文学歴史家、法学、哲学及び文学博士。
米国在住。カリフォルニア大学教授。

マヌエラ ビジャルバ NANAWAのヒロイン

止まれ!!
むちの音のように、隊長の声がチャコの静かな星の夜をさえぎった。
ほこりだらけで憔悴し切った二人のパラグァイ兵士が震えながら手をあげた。
パトロール隊は彼等を最も激しい防衛戦の最中にあるナナワ砦につれていった。
二人の脱走兵。脱走には多くの作法は要らない。大佐はすでに処刑執行命令に署名した。日の出に、銃殺隊は命令を実行する。
目隠しをされる前に、若者の一人が手を上げて、最後の願いを申し出た。
大佐がもう一度だけ彼の言うことを聞きとどけてくれるように。
その願いが認められ、イラサバル大佐は大隊の前に現れた。
'大佐'、と落着いた声で色あせてすり切れた軍服の少年は言った。
'私のために慈悲をお願いするのではありませんが、私の妹を死から救って下さい'少年は彼の相棒の方を指さし、'これは私の妹、Manuela Villalba です。逃げるように説得したのは私です。彼女は無実です。'と言った。
処刑は中断され、妹と呼ばれた兵士は連隊の軍医のところにつれていかれた。
しばらくして、脱走者は17才の処女であるという軍医の報告があった。
マヌエラ ビジャルバは次のように大佐に語った。
'私は兄を一人で恐ろしい戦争にやりたくありませんでした。そのため、私は彼と一緒にアスンシオで兵籍にはいりました。
誰も気付きませんでした。我々は一緒に乗船し、カサード港からはチャコの奥

地に向いました。私は兄のそばを離れませんでした。

こうして、イスラポイに着き、最初の戦闘に参加し、常に砲火の中にいました。YUCRA と CABO CASTILLO などです。

サアベドラ戦闘でのkm 7の恐ろしい大虐殺で、兄は負傷し、連隊に残れるように私は看病しました。

こうして、戦闘に明け暮れる一年が経ぎました。私は自分の力が限界にきたことを感じていました。

男性のような強い神経はありません。鉛の雨と機関銃の砲火は男性を鍛え上げますが、逆に私は弱気になってしまいました。

一昨日、敵のナナワ攻撃で、手榴弾と爆弾の激しい雨を受けて、兄が言いました。

'マヌエラ、もうお前は耐えられないよ。俺が家までつれていって、その後俺は前戦に戻る'、と。

私は彼に従い、出発しました。私達は二晩歩きました。TABAPY で私達の村のことを考えました。それからパトロール隊に出会ったのです……。

'兄は脱走兵ではありません。ただ、私を家まで送り届けたかったのです'、と彼女のくちびるは真青になって震えていた。

大佐は彼女の話に感動した。

ここに、人間の権利が軍隊の命令に勝った。

判決は無効となり、二人の脱走兵は伍長に昇進した。

マヌエル ビジャルバは衛生隊へ看護婦として派遣された。アスンシオンの新聞には、次のような見出しの記事が現れた。

― 女性兵士、ナナワのヒロイン

Peter P. Klassen により西語より独語へ翻訳。アスンシオン' ABC Color '紙より抜粋。

奇　跡

' 1933 年 1 2 月。パラグァイ軍はアリウアタ (Alihuata) とサアベドラ (Saavedra) の間のカンポビア (Campo Via)において、ボリビア軍の第Ⅳ及

び区師団を追いつめた。

死の包囲網を破ろうとしたHans Kundt将軍のすべての努力は無駄に終った。包囲された場所では、絶望的な混乱が脱走兵、反乱兵、戦闘員、負傷兵の間でうずを巻いていた。

'踏みつぶされた蟻のように頭も尻もない'

'ボリヴィアの作家Augusto Céspedesはその著書'Sangre de Mestizos'の中で、'El Milagro(奇跡)'(注※)というタイトルで小話を書いている。カンボビアの戦闘を想いおこさせてくれるものである。

約15名の兵隊の一団がパラグァイ軍が攻撃を開始したとき、山中にめくらめっぽう逃げこんだ。

一団の中には、古参兵のランディバル、従軍僧、機械工のモリーナ、ドイツ人で看護夫のクルーガー、ムラート(黒人と白人の混血)のボニエがいた。

来る日も来る日も、この集団はボニエの後に続いた。彼は山刀で茂みを切り、道を作った。水はなく、12月の灼熱の太陽が輝いていた。次々と道に足を投げだしてへたりこんだ。生きている者は死にかけた者をまたぎ、水を求めて歩き続けた。

その後に生じたことを、生き残った者は奇跡と受けとめている。

以上は小話の最後の部分である。

―ここ!……ここ!……ボニエはかん高い声で示した。

山のすきまに二人のパラグァイ兵士のミイラがあった。ぼろぼろになった軍服を着て、地面に顔を半ば埋め、考え込むような姿勢の骸骨が横たわっていた。

クルーガはそれを見るとドイツ語の歌を唄い始めた。

ミイラは多分㎞12からの撤退途中逃亡したパラグァイ兵だろう。3月からここにあるにちがいない。彼等は水を探してここへやって来たものと考えられる。

'ここから脱出しなければ'、と私は考え、恐怖にかられて叫んだ。

その瞬間、銃声がした。

我々がかけつけると、モノーナがクルーガーの前にひざまづいていた。

クルーガーは上半身裸で横たわり、頭のまわりは後光のように血が流れていた。

―シャツをぬぎ、座って、発砲したんだ'。

クルーガーの右手にはピストルが握られ、ほこりにまみれた赤いタンポポがそれを被っていた。ランディバルがピストルを取った。

—〝そうさ、ランディバルは言った—

この生まれの悪い坊主はいつも我々を捨ててゆく。

我々は歩き続けた。先へ行きながら、ランディバルが私にささやいた。

—〝クルーガーのように我々が死んだときのために坊主を連れて来たんだぜ。冥福の祈りを皆なにささげてくれるようにな。

私は同意した。

—〝悪たれ坊主め。やってしまうか？

—〝お前やれ。俺は疲れている。と私は彼に答えた。

—〝俺も同様だ。ほら取れよ。

彼は私にピストルを渡した。私はズボンのポケットにしまった。

しかし、少し歩くと、ピストルの重さでズボンがぬげてしまうのではないかと思えるほどの重量感を感じ、私はピストルを木の根元に置いた。

一歩一歩がまるで鉛のズボンと靴をはいているかのように重かった。

我々は七人に減っていた。暑い大気の中で狂気がくるくると廻っていた。独楽のように廻り、その針が私の焼けた頭骸骨の脳膜にくいこむようだった。

従軍僧は声をあげて祈り、しばらく礼拝の讃美歌を唄った。

ランディバルは、その度に私に催促をした。

—〝ピストル！　坊主に一発ぶっぱなせ！　黙れ、悪たれ坊主！

ほかの者はマッチをこすればいまにも火がつかんばかりの空気の中を早足で歩いた。

モリーナが叫んだ。

—〝カマチョ大尉！……　私のカマチョ大尉！……私はここに居ます。私はモリナナナナ！

変らないのはボニエだけだった。彼は神のように一定で、変らず、猿のようにむさくるしい身体で、ズボンからひざをむき出しにして、水をたたえた井戸のような生涯変らない黒い目をして、山刀を決して放すことがなかった。

高い木に登って、遠くを調べるようなことはもうしなかった。水を探すためにグ

ループを見捨てることもなかった。けど、山刀はしっかりと握っていた。

シス…サス…シス…サス…シス…時はゆっくりと刻まれた。苦痛の中でその音は熱にあえぐように等時間隔でくりかえされた。

もう話しかける者も叫ぶ者も居なかった。

ほとんどの者がひざを地につけんばかりにして歩いていた。

それはまるで切断された尺取虫のように、機械にあやつられたようにはいずりまわり、檻の中の猛獣のように無意識に、陰気に歩き続けるのであった。

顔をあげると、まるで見えない糸に首つりされているように、頭を前にたれ、両手をぶらりと下げ、狂犬病にかかった犬のように口から舌を出し、周りが何も目に入らないように歩いている仲間達の姿が目に入った。

ズボンの外でまきつけたボロボロのシャツは一様にグロテスクな瀕死の状態にあるものの恰好を示していた。

我々は宇宙の敵である山の中に居た。暑さは激しくなかった。

もう終りだ。すでに我々は秩序ある部隊ではなく、半ば、昏睡状態の集りにすぎずポニエの生命力によってのみ支えられていた。

やっと、正午近く、最後の力をふりしぼって、池の形をしたくぼちを囲んでいる樹林に到着した。けど、水はなく、白色化した底には亀裂が走っていた。

すると、疲れを知らないポニエは山刀を地面に突きさして横になった。続いて一人、また一人と全員が休息したいという無限の欲求の中にたおれこんでいった。

私には、司祭が現れ'主よ、主よ、御身の手に……、わが魂は……'とささやいているように思えた。

私の意識の中では、生きる願望の最後の火花も消えていった。

不思議な感触、遠くの方からやってきて私の額の上に落ちる……。目を開いた。

水滴。

一滴、二滴、三滴、私の知らない鉛色の太陽の無い風景があった。

山はいなご豆の木の背がとり肌を立てるような冷たい風に震えた。

水滴、水滴だ!……それから枝の茂みに突き刺す細い線が、たちまちにわか雨の透明な幕を作ったかと思うと豪雨となり、激流となって両手を拡げた我々の身体の上にかぶさってきた。

奇跡だ、奇跡だ！という言葉をくり返しながら、仰むけになってはいずり廻り口を開き、手をひろげて全身で雨をうけとめた。雨の音は透明な天の機関銃のように反響した。

それは確かに奇跡だった。雨は１０分も降っていなかったが、くぼ地に溜った水で我々はたっぷりと渇きをいやすことができた。それから南へ500メートルもゆくと、ランディバルが言う‘火口’に似た乾いた山しかなかった。

にわか雨は我々を生きてサアベドラへ、そしてバジビアンに届けるために必要な周囲だけにしか降らなかった。

但し、ポニエを除いて。

彼はその奇跡の日から数えて三日後、ムニョス砦の砲撃で榴弾を受けて死んだ。

〔注※〕：Augusto Céspedes：‘Sangre de Mestizos’ラ・パス、1969

無言の三日熱

（一ボリビア兵士の詩）

チャコ

蒼白く、遠い地獄

おまえは僕のランプに近づく。

塵埃の口づけに酔いしれ

そしておそらく黒い雨の鉄条網の中で

死んでいるおまえの心臓を

僕は見つけたい。

癒せないおまえの風景は平らな午後だ。

そこではハエ達のレコードが回り

無言の三日熱に冒されたおまえの木立の

灰の冠の下で

死んだ人間や動物達のために

青緑のレクエイムを奏でていた。

斬首の匂い、ガソリンの匂い。
そしてときには
穂積木の聖なる匂いが
おまえの小道の向うに続く
あの世の夢を焼いていた

おまえの平原……おまえの石灰の発疹
渇きの幻が白い渇きとなって
おまえの地平線にまで広がり、
そのときおまえの敵はぐったりと
わら草原の陽射しの下で眠った。
(すべてがおまえの中で眠っていた。
死神だけが目覚めていて、
ブレノの(※)片目で僕等を見ていた……)
おまえの森のシンフォニーは
おまえの黄色の腕の中に
死に伏していた。
おお、緑の植林計画のしゃれこうべ!
おまえの運命は渇きで切断され
ひだのように刻まれた永遠の道は
おまえをやわらげられなかった。
おまえの女達、それは渇きと距離。

チャコ、葬られていない国
森の中に迷い込んだおまえの魂は
数世紀のちにまた乾いてしまう。
おまえの魂
思い出もなく終るおまえの生涯の底に
存在しない水の鏡。

おまえはいつもトラックの側にいて
鉛色をし、不吉で陰うつな夢を見た。
そしてどこかへ行ってしまったおまえモンスター
おまえはもう決して僕等の歌から離れない。

II

磁石を持ってこい、死んだ兄弟よ
そしてチャコを生命の方角へ向けよ。

チャコ
僕は僕の夢の地図の中におまえを見る。
あざみは花咲くとしても、おまえは
一本のあざみのように突き刺された
僕の祖国だ。
なぜならアンデスを追われ、制服の秋に
おまえの木々の下に倒れたインディオ達が
彼等の血でそこを灌漑したのだから。

おまえの砂の白いページに
はげたか達の影がおまえの歴史を書いた……
そしておまえは悪魔の国から赤い硬貨を取りに行った。

幻の工兵大隊が
おまえの落日の溶鉱炉で
血を溶かした。

叫喚と大砲がおまえを耕し
おまえのバラを咲かせた。傷が
おまえの果実を熟れさせ、手榴弾
おお、責め苦の庭園よ！……

すでにおまえの風景は終った。
すでにおまえはおまえの木々の骸骨の下に
兵士達の骸骨を抱えている。
チャコよ、いまやおまえは祖国なのだ。
おまえの井戸の底に存在しない魂を求めつつ
おまえの腹の中に埋められた死者達の。

煙草をつけたまえ、死んだ兄弟よ。
この地獄の蒼白い焔の中で。

アウグスト・セスペデス〔注※〕

（※訳注）

ブレノ：紀元前390年にローマに侵入したガリア人の首長

〔注※〕：ボリヴィアの作家，1904年生まれ。
母国において高い公職につく。
' Saugre de Mestizos '（1936）は彼の著名な作品の一つで、
チャコ戦争の物語よりなる。

平和、平和

1935年の聖霊降臨祭の土曜日だった。兵隊を乗せた二台の軍用トラックがトレボルからフィラデルフィアへ近づいてきたときはすでに日が暮れ始めていた。

兵隊達は喜びの声をはりあげ、その歓声が辺にこだましていた。兵士達は平和平和！、と歌い叫び、その声はすでにかすれていた。

まもなく、フィラデルフィアの全員が通りに出てきた。感動的な言葉で将校が平和条約が調印されたことを告げた。

今度は彼等が叫んだ。ウァー！　共和国万才！　大統領万才！　エスティ　ガリビア将軍万才！　メノ開拓地万才！

愛国主義に感染してしまった我々の子供達はパラグァイ国歌をまだ知らないので、' Deutschland , Deutschland über alles ' とドイツ国歌を歌い、皆と張り合ったのである。

同じ夜に近くの村にもニュースが伝えられた。夜通し、近くの森や畑に、歓声と歌声と歓迎の銃声が聞かれた。

メノ教徒の家では、神に感謝する人々の祈りの姿が見られた。

聖霊降臨祭の期間を通じていたるところに歓喜が満ちあふれていた。

数日後、平和条約はまだ調印されておらず、休戦協定のみが調印されたという情報が届いた。

翌週、コロニーの上空に二機のアルゼンティンの飛行機' Junkers ' と12人乗りの近い三発動機型の飛行機がやって来た。これらの飛行機には、戦争を終結させるためにやってきたアルゼンティン、ブラジル、チリ、ペルー、ウルグァイ及び米国の代表団が乗っていた。

休戦情報が確認されると、Fernheim コロニーの村長は共和国大統領と前線の総司令官に次のような電報を送った。

' Fernheim コロニーは閣下に対してチャコの平和のお喜びを申し上げます。願わくば恒久的平和が築かれたことを。閣下に神の栄光あれ！'

署名： J. Siemens 村長

6月17日司令官からの返電

' 戦争の終結に対する皆様の祝福を心から感謝致します '

署名： 将軍 Estigarribia

同19日、大統領より返電

' Fernheim 入植者各位に深く感謝し、私の熱烈な挨拶と祝福を申し上げます '

署名： Agala , 共和国大統領

戦争終結を祝う簡素な式典が、具体的な事件の報告を受けた後の25日に挙行された。

式典は国歌、祈り、演説の順に Rosenort の Peter P. Klassen 教授によって進められた。教授のすばらしい語り口は我々に1932年戦争が勃発した初期の頃を思い出させた。あの戦争が三年も続こうとは誰が想像しただろう。我々のコロニーは何度となく戦争の脅威にさらされた。我々を苦悩と労苦から守ってくれたのは司令部の模範的な軍規だった。

パラグァイ軍の勝利は名誉ある休戦を勝ち得たという事実だけでなく、彼等が立

派に装備、武装されているという事実に要約された。パラグァイ軍の兵士と将校の前に帽子をとって敬意を表わさなければならない。

同時に、現在、戦争の犠牲になった息子や夫に涙を流しながら、悲嘆にくれる女達のことを忘れてはならない。教授は将校団から集めたデータによって、国内や前戦の政治的現状に簡単に触れた。

'さて兄弟達よ'講演者は終りに言った。'我々の祖国の旗の美しい色とその意味を知ろう'

'白：平和！　平和は三年の激しい戦闘の後に、我々の愛する祖国に再び甦えった。我々もコロニーとコムュニティに平和が続くよう努力しなければならない。

'青：自由！　ソ連で我々が説教されたような自由ではない真の自由。

我々は自由をはきちがえ悪用してはいけない。我々が広く自由を享受するとしても、義務を行う自由もまた享受しよう。

行動的な共和国大統領Dr. Eusebio Agala天才将軍（後に元帥）José Felix Estigarribia とパラグァイ共和国に万才を三唱して、式典は簡単に終った。

Nikolai Siemens

'Mennoblatt' No6－1935

チャコへ報られたもの

ボリヴィア：	死者	65,000人（人口の2％）
	US$	228,660,000
パラグァイ：	死者	36,000人（人口の3.5％）
	US$	124,500,000〔注※〕
Mennoコロニー：	1927年、チャコへ向う移民1765名のうち194人死亡（ほぼ11％）	
Fernheimコロニー：	1930年、チャコに入植した移民1437名のうち94名死亡（6.5％）〔注※※〕	

〔注※〕　D.ZOOK資料：'The conduction of the Chaco War'

〔注※※〕W.Quiring資料：'Deutsche erschliessen den Chaco'

エピローグ

エピローグ

40年後

ホセ　マリア　ソバローラ　マット（注※）

風をさえぎるものがないフリエスランドの広々とした道路を時速70か80㎞の安全運転で走りながら私の同行者ペーテルクラセン氏―　クロネリウス　ウフェルド氏による翻訳されたこの本のドイツ語版の著者である―　は春を待つ薄緑の新芽、いくつか咲きだした花群、めったに見かけない〝パラトード木〟のあでやかさ等の美しさを私に解らせようとした。変化のない平野には、絶え間ない耕作を必要とし、生命を甦らせ肥沃さをもたらす雨の時期を逸してはならない牧草地がみえた。

私は別のものを見ていた。悪魔子のように軽くてしつこい埃塵にまみれたあの頃のひどい道路とのえらい違い、その道路は、戦争中、必要に応じ細くしたり、連結したりしている軍用装甲車の車輪、エンジン、むせるようなほこりのにおいが充満していた。思い出すのは目、耳、肺に入り込んで、血まで白くするのではないかと思われたあのどうにもならない埃りのことである。

ペーテルはなおも、景色の美しさ、丸々と豊った家畜類の温和さ、村の軒を並べる家々のこと、教会にもなったがっちりした学校、翹りにとけこんだ誇らかな木々、年に何度も発生したり、広範囲に広がったりした浸水との戦い、モーロ人のあでやかさはないが、それでも規則正しい音を鳴らしていた釣瓶の音等について語り続けていた。車を停めると、キジやひばりやピリリータ鳥のさえずりが聞こえた。幼少の頃12時間も夢見続けたカラスの静かに高く飛ぶ姿も見えた。自然のすべてのハーモニーが強い静けさの中で歌い息づいている中で、地獄のようなあの頃の荒地がよみがえってきた。そこには、32年から35年の出来事が凛い縮哭していたのである。

人は己の体験を捨てきることは出来ない。時そのものが経つということは、我々が現実と称することがらをその場面、その場で自分のよいように変えるということである。従って、体験と現実が一致することは難しいし、各々が異った自分の鏡を通して物を見ることになる。中央の林を通り過ぎながら、その重苦しい草むす部落を賞讃する気にはなれなかった。

私の相棒は、全く別の気持でその景色をみていたのである。

「ペテル君はこの地を愛しているんだね」というと「そう、愛しています」なんのためらいもなく、ごく自然に答えた。「君は40年間、この地で、この地のために戦ってきた。これこそ生涯の事業だったわけだ」

私は自分の造った大理石の像に恋いこがれたピグマリマンの伝説を思い出した。それは"クワイ河にかける橋"のきびしい大佐や愛する作品をあがなうために息子を犠牲にした神も含めたすべての製作者達との対比においてである。

すべての事業は、一つの思想、一つの信仰、一つの意志が愛と結合した時にはじめてすばらしきものとなる。

フィラデルフィア―豊饒なる土地―は力強い。まるで希望が達成されるという約束の勝利の証しのように。それは、働くことを知る者には常に答えてくれる自然と土地との理解ある対話によるものである。清潔で、まっすぐな大通りはその思想のいかなるものかを示している。手入れの行きとどいた家々は、きびしい夏の暑さや冬の荒々しさに備えてつくられていた。加工場やコロニー全体の深い信頼の枠である自治体はまとまって配置されている。皆が悲惨ではないが一様に貧乏で、金持ちなんか存在しない。皆が均等に向上することは励みでもあり、また心安らかなものである。幾つかのちゃんとした病院のなかでも山の中にある精神病院は最も調和がとれ閑静でがっちりしていることで知られていた。教会や墓は十字架にいたるまで、シンボルのようにひかえめである。偶像的なものは全くなく、唯、文字のみが書かれているに過ぎない。

村の周辺には人家が広い面積に散在し、そのまわりは平野となり、牧草地となって種々な家畜を飼育している。農機械は金髪のメノ教徒や黒髪の土着民によって運転され行ったり来たりしている。一番古く、大きいメノ植民地の隣りにはローマ、プラタが出来たがメノ教徒の一番新しい植民地は、ネウランド(Neuland)で徴兵問題から逃れた人達によって第2次世界大戦後に建設されたものである。

教育組織は長期に亘っている。伝えるべき文化遺産が多いし、世の中には習得すべき新しい事柄や考え方があるからである。最大の価値として考えぬかれた方法で、より良い運命を切り開くようになっている。この国の一員となり、思想の手段としてのスペイン語の勉強が要求されているからである。これは簡単な

ことではない。長年の地理的孤立状況から脱け出すことである。共通語はグアラニー語ではなく、ドイツ語方言であるが、これも長い、うち続く移民生活によって変形したものである。種々な言葉の土着語がまざっており、グアラニー語で表現される。パラグァイ語もそうである。正式の教育プログラムに則って、次代の共通語を習得するために真剣な努力がなされている。さしあたっては、5つの言葉で放送するラジオが設置されている。

土着民は自由に往来しており、恐しい評判のあるモロ族も来るようになった。宗教的注意深さで、徒党を組んで折触してくる。彼等と交流する橋を架け、我々の社会に参加させるように努力している。それは善悪は別にして、後退は許されないのである。仕事を与えたり、彼等のために仕事を作ってやる。忍耐強い教育を施し、衛生面で援け、耕作するためと土地を獲得してやり、協同組合に入れてやり、何等区別なく購販売も可能にしている。彼等を手助けし、助言してやる。とりわけ、彼等自身がその幸福を求めて、行きたいところへ行かし、残りたい時には残るようにしてやる。彼等が信仰に従って世界の中で苦しんできたのでユートピアの建設を期待せず、信じず、理想の生活形態を押しつけるのではなくて、親切な手を差しのべ、やさしい言葉をかけてやることなのである。土着民問題は難しくいたるところで幻滅し、批判されていることを知っている。しかし、他にどんなことが出来るのか他人にも問い己自身にも問うているのをみてきたのである。自分の意志で、共通の未来を構築しようとする土着民のためには、土地の購入確保がなされている。あらゆるところから来る時、その事業が魅力をもつものであろうし、種々な種族で、種々な言葉をはなす1万人のインジオがメノ教徒と共に生活しており、何人も去ろうとする者に対しては止めることは出来ない。

メノ教徒は、兵役免除の宗教的特典とチャコ居住という条件でこの国に受入れられた。1921年この特例を認めた法律514号が延長された時に、パラグァイはチャコに対する領有権を証明する必要に迫られていた。河の右岸沿いは多くの施設があったが、西側内奥部は砂漠であった。軍事砦の建設は力の誇示であり、権利の根拠として平和的、継続的領有権を主張する必要があったのである。そのためメノ教徒は国の都合など知らずに、かくも遠く離れた最先端の砦に僅か数キロメートルの場所に植民地を設定したのである。弁護するため、何度も何度も繰返し

た如く、メノ教徒の植民地は ― 国の主権の下に ― 我々の権利を証明したのである。

このような形で、海外からやってきたこの平和な民、宗教的反戦主義者は、パラグァイ人さえ誰も経験しないような戦争体験を間近に味うこととなった。

ここに掲載された各々の物語から、一つのはっきりした事実が浮かんでくる。総司令官、中間の将官、下級兵士にいたるまでこの浮き世離れした植民地に対しては、極力犠牲や迷惑をかけまいとしたことである。勿論、すべての組織というものにありがちなことだが命令は、伝達方法、時間、環境、とりわけそれを実行すべき人間によって変形するのである。

たとえ、司令官の意志がそのまま伝わらない場合があったとしても怪しむに足りない。パラグァイ軍は軍律厳しい中にあっても個人的な小さな悲しい出来事に対しても心を痛めるような非常な寛容さを持ちあわせていた。このようなことがらがどこかの部隊に起った場合明白な形で表われる道義を支え、苦難に立ち向い、耐え、そのために命をかける意志を重んじるのである。

事故はさけることが出来ない。長たるものが常に悩むものは何かにつけ情報不足のままで行動する必要があることである。そこから一歩間違えば誤ちや悲劇につながる。しかし、戦争とは結局何なのか。多数の病人と死者を伴う誤りのプロセスなのであろうか。

原作者はこの本のスペイン語版には我々の気持を傷つけないように悲痛な物語りをはぶき、菓子屋の戦争のような表現を避けようと望んでいたが、私はあえて反対した。ある証言が誤りであることはありうる。しかし、誠実であるはずである。事実を誤認することはありうる。しかし正直に述べているはずである。その上、パラグァイ自体がパラグァイ的なものを裁くのは許されており、だから己自身を裁いているのである。

「君はここで生れたのか」

「小さい時に来たので、ドイツ系パラグァイ人です」

「もし、あそこのトレードにもう一度、敵の軍隊が現れ、ようやく築き上げた事業を破壊しようとしたら、その防衛に立ちあがるかね。それとも神の意志表示として破壊されるにまかせるかね」

「全部に答えることは出来ません。しかし、このテーマを戯曲' チャコ戦争1930 'にすることを考えました。そこでは意識の二者択一という極限状況を扱うつもりです」

どちらを選ぶにしろ相当な勇気が必要です。このジレンマから如何にして抜けだすことが出来るのか、自分としては、破壊を容認することが出来そうもありません。絶対に！

〔注※〕 1917年、アスンシオン生まれ、作家で劇作家。

' Follaje en los ojos 'やその他の公募入賞作品の作家。

JICA